つて見ると僕の卓子に、四人分のセルビエットが附いて居る。居合せた主人に聞くと、親父はスリー、ナイス、ラーディースだといふ。

食事の時に落ち合つた其の所謂ナイス、レーデースなるものはと見ると、前のピー夫人を合せて、其の友達の老令嬢が二人、二人ともずつと四十を過ぎたスピンスターで、腋臭のひどい人であつた。

夫でも此の三人は「同卓の友」だといふので、僕が倫敦出立の節は、丁寧に手を握つて、分れの挨拶をしたのである。

箸と酒と福神漬

ピー夫人と僕とがまだ差し向ひであつた頃、ロビンソンと云ふ脊の低い、顔の扁たい、色の赤い四十位の剽輕な男が、十日許り僕等の卓子へやつて來た。此の人商用で三四度

横濱に來たことがあるといふので、ちよい〳〵日本語を話す。時には小聲で金毘羅船々位を歌ふ。酒が好きで、能くちび〳〵とウヰスキーを飲んでは、途方もない大きな聲で、愚にも附かぬ冗談を言つて人を笑はせる。自分のウヰスキーが亡くなると、僕の葡萄酒を借りに來たり、ベテーに懇願して竊に主婦のウヰスキーをせびりにやる。元來、英吉利では酒の賣買が喧しくて、免許のない者は賣ることが出來ぬ。其の又免許を得るには恐ろしい金がかゝるとかで、大抵の下宿では酒は出せない。隨つてお客が銘々自分の飲みたい物を買つて來て、貯へて置くことになつて居る。之が政府の收入を增す爲であるか、國民の醉酬を防ぐ爲であるかは知らぬが、兎に角、英吉利に似つかはしい野暮臭い規則である。

ロ君は、時々日本のことを思ひ出して、浴衣掛か何かで、胡坐を組んで、ゲイシヤ、ガールを前に置いて、お酒が飲んで見たいなどゝいふ。浴衣とゲイシヤはちと困るが、

箸と酒と福神漬

酒ならば造作もないことゝ、僕は箸を三四膳と酒を二三合と福神漬一鍋とを、日本倶楽部から仕入れて來て、或夜晩餐の席で、それと許り ロ君にやつた。ロ君は大に喜んで、早速得意氣に箸を使ひながら、福神漬を取り出す。見ると中々巧者に箸を使ふ。

凡そ、英吉利人の指先の働きの鈍にして且のろ臭いことたるや、呆れる。其の不器用なことゝ言つたら、僕が偶紙片を扱いて、さつと勘進捻一本拵へて見せてさへ、日本人は器用だとて感に入つて居る位。如何に況や、僕が二本の箸を片手に持つて、小さい小さい豆一粒も、目にも止まらぬ麪包の屑一つも殘さず、摘み去り摘み來るを見ては、何でふ面白がらでやあるべきで、之が忽ち食堂中の大問題となつた。紀念の爲に一膳呉れといふ者がある。何ういふ風に持つのか敎はりたいといふ者がある。何の木だと聞く。ビステキの大きなのが出た時などは何うすると聞く。米の飯を食ふ時は、米粒を一つ一つ之で挾むのかと聞く。聞く許りで滿足せずして、態々自分の席を立つて見に來る者さへあつた。殊に此の日僕の持つて來たのは、皆な孕み箸であつて、之をぱッと二つに割ると、中から小楊枝が飛び出すので、一同は益感心して、平生はすましたピー夫人でさへ、頻に妙々と唱へた位である。

ロ君と僕とは正に大得意。僕は滔々と箸の講釋を初めた。『凡そ箸に四種あり、木箸竹箸角箸金箸是なり。木箸を細別して二となす、曰く塗り箸、曰く塗らず箸。塗らず箸、一に稱して杉箸といふ。』といふ樣なことから、日本では何でも彼でも食ふ物ならば、箸で取る。此方の樣に、手で摘まむ樣なことはせぬ。一度使つた箸は其の儘棄てゝ仕舞ふ。誰の使つたとも知れぬ肉刺を、又洗つて使ふ樣なことはせぬ。一體人の指を象つた樣な肉刺なんどは、其の背指で摘んで食つた時の形を存したもので、野蠻も極まるなどゝやつて除けた。

其の間に、ロ君は肴の肉を箸で摘み上げて、高くさし上げて見たり、左右に振り回し

て見て、之でも落ちぬといふ所を見せたりして居たが、はては調子に乗つて、福神漬をお向のピー夫人初め近所隣のお客に持つて回り、次にはなけなしの酒を、彼地此地と注いで回つた。福神漬は、誰一人旨いと言はぬ者はなかつたが、酒に至つては、シェリーに似て旨いといふもあれば、酸ばくてまづいと言ふもあり、中には、臭くて飲めぬといふのもあつた。負けぬ氣のピー夫人は猪口に一杯飲んで見て、酔ひはしまいかと頻りに心配して居る。隣に居たペインといふ人の惡い老人が、段々顔の色が變つて來たとか、鼻が何うやらして來たとか、言つて冷かして居る。

ペイン夫婦

日本の宿とは違つて、部屋と部屋とは互に閉切つて居るから、隣の客にも附合といふことのない代り、食堂では大抵顔を合すし、食事がすめば、喫煙室あたりで一所になるので、之が段々に緣となつて、終には同宿の客一同と知り合になつた。

或夜、晩餐の後、僕等は三四人で、段階子の下のホールで煙草を喫つて居た。一體僕は餘り煙草を喫はぬ方であつたが、此處へ來てから、脂肪の強いもの許りを喰べるのと、下手な英語で手持無沙汰な時を胡麻かさうとするのとで、次第に強い煙草を喫ふ樣になつた。食物にも釣合といふ物があつて、露西亞に居る時は、油だらけの御馳走をこてと山盛にして出されるので、偶生胡瓜でも出ると、之ほど旨い物はないと思つた位であつた。所で、露西亞では、夫が一本十冊二十冊もするので、さうむざ〳〵と食ふことは出來ず、日本に歸つたら、おのれやれ飽くほど一つ食つて見やうと思つて、樂んで居たが、さて還つて見ると、三度々々生胡瓜と格別の違もない淡泊した物ばかり食べるので、胡瓜などは見向きもする氣にならぬ。

さるほどに偖も其の後、僕等が段階子の下で煙草を吹かして居た時、後ればせに食堂を

ペイン夫婦

出て來たペイン老人は、出ると共の儘いそ〳〵と二階に上つて行かうとする。僕の隣に居たミンクといふ大きな獨逸人が、おい〳〵と呼び止めて、煙草でも吸つて行かぬかといふ。普通の英語には、日本語のやうに面倒な敬語が澤山ないから、斯んな話でも如何にも打解けて聞える。呼びかけられたペイン老人は、つと振り回つて、燕尾服の短衣の胸の所へ左の手をさし込みながら、「ウェル、レーデース、アンド、ゼントルメン」と演說口調で下りて來た。何を云ひ出すかと聞いて居ると、自分も元は大の煙草好きであつたが、戀と煙草は心臟を惡くするものと悟つて、其以來弗に已めたといふのである。其の云ひ方が、一句一句に句切つて、句毎に少しづゝ力を入れて、如何にも人を馬鹿にした樣な演說句調であつた上に、「戀と煙草」といふ一句の所で、妙な目つきをして、僕の隣に居た自分の妻君を睨んだので、一同は思はずどつと笑つた。老人夫には委細構はず、又すた〳〵と二階に上つて行つた。

ペイン夫婦

ペ君は、彼此六十位で、顏の丸い優しい面白い老人であつた。妻君と娘と、三人連で僕より早く此の宿に來て居たが、何時も食堂では、件の演說句調で四遊の若い娘達にからかふので、ペ君が何か云ひ出すと、皆迄聞かずに笑ひ出す位であつた。僕が毎晩帳面片手に、「タイムス」へ出かけやうとすると、「ハ、ア、ア、イ、シー」とか何とか、心得たやうなことを云つて、がッくりと大きく肯いて見せて冷かす。時には、「昨夜の新聞は御馳走であつたらう」と妙なことを聞く。其の娘迄が之を聞き眞似て「どんな新聞社を見に行くの」などゝ云つて、母親に睨みつけらるゝことがある。何處の國でも、朝寢と夜歩きは冷罵の種になるものと見える。此の前にも、午前十時半といふに、朝飯を喰べて居たら、戸の外から例のピー夫人が、昨夜は一體どんな新聞を飲んで居たかと聲をかけた。尤も、英吉利では汝の健康を飲むとさへ云ふから、新聞を飲む位のことは、隨分ありさうなことだ。

獨人ミング

ペイン老人は、朝から晩迄、妻君と娘を連れて、自ら自動車を運轉して、其處等を乘廻す。老いたりと雖も、恐ろしい元氣の宜い人で、大眼鏡をかけて、半ズボンに鳥打帽といふ扮裝は、何うしても老人と見えぬ。何でも田舍の金滿家で、シーズンの間、倫敦へ遊びに來たものだといふ。

獨人ミング

獨逸人ミング、之が亦一寸變つて居る。印度ラホールと漢堡と倫敦とに、盛な商店を持つて、平生は印度の方に許り居るが、今度は商用がてら保養がてら、妻君と娘二人とを連れて、此の倫敦に來たといふ。

妻君は、英吉利人で、少し佝僂の、圖抜けて大きい女。夫が體に似合はず、穩かな優しい口を利く。姉娘は二十五六の美人で、變に氣取つた女。妹は十二三の可愛い眞丸

い二重瞼の兒で、毎日學校へ通ふ。(此の假初の旅の空でも、矢張り、子供は學校へ通はせるものと見える。)名をマージョリーと云つて、何處にでもやつて來て、誰彼なしに話しかける。氣がむくと、樣々のものを其處らへ書き散らして見せ、退屈した時は、陽氣な端唄を唱ひながら、所嫌はず、ませた手つきで、裳を摘んで躍り出す。夫が可愛いとてマージョリーは宿中の客に珍重せられた。僕をカート、ホース、ショーに引つ張り出したのは、即ち此の娘である。

姉は、ピアノの名手で歌も旨い。晩餐の後には、必ず朗々と歌ひ出すので、妹は之に連れて踊る。同宿の客は、皆之に釣込まれて、何時も、食後はピアノの近邊が大賑ひとなる。ピアノは、日本の家にこそ不向だが、天井の高い窓の小さい英吉利風の大座敷には、誠に能く似合ふ。夫に、客の中でも一應は其の彈き方を心得た者が甚だ多いので、僕などもせめてサノサ節の一つも彈けたら、餘程愛嬌を添へたらうものをと、毎々殘念

に思つた。或時、佛蘭西から男の子三人と娘五人を連れた老夫人が此の宿に來たが、此の娘四人とも、揃ひも揃つた美人で、揃ひも揃つてピアノが上手であつた。所が、之と同じ頃に泊り合せた色の黑い髮の濃い若い男がある。初は印度人だらうか、亞剌比亞人であるまいかなどゝ、宿の評判區々であつたが、或夜何う氣が向いたか、ピアノの前に坐つて、彈き出したのを聞くと、却々凡手でない。佛蘭西の娘達迄が、呆氣に取られて一體何物だらうかと能く聞き糺して見たら、何でもブルゲリヤの人で、專門のピアノ彈きであることが分つたとかで、其以來先生のもてることは非常であつた。

姉が歌ふ、妹が踊る、妻君が外の客と一所に見惚れ聞惚れて居る頃を見計らつて、ミンク老人は、そろ〳〵陰謀に取りかゝる。陰謀と云つて外でもない。竊に然るべき同勢を見立てゝ、寄席かアールスコートへ出かけるのである。先づ眞最初に、ペイン老人を誘ふ。ペ君は大抵手を振つて斷るが、時には大な聲を出して、妻君へ聞えよがしに素破

拔く。次には僕の所へ來る。僕も大抵忙しくて行けぬ。其の次は、ハヲースといふミリシアの大尉の所に持つて行く。大尉は片眼鏡をかけた快活な男で、母親と妻君とを連れて、此の宿に來て居るのだが、時々僕に柔術を敎へて呉れと云つて、僕を困らせる人だ。彼方では日本人と見ると、誰でも柔術の心得あるものと思つて居るらしいから、之から後西洋へ行く者は、成るべくピアノと柔術とを少し習つて置いたら宜からうと、僕は始終思つた。

大尉も斷ると、老人せうことなしに獨で出かける。何處で何をして遊ぶのかは知らぬが、夜遲くなつて歸つて來る。夫でも、朝はちやンと人より早く朝飯を濟ませて、シチーの事務所へ出て行く。歸るのは、大抵夕方六時過で、其の時は末の娘のお土產だとて、能く大きな紙包を一つ宛持つて來るので、娘は何時も夕方になると待ち焦れて居る。妻君は時々恐い目をして、卿は子供を甘かし過ぎると小言を言ふ。甘やかすのは、子供許

獨人ミング

りでない。妻君に對しても隨分優しい。

或夜、僕が、うかと口を滑らして、今日は暇だといふと、早速オペラ帽を取つて來い、何處かへ行かうといふ。ハヲース大尉も、僕が行くといふのを聞いて、一所に行くことになり、總勢三人でアールスコートへ出かけた。ミング老人、彼地の賣店では冷かし、此方の茶店では女にからかひ、土耳其風の酒店があると言つては入り、珈琲店に歌の聲がするとてはウヰスキーの立飲をし、ぐる〳〵と諸方で飲み回つて、其の度毎に、僕等も相手をさせられて、夜深けて、初めて宿に歸つた。歸つたが、既に灯も消えて、人は皆寢靜まつて居る。

三人は、表戸を明けて、手探りで中へ入つたが、ミング老人酒の餘威未だ衰へず、其處等の電燈をぱち〳〵と點けて、僕等を食堂に誘ひ込んだ。先づサイドボードの上にあつた僕の福神漬で、ミング所有のウヰスキーと曹達水を酌み交しながら、印度の內亂日本の徵兵制度などを語り出したのが始まりで、話が段々面白くなつて、且つ酌み且つ語る中、曹達水は暫く間に盡きて、其から後は、手當り任せに、之はビー夫人のだらう、之はペイン老のに相違ないなどゝ、順々に棚の上の曹達水を、皆平げて仕舞つた。何だか學校に居た時のやうな氣がすると大尉がいへば、ミング老も全く其の通りと贊成する。二人とも、若い時は隨分惡戲好で、賄ひ征伐位やつたものに違ひあるまい。斯くて、曹達水と共に、老人のウヰスキーも僕の福神漬も盡きて、グード、ナイトと手を握つたのは正に午前一時半。

翌朝は、曹達水紛失事件が大問題となつた。ミング老のくす〳〵と笑ひ出したのが、手がゝりとなつて、とう〳〵惡事露顯に及んで、一同は大笑ひに笑はれた。

若い細君

倫敦蓄音機及印字機會社から僕宛に贈つて來た蓄音機の釘打の木箱を中にして、リッルといふ若い夫婦が、何やら評定を始めて居る。僕の姿を見ると均しく、『ネー明けやうぢやありませんか、明けて聽かうぢやありませんか』と細君が言ふ。『僞ですよ』と御亭主が止めた。『家内が何を言つても、取り上げんで置いて下さい。折角釘付に成つて居るのだから、其の儘日本へお送りになつた方が宜いでせう』と親切氣にいふ。『ひどいワ、取り上げんで下さいなンて。』細君は恐い目をして睨む。亭主は笑つて居る。

亭主は、米國の人で、顏つきの恐ろしい氣立の優しい靜な人だが、細君は頗るのお俠で、如何にも亞米利加人に喜ばれさうな美人である。新婚の旅行でゞもあるものか、毎日二人で自動車を乘り回して、歸つて來るときやッきやと戯けてばかり居る。此處の主婦の鑑定では、學校に居る頃、二人とも運動家であつて、其が緣となつたのだらうといふことであつたが、成程、さういへば二人とも揃つて運動好らしい、體格の丈夫な、筋肉の引締つた人であつた。

蓄音機の箱を開かせたも此の細君なら、其の後十日程經つて「朝日」社から着いた「タイムス」社宛の日本刀の木箱を明けさせたのも、亦此のリッル夫人である。外から着いた箱を開くなどゝいふと、お客の中にも、物好な暇な人があつて、面白半分に手傳つて呉れる。何な物が出て來るかと、野次馬に見に來る人もある。蓄音機の出た時などは、小道具の組立が一應すむと、之れを取り出した先生、後の始末は一切棄て置いて、さッさと應接の間に持出して、やつて見た。日本刀の時は、流石に樣子が分らぬので、さうなく手に取つて見る者もなかつたが、之を包んだ絹袋は、恐ろしく婦人連の御意に召したものと見えて、大勢寄つて來て、其の美しいのを賞め立てた。

若い細君

木箱の上に書いた日本字が亦、其の昔バビロンの王宮の壁に現はれた豫言者の文句ほどに問題となり、此が何の字、夫が何の字と頻に聞きに來る。お俠のリッル夫人、べたりと日本流にホールの眞中へ坐つて、木箱を机の代りにして、日本字を書き始める。何か日本字を敎へて呉れといふから、僕は「日」と「月」と之を合せた「明」の字の、畵文字から轉化した模樣を敎へて、其の次手に、女の字を三つ寄せると、「姦しい」といふ字になる由を敎へた。男の客は、皆手を拍つて笑つたが、女はなか〳〵承知せぬ。リッル夫人は僞だといふ。ビー夫人は婦人に對する侮辱だといふ。僕はホーソーンの「ヒギンボソムの災難」といふ小說の中に「馬車の中なる人は、靜まり返りて一言をだも語らず、見れば、乘り合せたる一人は、辯護士にして、今一人は婦人なりけれど」といふ文句のあるのを引用して、由來辯護士と女とは、何處の國でも喧しいものになつて居ると辯ずると、一同益腹を立てゝ、三人で姦しいなら、六人の時は何して呉れるなどゝといふ。

（生憎、其の時女が六人居合せたのである。）何して呉れると言つたつて、仕方があるものでない。其の時誰であつたか、女が三つで姦しいなら、男か三つで何になると問ひ出した。すると、言下に、トーマスといふ軍醫の細君が『煙草を燻べてうるさい』といふことになると言つたので、一同大笑ひになつた。

リッル夫婦に誘はれて、自動車で、風船競走を、倫敦の西部に觀に行つたことがある。その途中、護謨輪が二度迄もパンクをやつたが、夫婦はすました者で、悠然と路傍の草原へ腰を下して、小面倒な修繕にとりかゝる。細君は喞筒の手傳ひもすれば、自ら舵機を把つて、ショーソァールを勸めることもある。輪が危いのも構はず、風船競走からリッチモンド公園へ、栗の花見に出かける。（一寸斷つておくが、栗の花見といふと、例の汚ない臭い長い花房を想ひ出すが、英吉利には、赤い栗の花があつて、之が何百何千本と列んだ青い鹿爪らしい栗の木の葉の間から見えるのは、一寸奇麗である。夫に此の

若い細君

頃はメーの花も咲く、バーナムも咲くので、栗の花見に出かけるといふことは、一向珍しくない。）夫から、更にテームスの上流を觀に行つて、とある居酒屋の前で麥酒を飲んだ。リッル君は、暢氣な人で、自分でさッさと車を下りて、酒屋から麥酒を三個の盃になみなみと注いで、おづ〳〵とすり足で持つて來て、細君と僕に呉れる。飲んで仕舞ふと、又酒屋迄持つて行く。夫で歸るのかと思ふと、今度は又ウヰムブルドン迄射的の演習を觀に行く。やつと宿に歸つた頃は、讃歎輪が既にへちや〳〵に成つて居て、既に途中でも、幾度注意を受けたか知れぬ。僕は殆ど此の夫婦の暢氣さ加減に呆れて仕舞つた。

所が、其の後一月程經つて、或日僕の不在中、此のリッル夫婦も、前に出たペイン夫婦も、今一つミング夫婦迄も、一時に揃つてかさ消す如く失せた。僕に裘衣の發行禁止を命じた老夫人に聞いたら、例の通り目をばちくりさせるばかり、何も合點が行かぬ。

わが同業

或朝、僕は早く朝飯をすませて、ホールで新聞を讀んで居ると、二階からアンダスン夫人が下りて來た。「ドープロエ、ウートラ」と、僕は露西亞語で挨拶する。夫人は笑ひながら、食堂に入る。引續いて、アンダスン君が下りて來る。莞爾々々と笑ひながら、原稿を書いたかと聞く。昨夜書く積で筆を取つて、三行程書いて見たが、何も氣が乘らぬので已めたと、僕は答へる。ア君も笑ひながら食堂に入る。續いて、ピー夫人が例の老令嬢二人と連れ立つて、下りて來る。皆目禮して食堂に行く。プリゲリアの音樂家が下りて來る。佛蘭西の娘たちが下りて來る。「ボン、ジュール」を呼び交はす。今日は、朝から中々賑やかな。思へば、不思議な所へ來て、不思議な人々と知合になつたものと我ながら可笑しくなる。

わが同業

又新聞を讀んで居ると、今度は、アンダスン君が眞先に食堂から出て來て、僕の側に坐つた。ア君は倫敦の「グランド、マガヂン」の主筆記者で、細君は露西亞人である。何日であつたか、夕方僕が段梯子を下りやうとする時に、急に僕を呼留めて、『お互ひ同業の間柄だ。何分此の後は宜しく。』と言つたのが、口の利き初で、其の以來、同業々々と始終打解けて話をする中となつた。日露戰爭の當時、米國のジャック、ロンドンが、從軍記者として日本に特派された時、長崎でうかと寫眞を取つたのが手ぬかりで、審理の末其の寫眞機械沒收と定まつたことがある。其の當時、我「大阪朝日」の特派員が、日本の同業を代表して、慰問に出かけたとかで、其の當時の記事が「桑港エキザミナー」に現はれたのを見るに、「何處も變らぬ同業の厚誼」と、流石のロンドンも感謝して居たが、僕の倫敦に來て以來、未だ曾て一日も、同業の好意を感謝しないことはない。彼得堡では、「大阪毎日」のマッカラ君、巴里では「タイムス」のオーニール君などに一方ならぬ世話に

なつた。倫敦に入つてからは「タイムス」の事務主任ベル君、主筆バックル君、副主筆ブラウン君、外報主任スコット君、外勤主任ブレイン君、軍事主任ジェームス君、財政主任のフーバー君、二版主任のブロードリブ君等、殆ど一社を擧げて僕の爲に便宜を計られた。「テレグラフ」のロートン君は東京以來のお馴染。其の兄なる「トリビューン」のロートン君、「メール」の社主ノースクリッフ男爵主筆マーロー君及從軍記者であつたマッケンジー君、「クロニクル」の元從軍記者リンチ君、「ジャパン、クロニクル」の主筆ヤング君、「日英新報」のミッチェル君など夫々世話を燒かれて、色々と痛み入る程の歡待を受けた。兎角して着英以來、此の同業者から饗應せられた食事の數ばかりでも何回あつたか知れぬ。其の中ノースクリッフ卿が、態々僕を其のギルドフォードの村莊に招いて、半日の清遊を縱まゝにせしめたのと、ブレイン君の紹介で、サベーヂ倶樂部の名譽會員に推薦せられたのは殊に謝せざるを得ぬ。

わが同業

ア君は初對面の時から「メール」に書いた樣なものを、自分の雜誌にも書いて呉れとの賴みがあつたので、僕は深くも考へず、安請合に引受けては澁いたものゝ、今に其の約束を果すことが出來ぬ。ア君の紹介で「ヂョーヂ、ニューネス」社の各雜誌の主筆に、一紹介せられ、此の人々からも、原稿を賴まれて居るが、之も今に書くことが出來ぬ。面目ないが、ア君の顏を見る毎に、言譯許りして居る始末である。日本流に其の場限りの安請合は忘れてもすべきものでない。

ア君が僕の側へ來たのを幸ひ、リツル夫人等總勢九人の一時に退去した理由を聞いて見た。ア君が笑ひながらの說明に據ると、何でも、ペイン夫人が主婦から聞いたと言つて、リツルの細君の惡口を言つたのが、不圖リツル君の耳に入り、リ君は怒つて主婦に談判する。主婦は怪しからぬと、ペイン夫人に談判する。其の結果、主婦からペイン君一行の退去を迫つたので、そんなことを言ふなら己等も出て行くとて、リツル夫婦も出

ることになり、此の事には直接關係のないミンク一家迄が、ペイン老人とは昵懇の間柄だといふので出て行つたのだといふ。

ア君は、其の次手に、所謂下宿のお客なるものを評して、元來下宿に來るのは、外國人の外、大抵變人ばかりだと言つた。例へば、亭主と一所に居るのが面白くないとか、宅に居ては頓とはでな交際が出來ぬとか、一寸シーズンの間、倫敦へなどゝぶツて見たがるとかいふ連中が、一二箇月此の下宿へ集つて來るので、大抵はのらくらと遊び暮す者ばかり。此の連中を標準にして、倫敦を評されては困るとのことであつた。如何にもさう聞くと、孰も皆多少變つて居る。

其の中、アンダスン夫人も食堂から出て來たので、二人は連れ立つて、出て行つて仕舞つた。何處へ行くのか、夫人も毎朝出て行つて、夕方歸つて來る。夫人は、眞面目な人附合の宜さゝうな人で、英語も佛語も自由に話す。僕が初めて逢つた時、西伯利亞を

わが同輩

通つて來たと話したら、非常に面白がつて、色々其の模樣を聞いた末。露西亞語を話すかと問ふ。話さぬといへば、ちッと位は知つて居るかといふので、僕は、胡瓜と、麥酒と、馬丁と、赤帽と、旅館と、停車場と、挨拶では、「お早う」と「有り難う」と、動詞では、「呉れ」と「知らない」と、數字では「一つ」と「三つ」と、總計十二だけ知つてる由を話したら、夫人は大に喜んで、他國で本國の言葉を聞くのは、嬉しいものだと言つた。そうれ見ろ、僕が英吉利人に、日本語を二つ三つでも心得て呉れと言つたのは、無理であるまい。

ミンク老とペイン老とには、其の後途中で一度出會つたが、相變らず愛想よく手を握つて、二人とも、是非此の次は日本でお目に懸りたいと言つた。ペインの娘は、今に女が三つで姦しいといふことを記えて居て、何か歸つても、あの調子で英吉利の女の惡口を書かぬ樣にして呉れとのことであつた。何う致して、惡口どころか、毎日斯樣に賞めて居る。

宿の一家

宿の主人をカリンガムといふ。迂濶な話だが、僕は此處に來てから、餘程日數の經つ迄全く之を知らなかつた。日本なら、表口の具合から、丸で素人家とは違つても居るし、街燈にも看板にも、武藏屋とか相摸屋とか、必ず書き入れる所だが、此處のはさうでない。偶には、入口の戸に屋號樣のものを書いたのがないでもないが、先づは多く書かぬ。郵便を出すにしても、人が尋ねて來るにしても、何町何番地だけで、ちやんと分るから、強て屋號や主人の名前を聞く必要はない。宿の方にしても、別に客毎に宿帳をつけさせるではなし、下宿料の先拂をいふではなし、名は自然に知らるゝに任せ、宿料は一週間毎に、勘定書をホールの卓子の上に列べた切りで、強て催促もせぬ。其の邊は頗る大や

宿の一家

りなもので、宿に着くと、直ぐ番頭がやつて來て、宿所姓名から年齢職業族籍迄一々書いて行く我邦の宿とは、大分趣が違ふ。僕の名などは發音し惡いお蔭で、長い間主婦にも主人にも、記憶せらるゝの光榮を得なかつたのである。

此處の主人は、下宿屋を外にも一つ持つて居るとかで、細君と二人、交り代りに雙方へ泊りに行く。主人は、倫敦訛か何かで、女をラーディース、鐵道をライルワイなどゝ言つて、新來の僕をへこませることと一再に止まらぬ。暇な時は、能く喫煙室などで、長長と倫敦の自慢話を始める。ハムプトン、コートやキュー、ガーデンスなどは、左ながら自分の宅の庭でゝもあるやうに、是非見て來て呉れなどゝ言ふ。僕の事が新聞に出て居ると、必ず切拔いて持つて來て呉れる。何か頼めば、私が行つて來やうとて、氣輕に何でもやつて呉れる。時々僕の蓄音機で、「ミカド」をやり出すと、先生歌に連れて妙な手つきで躍りながら、段階子を上つて行つて、主婦に叱られたこともある。叱られると

必ず僕の方を向いて、日本にも斯んな喧しい女房があるかと問ふ。別に喧しい譯ではないが、主婦は流石に一家を切り廻す丈あつて、動もすれば其の勢亭主を壓倒するのである。

主人の下に、日本なら番頭といふべきハウスキーパーを勤める女がある。之が勘定も屋人の取締も何もかも主人に代つてやる。其の下に、女中が二人居る。此の女中二人が、朝早くから內外の掃除やら客室の世話を盡くする。能く働く上に、行儀が正しくて、靜かで客の前でげら〳〵と笑ひ騷ぐ樣なことは決してない。此の女中の外に、小使が一人、之が荷物の上げ下しや使ひ歩きをする。ジョン〳〵と、一掴みに使ひ回すが、品の好い溫しい男であつた。墺地利から來たのだといふ。

食堂附の給仕が二人居る。之が亦入れ代り立ち代り、その代ることの早さといつたら、誠に目にも止らぬ。小村君の注意で、召使に金をやるやうなら、餘程見定めた上に

宿の一家

せぬと、能く代るから馬鹿を見るとのことであつたが、成程、玄中の外は、隨分能く代る。大抵二三日目には、必ず代つて新しいのが來る。來るのも〳〵多くは、獨逸か墺地利の者で、英吉利人は殆どない。だから苦情の種も色々あつて、氣が利かぬといふ、英語が分らぬといふ、勝手を知らぬといふ、何だの彼だので皆出される。能く彼ほどに出されても、代りに來る者があつたものだと、不思議に思ふ位であつた。

此の外に厨夫が幾人居るか、地下の料理場に居る許りで、出て來たことがない。

總じて、雇主と雇人との間柄が、頗る嚴格で、客でも主人でも、召使に對して打解けて語るやうなことは決してない。歐米各國皆さうだが、英吉利は殊に甚しい。一概には評されぬが、僕は寧ろ此の點に於て日本主義を取る。

レムの里

はしがき

明治四十年の六月十四日、大森の宅では麗子が今日明日をも測られぬ大病に罹つて、家内一同上を下へと大騒ぎの最中、知らぬが佛の僕が倫敦の宿へ、次のやうな手紙が「デーリー、メール」社から轉送せられた。

拜啓、君が英國の風俗習慣に對する精到犀利なる批評は、日々「メール」紙上にて面白く拜見せり。生は嘗て日本に於て生が生涯中の最も愉快なる日月を消したることあるを以て、日本及日本人に對して懐かしさを感ずること一方ならず。隨つて、君の文に對して興味を感ずることも、亦一般の我が國人に比して深きものあるを覺

はしがき

ゆ。生は東海道に於て德川前將軍に謁したることあり。前年物故したる福澤先生は、生の友人にして、暫く生の横濱の宅に同居したることあり。斯の如き知名の士を知り得たるは、生の光榮とする所にして、氏が日本の大使に隨從して當英國に向はんとするや、生は之を當國の知人に紹介し、此等知人は皆然るべき歓待を與へたり。斯く申さば君は「あなた、おぢいさん」と言はるゝなるべし。實にも生は「ぢいさん」なり。されども生は未だ日本が露國と戰つて敗北すべしと思惟する程に耄碌いたし居らず。生老いたりと雖も、戰役の當時、自ら一隊の騎兵を率ゐて、行いて日本が哥薩克と戰はんとするを助けんと企てたることあり。唯國際の繁文縟禮遂に生をして其の志を遂げしめ能はざりしのみ。——好矣、斯る事共は今語り出でたりとて詮なし。生が今君に對して言はんと欲する所のものは唯一のみ。曰く願はくは、君の文に依りて、日本が世界第一の慇懃なる國民を有すること、及其の正義と勇敢

とに於て世界の何國にも劣らざるものなることを、深く英人の腦底に印せしめ玉へ。

尚次ぎに一言すべし。君若し喧しき倫敦を避けて、數日の休息を田園に取らんことを望み玉ふが如きことあらば、生は何時にても喜んで君の爲に我家を宿とし參らすべし。生は富める者に非ず。されども、教育ある日本の紳士を迎へんことは生の最も喜ぶ所なり。且つ又ウォリック城址、及沙翁の生地ストラトフォード、オン、アボンなどを訪はんも、亦興あるべし。此等は孰と、生が居村より遠からず。

生は日本を去りて後加奈陀に住したるを以て、加奈陀が今後如何に日本の用に供すべきものなるかを知れり。此の點に就ては、ゆる〳〵君と相語るの機會を得んことを切望す。さりながら君の多忙なる、恐らく其の時を得ざるべきか。

五月十四日

レミントン、スパにて

はしがき

はしがき

此の手紙を讀んだのは、恰度夜の十二時過、ハイド、パーク、ホテルで催された小村大使の夜會から歸つた時であつた。「メール」に僕の投書が出て以來數々の書面を受け取つたが、今晩のほど僕の心を動かしたものはない。兎に角も返事は明日のことゝして、手早く窮屈な燕尾服を脱ぎ棄てゝ、臥床に入つたが、さま〳〵のことが胸に浮んで、何しても眠られぬ。先づ此の書面の差出人の顔が目に浮ぶ。雪の如き白髪半ば禿げて、鼻の先にぺらぱうに大な眼鏡をぶら下げたのが出て來る。暖爐の側に身を屈めて、鵝ペンの手もと危く、何やら認めて居るのが出て來る。三四人の可愛い縮れ毛の孫らしいのが出て來て、老人の膝や背中に飛び上る。六十ばかりの品の好いお婆さんが、其の後を追つて來て、手紙の邪魔をするものでないと言つて聞かせる。やがて突然舞臺は一轉して、老人はいつしか義勇兵將校の軍服に身を固めて、濠洲産の逞しい白馬に跨がり、長鞭を

揚げて三十餘騎の先頭に立ちながら、蓊直にボグラニチナヤの停車場を襲ひ行くと見る。今度は二十足らずの若い福澤先生が、丁髷に大小儼しくぼッ込んで、赤ら顔の背丈の矢鱈に高い人と、横濱の海岸をぶらり〳〵やつて行くと。見る想は夫から夫へと飛んで行つて、眼はぱッちりと冴え切つて仕舞つた。

眠つたか眠らぬかの間に一夜を明かして、翌朝は起き出でると直ぐ返事を認めた。返事の要旨は、厚く態々の來書を謝して、時間の都合がつき次第是非お邪魔に出るといふのであつた。次手にウォリック城址は豫てより一度行つて見たいと思つて居た所、ストラトフォード、オン、アボンは此の前友人何がしと一所に出かける積りで、既にメリルボーン停車場迄踏み出したのを、途中でホテルが滿員と聞いて引返した位の所であることを書き加へておいた。越えて十六日、再び老人から書面が來た。其の文に曰く、

昨日附御手紙有りがたく拜見。愈生が望に任せ、三五日を生がいぶせき宿に過

はしがき

さるゝことゝなりたる由、欣喜極りなし。斯くして生はウォリック其の他レミントン附近の名所舊蹟に君を案内し參らするの好機に接するを得んか。

さりながら、此處にて君に富士山の如き麗はしきものを見せ參らせんことは、我が力の及ぶに非ず。生は日本駐劄の和蘭公使故アッチン、ボルスブルーク伯と、古風の服裝面白き日本の衞士に護せられて、富士に登れることあり。嗚呼其のいそ〳〵と東海道を駈け下り、さては恍として函嶺の山水に見惚れたる昔の戀ひしくもあるかな。

左れどもわが愛する君よ。先づ此の地に來り玉はんとする日を報せ玉へ。生は倫敦發の最上の列車を報ずべければ、其の中にて然るべきを選み玉へ。思ふにパヂントンより大西線を取らんこと、最も便利なるべし。此の線はオックスフォードを通過して、二時間と少しにて當地に着すべく、生が其の折プラットフォーム迄出迎へ

申さんことは言ふ迄もなし。生は背丈極めて高く、白髮にして、厚き眼鏡をかけたれば、萬見誤らるゝことあるべからず。

君の文は實に名文なり。

五月十六日

「君の文は實に名文なり」とは聊か恐れ入つたが、今度は文體も大分碎けて來て、稍や老人の面目が見えて來た。背高く、髮白く、夫に厚い眼鏡をかけて居るといふので、大凡老人の樣子にも見當はついたが、此の日合宿の若い女から、レミントンとは倫敦の西北に當つて、左ながら畫に書いたやうな奇麗な町で、昔は有名な湯治場であつたとのことを聞いて、大凡レミントンなるものゝ見當も亦ついた。

夜に入つて、今度はデ君から小包が二つ届いた。一には氣車の時間表、レミントン、ウォリック、ストラトフォード、ケニルウォース、オックスフォードなどの案内記やら

はしがき

地圖やらを、十幾冊といふ程入れてあつた。今一つの包を開くと、開かぬ前から、花やかな春めかしい香が其の中より洩れて、厚いボール紙の函の中から、白と紫とのライラックの花が一束づゝ現はれた。函の裏には見覺えあるデ君の鉛筆の走り書きで、

『我家の庭に咲き出でたるライラックの花を、先づ君に贈り參らす。君が來玉はんを迄に萎まんことを恐れて。』

とあつた。騎兵を募つて哥薩克兵と戰はうなど言ふかと思ふと、又斯う優にやさしい所がある。全體デビスとはどんな人であらうか、餘程變化に富んだ人に相違ない。僕は益早く行つて見たくて堪らなくなつた。

初に二十五日と言つておいたが、丁度三十日に伏見宮殿下の倫敦御出發といふことに定つたので、又日取をかへて、今度は六月一日に出向くことにした。此の由先方に報じた時、次手に、吳々も客分としての大厨なもてなしは御無用と斷つておいたが、之に對する老人の返事に、

十八日附貴書辱なく拜見。六月一日愈〳〵御入來の由謹で御待ち申すべし。別に前以て何等の沙汰なくば、同日午後一時十八分停車場にて相見ることゝせん。伏見宮殿下の御事は、記者として主要の用に相違なかるべしと、察し居れり。今後君が都合に依りて、幾度日取を取り代へらるゝとも、當方には一向差支なし。

生は君をもの〳〵しき賓客と見ずして、打とけたる我家の一人としてもてなすべし。君も亦心おきなく我家に留まりて、遠慮なく何を食ひ、何を飲み、又如何の煙草を吸はるゝかを打明けて語らるべし。唯生の此の際甚しく遺憾と感ずるは、貴國の壘に坐らせ、貴國の火鉢を出し、貴國の富士を見せ得ざること是なり。此等は今も尙寤寐に生が心に浮び來て、忘るゝ能はざる所なり。

英人は打見たる所冷やかなれど。心はなか〳〵に暖かなり。日本の同胞に對して

レミントン

殊に然り。

などゝあつた。

此の頃は恰度麗子が大學で見て貰つて、迚も七月中命があるまいと診斷せられた時であつた。麗子とは今年七つになる僕が長女の名である。

レミントン

いよ〳〵六月一日は明けた。宿の傍のグロスター、ロード停車場から地下鐵道に乘つて、バヂントンに出で、此處から十一時何分かに發するレミントン行の列車に乘り代へたっ幸に客も餘りこみ合はず、天氣も例に依つて曇つては居るが、降り出すほどのともないらしい。車倫敦の市中を離れると同時に、追々に日の光も雲間から洩れて來る。沿道見渡す限の青草滿地、さながら毬を敷くが如く、小川の岸、森の下陰には、快げに

羊が群れ遊んで居る。

暇つぶしにとて、デ君から送られたレミントン案内記を讀んで見る。レミントンとはリーム川の邊に立つた町の意で、サキソン時代から開けた所とある。所はウォリック州の中で、倫敦からは西北に當る。古くより此處に鑛泉の湧き出ることが知られて居たが、前世紀の初に、新に一鑛泉が發見せられてから、追々に新しい家が立ち、新しい橋が架り、新しい道も開けば、新しい園も作られた。道といふ道に綠樹鬱葱たらざるはなく、園といふ園に百花爛漫ならざるは希で、左ながら全市を一丸に打して大公園を形づくり、「花園の町」の名も空しからぬ。ホーソーンが「われらが舊居」の中に此の地の美を說いて、『レミントンは四時花を見ざることなく、一年を通じて家なき者の爲に家となる。町の內麗しく、町の外美しく、所によりては、壯麗雄大の景をさへ示し來る』とまで言つて居る。一時は湯治場として其の盛を極めたもので、前世紀の初には、ビクトリ

レミントン

ア女皇がまだ位に即かせられぬ頃、行啓になつたこともある。其の頃から「ロイアル」の肩書を許されて、「ロイアル、レミントン、ホテル」「ロイアル、ポムプ、ルーム」（浴場）などいふのが今に在る。尤も今日では湯治の方が餘り盛でないが、町の美しいのと、サキソンのガイが舊居ウォリックの城も、スコットの筆に名高きケニルウォースの城址も、シェークスピーアの故園と知らるゝアボン河邊のストラトフォードも、皆此處から一二時間で行ける近くにあるのと、而して倫敦から來る途中の丁度中程に、大學で名高いオックスフォードの町が有るのや何かで、レミントンの名は歐洲大陸及亞米利加に迄知れ渡つて、春先此處へ遊びに來る者が、其の數を知らぬといふ。

成程さういふ所かと、愈〻面白くなつて來た。汽車は小憩もせず走りに走つて、何時しかオックスフォードを過ぎ、それから一時間許りにして、列車は依然として進行を續けながら、唯僕等の乘つた最後の客車だけは、はたとレミントンに留つた。スリップ、

カーと唱へて、マンチェスターとか迄急行する途中、一車をオックスフォード、一車をレミントンといふやうに、途中、最後の客車を一つ〳〵切つて捨てゝ行く仕組である。勘定尻の厄位のやうに切り捨てられた客車から、プラットフォームに下りて見ると、果して、背の高い、髭の白い、厚い眼鏡を掛けた老人が、づか〳〵と寄つて來た。

デビス老人

一目に夫と知つて、思はず、デビス君と聲をかけると、老人は滿面に笑を湛へて、突然僕の革囊を引き取つて、右の手で堅く僕の手を握り〴〵めた。双方無言。唯しげ〳〵と顏を見合つたきり、感極つて殆ど何といふべきかを知らなかつたのである。

つい近いのだからとのことで、革囊を居合せた若い男に持たせて、二人はてく〳〵と歩いた。デビス君は思つたより元氣な、快活な人で、歩きながらもさま〴〵のことを尋

デビス老人

ねる。何しろ四十年前に六年ほど横濱に居たことがあるだけだといふので、今日の日本といふものは全く知らぬ。僕の洋服を見て、今ではもう誰も袴を着たり大小をさゝぬかと問ふ。女は今でも矢張り眉を剃るか鉄漿をつけるか、東京や横濱にはちつと煉瓦の家が出來たか、電車はあるか、モートルバスがあるかなど、さし詰め引き詰め、殆ど應接の暇がない。僕が、今の日本は老人の居た頃の日本と大分變つて居る次第を述べると、老人は且つ喜び、且つ哀んで、今一度昔のまゝの日本を見たいなどいふ。殊に近頃日本に女學生といふものが出來て、葡萄色の袴を着けて、靴を穿き、頭髪は廂髪といふものに結ぶ由を語つた時は、老人目を丸うして打驚き、そんな變な物が日本にも出來たか、夫れでは遠からずサッフラゲッツ（婦人選擧權獲得運動者）も出來やうと言つて、からからと笑つた。いや「出來やう」の段か、もう既に出來てると言つたら、老人又目を丸うした。

停車場から三町ばかりで、愈其の宅に着いた。入口から大きな聲で、お客樣が見えたと呼ばゝると、奥から甲走つた女の聲で、待つて〳〵待ち焦れて居たのです、といふのが聞える。

午餐

兎も角もとて、デ君に連られて、僕の部屋に宛てられた二階の一室に通ると、寢臺には新らしいシーツが敷いてある。手水臺にはちやんと湯が取つてある。埃だらけの顏を洗つて、上着の塵を掃つた後、客間に案内せられて、此處で初めてデビス夫人に紹介せられた。夫人は小柄な丸顏の人で、質素な身扮はして居るが、何處やらに氣高い所がある。左ながら遠方から歸つた自分の子でも迎へるやうに、兩手で僕の手を握つて、實は最前から立つたり、坐つたり、窓を覗いたり、二階へ上つたり、そは〳〵として一向お

ちつかず、愈宅へ見えたと聞いた時は、飛んでも出て行きたい位であつたが、強ておちついて、紹介を待つて居たといふ。デ君、其の後を引き取つて、古い話に誰かゝ水に溺れかけて居た所を、一向平氣で見て居る人があるから、なぜ助けに行かぬかと問うたらば、いやまだあの人と紹介が濟んで居ないのだと、答へたといふことがある。馬鹿々々しい話だが、之も英吉利の儀式だから仕方がないと、心よげに笑つた。

三人向ひ合つて午餐の卓子に就く。食事の間も老人絶間なく日本の昔を語り出して、神奈川の何處とかで、浪士が英國の士官を斬つて梟首に處せられた時、自分は斯いふ浪士こそ一國の生命だと思つて、其處を通る毎に、必ず脱帽したといふことや、日露戰爭の初に、此の邊では誰一人日本の無謀を笑はぬ者はなかつた時、自分は日本人が成算なくして事を醸すやうな國民でないことを確信して居たから、誰やらと賭をして幾何やら勝つたといふとや、浪士の辻斬が盛に行はれて物騒だといふので、横濱で義勇兵を組織

した時、同僚の中に飲んだくれの葡萄牙人があつて、始末に終へなかつたのを成敗したことや、日本から加奈陀に移つて何とかの商賣をしたことや、南亞弗利加でセシル、ローズの下に、採鑛事業に從つたことなどを、滔々と辯じ出して、横濱に居るかと思へばキムバレーに行き、加奈陀の話と聞いて居る中に、東海道に立ち戻り、過去四十年の經歷を一擧に語り盡さうといふ勢、其に手眞似が加はる、道具立が要るので、何時しかナイフやフチークは二三尺も前の方に飛んで行く。夫人が時々注意して、肉が冷える、茶がさめるといふので、其の度毎に、老人初めて我に歸つて、一々、あゝあの時は面白かつたと結んで、又皿に立ち戻る。

老人の談中最も僕を驚かせたのは、日露戰爭中露艦が上海に逃げ込んだ時の談で、老人は其の時自ら上海に下り、夜陰に乘じて露艦の碇綱を切つた上、之を港外へ曳き出して日本の艦隊に引き渡さうと計畫したが、愈出發といふ前日、急に激烈な眼病に罹つ

ストーンレー、アベ

て中止したのだといふ。

馬車が前刻から待つて居ると、女中が報せに來たので、一同は初めて食堂を立つた。

ストーンレー、アベ

デビス老人夫妻と馬車を驅つて、レミントンの太守レー卿の屋敷を見に行く。降りみ降らずみ定めなき水無月の空の、何とやらん鬱陶しい中を、何くれと語り合ひながら、愈〳〵其の屋敷に着く。レー卿の家は昔しモンクの住んだ跡とて、今も尙ストーンレー、アベと唱へて居る。レー卿は生憎と居なかつたが、卿が前以て命を家の者に傳へて置いてあつたので、行くと直ぐ迎に人が出て、邸内邸外殘る隈なく案内せられた。チャールズ第一世がクロムウェルの軍に追ひつめられて、愈〳〵其の手に落つる前日、一夜を明かしたといふ室がある。寢臺も窓掛も、昔の樣を其のまゝにしてあるとのことであつたが、之

が最も僕の心を動かした。其の次はモンクが穴居同樣の住居をして居た石室の跡で、此處へ來ると、其の薄暗い中で、經を譯し神を禮した樣があり〳〵と眼に浮ぶ。室は暗いが、太古の文明が西羅馬の滅亡と共に潰えて、世は俄か暗の淺ましい代となつた時、辛く一道の光明を傳へて近世文明の繫ぎになつたのは、此のモンクのお蔭だと思ふと、何となく尊とい心地がする。

アボンの流に沿うた庭園を見廻る。赫と目を剝いたやうな大輪の牡丹が盛に咲いて居る。

五時過、家に歸つて茶を入れる。世界中を一足に飛び歩く老人の談は、止度もなく夫から夫へと續いて、間もなく晩餐の支度が出來る。家内同樣にといふことで、質素な食事を濟ませて、夫から客間の暖爐の前で烟草を吹かしながら又語る。談は中々盡きぬ。老夫人は甲斐々々しくピアノの前に坐つて彈き出す。デビス君も之に促されて、濁聲高く

デビス一家

之に合せて何やら歌ふ。何でもラヴが何したとか斯したとかいふのである。歌ひ終つて、私等が若い時は斯なものも歌つたものだといふ。夫人も後ふりむいて笑ふ。ピアノが終つて、又語り出す。とう〳〵十一時過になつて、初めて臥床に就いた。

デビス一家

翌朝は八時頃に目がさめる。衣を改めて食堂に下りると、老人夫婦は新聞を讀みながら待つて居る。天氣は相變らずどんよりと曇つて、降りさうにもないが、又晴れさうにもない。

デ君と庭に下り立つ。庭といふは屋後の二百坪許りの空地に一面の芝生、其の彼方に少し許り畠がある。日本とは違つて、之だけの空地はあつても、四方は三階四階の、無風流な煉瓦造りで圍まれて居るから、くわらりとした所が一向ない。此の芝生の周圍をぶらりぶらりと歩きながら、話好の老人片時も默つて居らぬ。宅の方からずッと兩三軒列んだ隣の家を指さしながら、昔は之だけ盡く自分の工場であつて、此處で活版事業をやつて居たが、面白くないから己めて、三分の二は賣り拂つたといふこと、自分が深洲や加奈陀に居る間は、夫人が一切留守を引受けて、寸分の手際もなかつたといふこと、一人の娘がブルゲリアとかの貴族のお附で、オデッサに居るとかいふこと、從兄の何某が露國に歸化して、大地主になつて居るが、意氣が投合せぬ爲、絶交同樣の姿であるといふこと、其の外何やかや大分話して居る中に、朝餐の用意が出來て、一同食卓に就いた。

レミントンの公園

今日は日曜とて、見物に出かけるべき所もないので、老人と二人、朝餐をすませて

後、直ぐ公園へ散歩に出かけた。

ジェフスン公園、ポムプ、ルーム公園、ヨーク公遊園地、ビクトリア公園と四つの大公園が殆ど相接して、リームの川岸にある。僕は英國を思ひ出す毎にレミントンを思ふが、レミントンを思ひ出す毎に、此の美しい四個の公園を思ひ出さずに居れない。ジェフスンに入れば、見る限の大芝生を圍んで、紅黄白紫の色香めでたき花のさかり。ポムプ、ルームに入れば、亭々たる巨幹老樹。ヨークとビクトリアとの中は、一望際なき青野原。ジェは艶麗、ポは瀟洒、ヨとビとは壯大。成程、レミントンを「園から出來た一町」といふのも無理でない。僕等は先づジェフスンから入る。門を入つて直ぐ兩側は、青々と茂つた木立で、栗の花の白き、バーナムの黄なる、メーの紅なる、ライラックの薄紫なのが、取り〴〵に咲き亂れて居る。リームの川邊に出れば、兩岸から、かぶさるやうな森が川水に映つて、其の間に鵠が悠々と泳いで居る。其の邊を見巡つて後、

最後にビクトリアに行けば、此處はからりと打開けた芝原で、其の間を眞直な砂利道が突きぬけて居る。

日曜日のことゝて、打鳴らす鉦の音の遠く近くに聞えて、老いたるも若きも、バイブル片手に教會堂に急いで行く。突如として一輛の馬車が、颯と風を斬つて通り過ぎる。『アッ人殺し！』と老人が呼ばゝる。デ君は醫者を「人殺し」辯護士を「泥棒」といふのが口癖である。自分は、大のクリスチアン、サイエンスの信者で、一切の病は邪念妄想から出るに過ぎぬと唱へて居る。『教會にも行かんで、彼奴は又人を殺しに行きをる』と、老人は、矢つぎ早に後から遠矢を射かけた。

金がほしくはないかと問ふ。『ないこともないが儲けるのが面倒臭い』と答へる。此に於て、老人は面倒臭からずして、金を儲ける法を二つ僕に教へて呉れた。日本の膨脹が望か、夫とも今の分で安じて居る積かと問ふ。『夫は機會次第』と僕が答へる。此に於て、

老人は、國の膨脹には弱者先づ打つべしといふ原則に基くべきことから、今現に打つて亡ぼすべき國が、世界に二つあることを、諄々として說いて聞かせた。此奴は一寸此處に書く譯に行かぬ。

デ君は、猶太人が嫌ひ、亞米利加が嫌ひ、獨逸が嫌ひで、日本ほど氣に入つた國はないといふ。之は後の話だが、或朝僕が嚏をしかけて己めたら、出かけた嚏は出して仕舞はぬといけないと、ナポレオン第一世とかゞ言つたといふので、僕を態々近所の烟草屋へ連れて行つて、嗅烟草を一包買つて與れた。歸つて之を鼻に入れて見ると、滅法界痛い。こんな痛い思ひをするよりはと、僕は手早く有合せた半紙で紙捻を作つて、鼻に突ッ込んだら、事も見事に「はあッくしやう」と出たので、老人大に感心して、之だから私は日本が好きだと仰せられる。僕も嚏をして感心して貰つたのは、今度が初めである。

五大洲を丸呑みにしたやうな議論を吐くかと思ふと、老人忽ち嚏に感心する。恐ろし

い元氣のいゝ話をするかと思ふと、一方には又極めて涙もろいことをいふ。一度さる緣日に行つた時、貧しい小供が、見世物にも入れずに立つて居るのを見ると、忽ち一掴みの金を木戸番に與へて、其處等に居合せた十幾人の小供を一度に入れてやつた。又ケニルウォース城の敗墟の芝生に坐つて、昔横濱で葡萄牙人の某を毆つた時の話をして居た時にも、忽ち郭公が啼いて居るとて、矢鱈に人を木橋の上に引つ張つて行つた。小羊を見て、彼奴を燒いたらといふ所は殺伐だが、晩餐の後老夫人にピアノを引かせて、己は朗朗と戀の歌を唱つて、昔は斯なものを歌ひ合せたこともあつたのだと笑ふ所は、頗る罪がない。

やゝ暫く公園で遊んで後、リーム河を渡つて歸らうとすると、はや敎會歸りの美人が追々やつて來た。デ君は、早く歸つて宅だけの禮拜をやらうと、難有いことをいふ。

ホウ井ットナッシュ村

歸つて午餐の後、客間の暖爐の前でとろ〳〵と居睡りをして居ると、デビス老人、ぬき足に入つて來て、そッと僕の顏を覗く。僕は何だか人の氣色がすると思つて、眼を開いて、はッと老人と顏を見合せた。睡たいなら寢て居ても宜いが、此の町外れに、エリザベス朝の遺跡があるから見に行かぬかといふ。僕はがばと起きて老人と一所に外へ出る。

春は末ながら、英吉利の今日此頃、何とやらん風が寒い。

老人と道を歩くと、僕は遙に小さい。二歩三歩行く中に、互に歩調が亂れて來る。老人は刻銘に僕の足もとを見て、必ず踏みかへをする。やつと揃ふと又亂れる、又踏みかへる。之が老人の癖と見える。尤も、僕の足並は滅多な人と揃はぬので、倫敦では、人と連れ立つて歩く毎に、人知れぬ苦勞をしたものである。

彼此二哩も歩いたと思ふうちに、目ざすホウキットナッシュ村に着いた。小さな村で別に見るに足るほどの物はないが、此の村にはエリザベス女王の頃に出來た家が、其の儘殘つて居るので、亞米利加の觀光客などは、態々見に出掛けて來るといふ。家は凡て平家造で、煉瓦は使はず、小砂利を交へた土の壁を塗りめぐらしてある。其の壁の中へ不風流な太い柱や梁がはみ出して、之れが黑々と塗られて居る。屋根は古風な細かい瓦を用ゐたのもあるが、概して藁葺だから面白い。年所を經ること三百四五十年にも及んだことゝて、中には軒傾き柱歪むだのもある。シェークスピーアなどが惡戯ざかりに遊んで廻つたのは、斯な家の列んだ所だつたらうかと思ひ出すと、急に其の頃に立ち還つて來たやうな氣がする。町は人通りも少ない淋しい所で、如何にも田舍じみて居る。ストラトフォードを初め、ウォリック州の各所に、此の類の家がないではないが、斯う棟の低い藁葺の揃つたのは、成程此處に限る。

技師が家の晩餐

村を一巡りして後、又老人に連れられて、レミントンに歸つた。此の邊の町々は、町とはいひながら、流石に鄙びて廣々と開けた草原もあれば、雲を凌ぐ大木の列んだのもある。遙に墓地と覺えて、石碑の累々と立ち列んだのが見える。デ君、之を指さして、此の次の僕の住居は彼處だといふ。僕は聊か挨拶に困つた。

技師が家の晩餐

ナイチンゲールの啼聲が聞かうといふことは、豫ての望であつた。日本では誰が間違へたか、之を鶯と譯してゐるが、大きさから言つても小鳩ほどあるといふし、日が暮れて啼くといふし、夫に囀り方も、流石に宗旨が違ふだけあつて、法法華經とは啼かぬさうな。其處で今晩は是非日の暮れ方から近所の森へ、之を聞きに行かうと云ふ約束であつた。

老人と連れ立つて家に歸ると、當地の電燈會社の技師長ジョーンス君といふのが來て居る。四十少し過ぎた、悠長な物の言ひ方をする人で、殆ど金聾同樣に耳が遠い。デ君は僕を此の人に紹介した後、ナイチンゲールの一件を話すと、ジョーンス君はやゝ暫らく沈吟した後、おづ〳〵と語り出した。ジ君は、僕とデ君とに電氣工場を見せて、夫れからジ君の宅で晩餐を共にして、其の上で一所に連れて、鳥の啼きさうな所へ出かけやうといふのである。僕等は一も二もなく同意した。

此に於て、ジ君は一歩先きに歸る。僕等は後から工場に出かけた。工場には格別變つたこともない。一巡見廻つて後、愈々ジ君の宅へ行く。ジ君の細君は病氣とかで家には居らず。可愛い男の子が二人あるばかり。食事は主客三人ぎりで、打解けて且つ語り且つ盃を擧げた。主人は、先年腦を患つてから、耳が遠くなつて、殆ど金聾同樣、デ君は大の近視で、平生三四度位の眼鏡を掛けて居る位。斯いふのが二人寄つたのだから、一

技師が家の晩餐

方が聞損つて、飛んでもない所で高笑ひをすれば、片方は見損つて、途方もないものを口の中へ頬ばる。デ君、ナイチンゲールは何の邀で聞けるだらうかと問へば、ジ君、左様さ、今年の様な雨續きは、六十年振だといふ。ジ君は、デ君が見失つたスプーンを指さし示せば、デ君、あたふたと其處等を探し回る拍子に、したゝか葡萄酒の盃に額をぶつける。堪へ兼ねて、僕が思はず吹き出せば、此の近い眼と、遠い耳とが、ひた〳〵と僕の顏の側へ寄つて來て、何が可笑しいといふ。何が可笑しいも能く出來た。

此の頃此の邀では、暮るゝこと甚だ遲くして、十時過に、尙人の顏が明に見える。食事が濟んでも中々暮れさうにはないので、今度は三人連で、技師長の宅の向側に住む時計屋の主人チャンドラー君の宅に出かける。之は前以て技師長から話しがあつて、暮れる迄、此處で食後の音樂を聞かうといふのであつた。チャ君夫婦は快く出迎へる。妻君といふのは、英吉利風のきりッと締つた美人で、之が彈するピアノに合せて、十一になる娘がバイオリンを彈く。此の娘の妹に當る小さい娘が、親類から來たといふ廿歳許の娘の膝に抱かれて聞いて居る。やがて、幾番かの絶なる調に、心時めき來つて、デビス老人は、濁聲高く、「ホーム、スキート、ホーム」を歌ひ出す。眞面目なジョーンス君迄が、忽ち立つて、頻に首をふりながら歌つた。嗚呼光眩き電燈の下に、香高き花たわゝに挿した大花瓶を中にして、時候外れの暖爐の火快く燃ゆる傍に、僕等が安樂椅子に埋つて、シガー片手に聞き惚れた此の夜の樂かつた樣を、あはれ、幾年か思ひ出さずに居られやうか。

頓て、妻君や娘達は皆引き下つて、僕等四人だけ居殘つた。ウヰスキーが出る。例に依つて「日英同盟」の祝杯が擧がる。デ君とジ君の要領を得ぬ話が初まる。チャンドラー君、頗るの惡戲ずきで、デ君が酒を飲まぬといふのを、何とか彼とか言つて飲ませる。デ君が、例のクリスチアン、サイエンスで、近來烟草を已めて居るのを知つて居て、態

技師が家の晩餐

態シガーを其の手近に置く。デ君は關税政策か何かを滔々と辯じ立てた揚句、我を忘れて、うッかり之を手にする。チャ君は、細眼兒でも捕るやうな氣になつて、僕の耳へ『そら來た〳〵』と囁く。デビス老人なか〳〵喫はうとはせぬ。チャ君は、堪へ兼ねて樣々に說き立てゝ、やッと老人に喫はせて仕舞ふ。チャ君の喜びは一通りでない。

頓てポーカーが始まる。ポーカーなら、僕も聊か心得はあつたから、餘り負けもしなかつたが、眼の惡いデ君は、思ひ違ひ許りして大分負けた。負けれは負けるほど尙續ける。いたづらなチャ君は、此の寒いのにナイチンゲールなんど啼くものかと言つて、引留める。夫や此やで、夜は深けて、此處を出たのは十二時過。暗を貫くライラックの香が、何處からともなく夜風に傳はつて來る。成程、斯う寒くては、ナイチンゲールも出さうにない。

○土産の懷中時計

翌六月三日は、豫てデビス老人が拵へて置いた日程通り、朝から老人に連れられて、汽車でウィンリック城を見に行く。封建時代の舊城址を見んことは、僕が年來の希望であつたが、此の日初めて此の望を半ば遂げた。

城を見果てゝ後、今度は馬車を飛ばせて、十字軍の猛將サキソンのガイが舊居であつたガイス、クリッフを見に行く。ガイス、クリッフは、バーシー卿の所領で、此處にガイが遠征より歸つて後、其の爵位城池を棄てゝ、自ら切り開いた石室に隱れ住んだ故跡がある。此處を見終つて、又汽車でレミントンに歸つた。

停車場からデ君の家に向ふ途中で、自轉車を片手に引きながら、いそ〳〵と來る老夫人がある。僕を見ると均しく、手を擧げて、餘り歸りが遲いから、晝飯は女中に任せて

土産の懐中時計

置いて、之から何處やらへ出かける所だといふ。誰かと思つて能く見れば、デビス夫人である。老體を鼓して自轉車で遠飛とは、流石に逃竄露艦の碇綱を切つて、之を上海港外へ引き出さうとした人の細君だけあつて、中々えらい。

歸つたのは彼此三時。デ君と差向ひで、延引ながら昼飯を喰べて、夫から今度はチャンドラー君の店へ時計を買ひに行つた。僕は倫敦で新聞の原稿を書いて、四百圓許り原稿料を貰つたから、紀念の爲に母と妻とに時計を買つて歸らうと思つて居た折、幸に昨晩チャ君と相識るに至つたので、デ君の忠告に從つて、此處で買ふことになつたのである。チャ君の住宅は一寸山の手と云つたやうな閑靜な所に在るが、店はレミントンの大通パレード街の眞中に在る。レミントンの時計屋の主人と聞くと、つい大磯鎌倉邊の小さな時計屋の親父を聯想するが、チャ君は獨逸、佛蘭西に永く時計の研究に出て居たこともあつて、學識もあれば、獨佛兩國の語も自由に話す。歸來壯大な時計店を此處に開いて、グリーニッチから標準時の電達も受ければ、自分の考案で、電氣仕掛のシンクロノミーター裝置（レミントン全市の時間を一定する仕組）もやつて居る。餘り馬鹿には出來ぬ人である。

時計を二つ買つたが、金がまだ少し餘つたので、麗子の大病を毛頭知らぬ僕は、麗子の爲に又一つ七寶側の懐中時計を買つた。之を買ふ時、何だか折角持つて歸つても、麗子が喜ぶだらうか何だらうかといふやうな、變な疑を不圖起した。其の時は馬鹿々々しいと我から打消して、格別氣にも留めなかつたが、今考へると、此の日は、丁度麗子の病勢次第に嶮惡を極めて、迚も見込はあるまいが、先づ千番に一番の果敢ない望をかけて、明日愈大學病院へ入れると定まつた日であつた。

そんなことゝは知らず、此の夜はデ君の宅で、ジョーンス君を招いて晩餐を共にした後、一同打連れ立つて、ジ君の家へ出かけ、更にチャンドラー君を此處へ招いて、朝の

一時近く迄、又もや例のポーカーをやつたのである。

兎角して、ナイチンゲールは此の夜もとう〳〵聞き損つて仕舞つた。

沙翁の生地

ストラトフォード、オン、アボン

六月四日には、老人と沙翁の生地ストラトフォードへ出かけることになつた。

朝餐は濟んだが、老人中々腰を上げぬ。生溫くなつた茶に咽喉を濕はして、先づ加奈陀殖民策を論ずる。加奈陀は何でも日英兩國人で開發しなければならぬといふので、其の手始めとして、兩國人互に相接觸する機會を作る爲には、クリケットの選手を雙方から送るのが一番だといふ。夫れから話頭が太平洋を越えて、支那分割論に及び、更に大西洋岸に舞ひ戻つて、葡萄牙滅亡論なんどに說き入つた。斯う話が大きくなると、老人

椅子の脊へぐつたりと凭れて、左の手を振りながら、右の眼の左の隅から、凡そ九十度の角度に、僕の右の方を睨んでやり出す。夫人が氣を採んで汽車の時間を注意しても、中々動くものでない。

夫れほど落着いて居ながら、いざ發車時間十分前となると、急に話を切つて急ぎ立ち上る。帽子を被るが早いか、僕の手を取らん許りにして、停車場に驅け出した。此處からストラトフォードは四十分の道程、何かといふ中はや着いた。汽車の中では老人必ず僕に機關車の方を後にして腰を掛けさせる。正面に向くと能く風を引くといふ。

先づ沙翁が生れた家といふに行つた。荒壁を廻らした低い木造の二階屋で、大阪邊の町家で見る樣な格子窓が上にも下にもある。此の曠世の詩人の生れた室といふのには、沙翁の像と古ぼけた椅子が一つある切り、がらんとした大きな暖爐が室の隅に口を開いて居る。此の又暖爐なるものが馬鹿に大きくて、小さな人なら、結構其の中に住める位

沙翁の生地

ある。此處へ來る人は誰でも其の中へ一寸一度入つて見るものだと、番人が言ふから、僕も一寸入つて見た。何の面白くもない。

二階の一室に博物館が有つて、沙翁の遺物が數々列べてある。此處の番人は品の好い老女で、僕が此の家のことはワシントン、アーヰングの書物で讀んで、子供の時からお馴染だといふと、婆さん非常に喜んで、日本人は來る人々〳〵大抵アーヰングを言ひ出すのが不思議だといふ。と言つて僕を兎ある柱の所へ連れて行つたが、此處にアーヰングが直筆で書いた沙翁を弔ふ短い詩が貼りつけて有る。『私もアーヰングが大好きです』と婆さんは言つた。『卿の樣に何もかも承知で來て下さると嬉しいが、亞米利加邊から見える方の中抔には隨分ひどいのが有る。先達ても「シェキスピア君は今御在宅か」と尋ねて來た方が有つて大笑ひしたが、其の後門から一寸首を出して、「先生今書き居るかネ」と左も知つた樣な顏で來た人があります。毎年六十箇國許りの人々が此處へ來るが、

其の中數から言へば亞米利加人が半分です。』――沙翁が生死の程も知らぬ樣な人が、唯其の名だけを聞いて、人並らしく出掛けて來るなどは、餘程可笑しい。

屋根裏の寢室から階下の盞所迄殘りなく見たが、アーヰングで見た沙翁の椅子といふのは一向見當らぬ。聞けば、其の頃の什器で今は何一つ遺つたものがないといふ。尤も什器と言つたとて、其の頃此の邊では、床の上に柔かい草の葉を敷物代りに敷いたといふ位だから、何せ大した物は無かつたに相違ない。之が今六十箇國の人の尋ね來る所とはえらい。歸りに入口の番人に、一體此の家は今誰の持物だと聞いたら、番人は得意氣に唯一語、「ネーション（國民）」とばかり。成程、斯う來なくてはいかぬ。

沙翁を埋めたトリニチー會堂に詣でゝ、沙翁の誕生を書入れた古い記錄や、敎壇の後にある碑などを見る。有りし世の昔を思ひ出だして感頗る深い。此處に備へ附けた大きな訪客簿も二冊用意して、一冊は亞米利加人專用としてある。寺の門の扉には、丸い

鐵環が一つあつて、昔はどんな罪人でも此處まで逃げて來て、此の環に手を觸れさへすれば、寺領内の民となつて、警吏も如何ともすることが出來なかつたのだといふ。老人はジャスチス、オブ、ピースとて、地方の司法事務に與る一種の名譽職を帶びて居るだけに、斯なことを頻に感心して聞いて居る。

之から沙翁記念劇場を見て、ぶらり〳〵其の邊を歩き回つた揚句、來るともなしに、何時しかアボン川の岸に出て來た。川に臨んで、氣のきいた小さなホテルがある。鷺の巣館といふ。何な巣だか一遍入つて見やうと、デ君が言ふので、一所に其の酒場に入つた。

バーには若い小意氣な女が居る。バーの前には、大卓子があつて、其の兩側に腰掛が列んで居る。僕等が之に腰を下して、麥酒を注文すると、丁度僕等の前に、矢張り麥酒を飲んで居た一寸貴族の馬丁頭といふやうな風の男が、『何うもお天氣がはッきりしませんな』と挨拶する。『昨日は折角のお出でしたが、生憎の雨でお困りでしたらう』といふ。合點の行かぬことを言ふと思つて聞けば、此の男は、昨日僕等が見に行つたレー卿の邸に居る者だと分つた。此處へ又一人、戸を排して來た若い男がある。身扮から、風采から、何だか此の邊の金持の息子らしい。バーの女に何やらん冗談をきゝながら座に着いて、ポンチを取り寄せた。後で聞くと、大學で電氣工學をやつて、卒業の後何處とかの技師になつたが、面倒臭くなつて、今では家へ歸つて遊んで居るのだといふ。大分のんきな方だ。

一所に飲まうぢやないかと、例の工學士が發言する。一同ポンチの盃を擧げる。老人だけに、話の緒がデ君の口から開けて、昨日レー卿の邸で催されたクリケットの評判から、馬丁頭が自分の生國蘇格蘭の自慢話となり、工學士の蘇格蘭攻撃の餘波が、蘇格蘭出身の現首相の人物評となり、デ君が更に之を横道に飛ばして、自由黨内閣の無

沙翁の生地

能を罵るやら、チェンバレンの關税政策を辯護するやらで、とう〳〵一大混戰となつて來た。盃は幾度か乾されて、幾度か注ぎ直される。其の度毎に、デ君が金を拂はうとすると、何時の間にやら例の工學士が拂つて居る。そんなことをしてはいかぬと、デ君が爭へば、『君の拂ひ損ふのが惡いのだ』とて、一向取り合はぬ。

『一體今の首相の名は何だい。』工學士が眼の縁を赤うして、意地惡く問ひかける。

『蘇格蘭人さ。』馬丁頭は傍へ外らせる。

『名を聞くンだ。名を。』

『君は首相の名も知らないのかい、英吉利に居ながら。「カンブルバナマン」さ。』

『も一度、はッきりと言つて呉れ玉へ。』

『カムブル』と、今度は少し切つて、馬丁頭は『バナマン』と續ける。

『ソレ其處だ。「バナマン」が何で「カムブル」を頭につけたか知つてるか。カムブル家の財産が相續したさに、人の姓迄背負ひこんだのぢやないか。』

『さうか。』馬丁頭が機嫌よく笑ふ。

『さうかじやないよ。』工學士も柏子ぬけがして笑ふ。

一同皆笑つた。バーの女迄吹き出した。蘇格蘭の話から。倫敦警視廳のことに轉じて、工學士は、倫敦で十二時過に酒を飲まうと思ふなら、警察のバーに行くが一等だと、不思議なことを言ひ出す。『そんな馬鹿なことはない』と馬丁頭が笑ふ。之でも亦一花咲せた。識れば親しき英吉利人の常として、僕を外國人らしくも扱はず、打解けて、且酌み且つ語ること、三時許りにして、僕等は此處を出た。

アポンの流徐かに綠樹の間を流れて、トリニチー會堂の塔尖に、夕日の影微に紅を留めて居る。デ君忽ち上着を脱いで、シャツ一枚になり、岸邊の小舟に僕を誘ひ入れて

『僕が漕ぐから君は舵を取れ。』といふ。斯くて老人自ら櫓を取り、此處を漕ぎ上り漕ぎ

沙翁の住地

下ること數回にして、初めてレミントンに歸つたは彼此五時過である。歸つても老人は妻君に叱られるとて、鶯の巣ホテルのことは決して言はぬ。偶々妻君が居なくなると、僕に目配せして、『宜い巣だつたな』と來る。

ストラトフォードから歸つて直ぐ茶になる。一體今頃迄何處に居たかと夫人が尋ぬるのを、風に柳と受流して、老人はがぶり〳〵とお茶のお代りばかりして居る。夫人が何かいふ毎に、頻りに僕の方へ目配せをする。夫人は夫れとも知らず、チーズの容器の蓋を明けて、『ひどい臭だこと』と言ひながら黴の生えたゴルゴンゾーラを僕に侑めた。黴の生えて青苔の樣な香のするゴルゴンゾーラを嗅ぐと何となく陽氣になる。此處で老人の加奈陀經營策と夫人のクリスチャン、サイエンス論がちやんぽんに始まつて、良暫く僕は相手をして居たが、餘り疲れたので、其の儘二階の僕の部屋へ歸つた。

村の緣日

ぐッたり寢臺の上に寢そべつた間もなく、老人の靴音が聞えて、『面白いものがあるから見に行かう』と引張出しに來た。何だと聞けば、『フェアだ』といふ。何だか分らぬが一所に戸外へ出ると、村の人々が三々伍々相次で、南の方へ出かける。何したのかと聞くと、『フェアだ』といふ、彼れ此れ三四丁も歩くと、左の方の空がぱッと明るくなつて、電燈が煌々と見える。彼れは何だと聞いたら、『フェアだ』といふ。此の邊から人通が大分繁くなつて、頓て其處へ着くと、押し合ふ程の雜沓だ。方三四丁も有らうといふ廣場に、幾つか天幕を張り渡して、見世物がある、蓄音機がある、道化芝居がある、メリーゴーラウンド（自動木馬）がある、スキッチバック（自動鐵道）が有る、何の小屋の番人も聲を嗄して客を呼び立てゝ居る。一體是は何ですと聞くと、老人は相も變らず

村の絲日

『フェアだ』といふ。

成程、斯なのがフェアかと初めて合點が行つた。フェアといへば、ウォールヅ、フェア（世界博覽會）などの大きなのか、夫でなくとも物の賣買を主眼とする市場と許り解して居たが、フェアの語原が「休日」の意味である所から見ても、斯な緣日の樣なのがフェアの本義に叶ふものかも知れぬ。昔は此處へ田舍から連れて來た女を列べて、下女に賣つたものだが、近頃は唯もう子供の遊び場となつて仕舞つたと、老人が說明した。

何でも一年に二度ほど開けて、其の日は村中の男女が總出で遊ぶのだといふ。

如何にも老若男女、出も出たりだ。中にも子供が多い。太ッちょうの嬶が十人近くの腕白さうな小僧許り連れたのも見える。若い娘が七八人連で練り歩くのもある。總じて美人の多いレミントンのことゝて、斯うして出歩く娘達にも、十人並勝れたのが八分通ある。之が腕きりの白い薄いシャツを着て、質素な襞の少いスカートを小りゝしく穿い

た所は、淡泊として如何にも高尙で宜い。殊に見渡した所、此の大勢の娘の中で寶石一つ光らした者が殆ど見えぬ。白粉をべと〳〵させた者に至つては、丸で唯の一人もない。大に我輩の「自然主義」と合する。

メリーゴーラウンドには、年頃の娘が乘つてきやッきやッきやと騷いで居る。スキッチバックには、子供を連れた勿體らしい村の學校の先生らしいのが、滑り下り滑り上る毎に、手を拍つて喜んで居る。如何にも面白さうだ。僕にもやらぬかと老人は言つたが、何ぼ何でも、僕は彼の木馬に乘つて、嵯峨野の仲國といふ見えは出來ぬ。僕には出來ぬが、老人には隨分乘つて見る氣が有つたらしい。とある見世物の前へ出る。薄汚い身なりの村の子供が十人ほど其の前に立つて、看板を見ながら、何やら喋つて居る。老人の姿を見ると、一齊に此方へ向き直つて、輕く禮をした。老人は衣囊から掴み出した幾何かの金を木戸番にやつて、此の子供殘らず入れてやれと言ふ。さう言つたきり、さッさと此

村の緑日

處を通り過ぎて、「プーア、ボーイズ」と獨言の樣に老人は言つた。其處へどやぐ〳〵と十七八の背の高い娘が三四人來る。老人は其の後姿を感に堪へた樣な顏で、頭から足許迄見上げつ下しつして、『近頃英吉利では女が段々大きくなつて、男は次第に小さくなる傾きがあるさうな。日本でもさうだらうか』と聞いた。

餘り喉が渴いたので、近くの酒屋に入つて、僕は炭酸水を一本飲んだが、此處を出て家路に就くと、『炭酸水といふ奴は——』と、少し言ひ澁りながら、老人は始めた。『恐ろしいデヰリレーチング（故と英語の儘でおく）の効のあるもので』と、漸々言つて仕舞つて、夫から頗る奇拔な實例を擧げて、盛に炭酸水論をやつた。併し如何な自然主然の僕も、之を此處に書く勇氣はない、老人は炭酸水に限らず、何でも手當り任せに問題を捉へて、議論の種にする人で、此の前にも金剛石が必ず日本にもあるといふ原理（？）を散々說いて、さて君きりの話だがと、自分がトランスバールの專門家から聞いて來た、

金剛石を探し出す祕訣を僕に敎へて呉れた。僕は自身で探しに行く氣はないが、誰か此の祕訣を百萬圓位に買つて呉れる人はないかと待つて居る。

歸れば晩餐の支度が出來て、老夫人が心靈しのアスパラガスが出た。風呂も沸いてるといふので、二階迄入りに行くと、隣の居酒屋で醉どれた村の百姓が、濁聲高く何やらん歌ふ聲が聞える。夫れが止むと、手を拍つ音、笑ふ聲、緑日だけにさも陽氣な。

古城の敗墟

ケニルウォース

五日の朝早く倫敦の加藤中佐から電報が着いた。今夜ハイド、パーク、ホテルで催す山本海軍大將の晩餐會へ出て來いとの案內である。さては大將愈其の齋し來つた使命を全うして巴里へ立つのだなと、僕は心私かに祝賀した。後で中佐から聞けば、用が濟

古城の敗墟

むと殆ど同時に、それ出立といふので、大急ぎに晩餐會を開くことになり、請待狀の印刷が間に合はぬ爲一々電報で案内したのだといふ。電報で『誰某大將某日某時某所の晩餐に於て誰某君の出席を求む』と、三人稱の請待狀を受取つたのは、僕も之が初めてだ。宴會にも出たいし、此處にも居りたいし、何うしたものかと思案に迷つて居る所へ、老夫人が來て、配達人が待つて居るから、返事は何うすると言つて來た。此の邊の電報配達は屆け放しにせずして、一々返事の有無を聞いた上、返事があると聞けば、料金と一所に持つて歸つて呉れるのである。日本でも夫位の手數は見ても宜さゝうなものだ。僕は兎も角も出席の旨認めて、返電を賴むことにした。

夕の七時三十分開宴とあるので、遲くも此處は三時の汽車で立たなければならなくなつた。夫迄に是非とも今日見に行く筈であつたケニルウォースの古城址へ出掛けやうと、急ぎデビス老人を促して家を出た。此處から道程は凡そ五哩。僕等は脊の高い電車の吹

曝しの二階に乘つて、六月初のうすら寒い風を受けながら出かけた。電車の上でも、老人の加奈陀開發策が盛に出る。

遠い〳〵昔を言へば、今のケニルウォースの古城のある處には、羅馬時代に建てられた古い城砦が有つた。其の城の址へ紀元八百年にサキソン王ケチルフが新に一城砦を築いた。之が抑〳〵此のケニルウォース城の初まりで ウォリアム征服王の子ヘンリー一世が之を其の臣クリントンに讓り、クリントンが之に大修理を加へた以來、更に世々の主が櫓を加へ砦を擴げて、遂に儼然たる英蘭ミッドランド諸州の雄鎭となるに至つたのである。其の間或は王の直轄する所となり、或は武臣の管領する所となり、花開き花散ず幾春秋、城濠の水長へに碧を湛へ、樓臺の輪奐舊に依つて其の面目を改めはしなかつたが、果敢なき城の主は幾度興り幾度亡びたか知れぬ。兎角する中、エリザベス女王の朝に至つて、之を其の嬖臣レスター伯爵に賜はり、伯爵自ら工を督して、新に之を

古城の敗墟

玉敗の毫に作り做した。工成つて後女王を此處に請じて、十有九日の間金殿の歌吹、玉樓の絃舞、心ゆくばかりに之をもてなし參らせたことがある。其の折レスター伯が王の寵を恃んで、自ら之が配たらんことを企て、奸臣ヴーニーに煽がれて、其の妻エミー、ロブサートを殺した顚末は、スコットが名著「ケニルウォース」の中に事も細に出て居る。僕等が城の由來を知るに至つたのも、實はスコットの此の小說から來たのである。

是より後七十年、スチュワート王統一たび倒れて、クロムウェルの執政時代になつた時、城內の目ぼしい物は剝り飛ばす、城濠や城を圍んだ湖水は埋る、堅固に仕つらへた各城樓は孰れも私人の住宅となつて仕舞つた。是ばかりでさへ、早や城は昔の面影を留めぬ荒れ果てたものになつて居たものを、其の後幾百年、城の石垣石室は次第に叩き毀されて、手頃の石は村人の勝手に持ち出す所となり、一時はさながら村の石切場同樣の姿になつて、荒れた城は更に見る影もなく、一層荒れさびれたものになつたのである。今日

では成るべく舊態を保存する積で、嚴重な監理人を置いて見張つては居るが、元より落莫たる古城の廢墟、レスター伯が榮華の夢の跡として、僅にぽつ〳〵と訪ひ來る客のあるに過ぎない。

停車場からバーミンガムへ出る街道の左側に、小さな入口が有る。此處で六片の入場料を拂つて、一歩其の中に踏み入れば、レスター卿の建てた城門堅固の衞士が詰所として、四階造りの古い建物が直目につく。

メーの花石南木の花の咲き亂れた間を通つて中に進めば、左の方はレスター卿の厩舍を中に置いて、ラン塔、ヨーター塔などいふ城の外廓、正面にはスコットの中に屢出て來るモルチマー塔に通ずる細徑が有つて、其の右が昔の裏門、ヴーニーがエミーを連れ出した所とある。右の方は柊の生垣美しく結廻はされた一面の芝生で、其の芝生が爪先上りになつて、やゝ小高くなつた岡の上に、其處に、遙に、壁は破れ柱は折れ屋蓋

古城の敗壘

殘りなく消えて、唯斷礎の累々たるを存せるケニルウォースの本城が現れる。

青芝の處々に、幾百の羊が、世の治亂興亡を知らずげに戯れて居る。黄色な花の咲いた丈の低いゴースが、彼方此方に地を匍つて居る。此處を過ぎて、昔の濠の跡といふを左右に眺めながら先に進めば、前に廣庭、右にノルマンの固めと唱ふる櫓、左の方にはヘンリー八世が宮居の跡、其の奥少し引き入りたる所にレスター伯の殿居の跡がある。此の廣庭こそ、温良にして篤學な失戀の騎士トレシリアンが、照渡る月をたよりに、レスターと闘つた處、彼の殿居こそ、伯が何とかいふ惡典藥と謀つて、ひそ〳〵とエミーの毒害の事を議した處。思ひ出すと、若いエリザベスの花やかな御裝、ヲーター、ラレーが生際美しい賢しげな顔、よぼ〳〵爺のレーナムが勿體ぶつた容態など、あり〳〵と目に映る。思ふにエミーがトレシリアンの室を脱出した後、庭の洞窟に隱れて、女王に窮狀を訴へたのも、或は此の邊でなかつたらうか。

更に進むと、右の方に大きな料理場の跡がある。じめ〳〵と濕ッぽい空氣が面を撲つて、蟋蟀の樣な蟲が佗しく壁に取りついたまゝ身動ぎもせぬ。昔は三千の貴賓に侑めつべき珍羞佳肴の用意に、雪白の前掛甲斐々々しく、幾百の厨夫が右往左往に入亂れた所でもあつたらうが、今は僅に竈の跡に薄黑く煙の色らしいのを留めたばかり。料理場から廣庭を隔てゝ、向側には、半ば毀れたホワイトホールに列んで、其の昔の便殿がある。衣冠束帶の人影は長へに失せて、烏がうら哀しげに啼いて居る。廣庭の正面には、礎の破片、柱の崩れたのが一面に轉つて、雜草の蓬々と茂つた、宏大な敗地がある。是が即ち其の頃の大宴會場の跡だといふ。今殘つたのは見上ぐる許りの壁が奥の方に僅に立つたきり。侯伯貴紳の列を正して、エリザベスの饗宴に陪した記念は唯是許りである。斯る所には似つかはしい烏が、此處にも頻に飛び廻る。此の右の横から廊下を傳つて、地下室に下れば、之が其の頃の獄舍。二尺に餘る厚壁に、尺四方にも足らぬ小窓が一つあ

古城の敗墟

るだけで、濕氣を帶びた空氣が微臭い風を送つて來る。餘り心持の宜さゝうな所でもないやうだなと、デビス老人が舌打をしながら言つた。之から再び上に出て、宴會場の横手から、僅に殘つた城樓の屋根の上に攀登れば、今迄の陰氣な敗屋とは打つて代つて、忽ち脚下に展開し來る萬頃の蒼野、――うね〳〵と曲つた細流が、幾線白う其の間に染出されて、遙の森にほう〳〵と郭公の聲が聞える。

此の見渡す限りの原が春水瀦々たる湖水で有つて、彼方此方に見える小高い森が、其の頃の島であつたかと思ふと面白い。僕は老人とぐゞたりと腰を草の上に下して、良少く考へた。何を考へたか、止度もなく樣々の考へが出る。萬感胸に何とかと言つて、難しい「摑まる」といふ字を書くのは、斯いふ時かと思つた。僕は此處で唯一人一時間許り も考へ込んで見たいと思つたが、老人が又しても三時の汽車を言ひ出すので、名殘惜くも初めて座を立つた。

レミントンに歸つて、暇乞そこ〳〵三時十五分に立つた。倫敦に着いたのは五時半で、宿に歸れば早や六時だ。何はさておき、不在中同宿の客に別に變りもなかつたかと聞く積りで、女中のベチーに「ノー、チェンヂ？」と尋ねると「九―六だ」といふ。さあ分らぬ。全體夫は何の事と問ひ返せば女中はすまして、今度は「九志六片あります」と答へた。僕は思はず其の顏を見上げて吹き出した。ベチーはチェンヂを釣錢と間違へて、出しなに預けて置いた、切拔通信社の勘定を、突然に言ひ出したのである。

盤一つ蜘蛛の巢にかゝれり。かゝれるまゝに光れり。
一日經て盤は死せり。死にたるまゝに尙光れり。

七花八裂

續レムの里

未見の知己

次のレミントンは、同じ年の六月十五日を以て、ケンブリッヂの側なるハンチンドンから出かけた。

是より前、ハンチンドンの人、瀬山某君は、同じく僕が「メール」の記事を見て、突然書を寄せて、僕に來遊を促して來た。文辭懇到、實情言外に溢れてゐる。其の最初に寄越した五月二十日附の書面に曰く、

僕もと武士の家に生る。今はバーナード夫人が家に仕へて、此の地に在ること三十年に及べり。君若し僕が地位の低きを意に介せず、僕が招請を容れて此の地に來り

玉ふが如きことあらば、僕は君の爲に此の舊都の各所の、君に興あるべしと思はるゝものを示し參らせ得んことを、無上の光榮となすべし。倫敦キングスクロース停車場を八時四十五分に發し玉はゞ、十時六分當地に着すべく、午後は六時五十三分又は九時十七分發にて歸らるゝことを得ん。一夜を此處に明し玉はんこと亦可なり。日は何日にても君の好む所に任す。君若し此の光榮を僕に與へんず思ひ玉はゞ、願はくは二三日前に知らせ玉へ、敬具。

英文だから名は確と讀み分けられぬが、慥に姓の瀬山なることだけは知れた。其の名の壽であることは、後に至つて聞いたのである。初は、日本人なら英文で書かなくても宜さゝうなものとも思つたが、其の書面の書き方が如何にも懇切なのに動かされて、僕は兎に角五月二十五日にお尋ね申さうとの返事を出しておいた。所で越えて二日、二度目の書面が着いた。

未見の知己

君が返書を得て、感謝言ふ所を知らず。唯君が選ばれたる日の折悪しく日曜日なるは、僕の甚遺憾とする所なり。日曜日には、何れの所も閉鎖せられ、前に言へる所の八時四十五分發の列車も亦なし。僕の初より之を語らざりしは、何等の恐なりしぞ。願はくは、日曜日ならぬ日を選び玉へ。然し玉はゞ、僕は停車場迄君を出迎へ、參らすべし、云々。

とある。

實はレミントンから倫敦に歸つて後、如何にもして今一度出かけて、再びケニルウォースを訪ひ、又ナイチンゲールの聲も聞き、次手にオックスフォードへも寄つて見たいと考へてゐたので、寧その事其の次手にハンチンドンへも寄つて見やうと心を定めた。乃ち先づ北の方ハンチンドンを訪ひ、西してレミントンに入り、更に南の方倫敦に歸るの途、半日をオックスフォードに送らうと、大體計畫を立てゝ、愈六月十五日に出かける旨を瀬山君に報じた。六月十三日、三たび瀬山君の手紙が着いた。

尊翰披見、君が十五日に來るべき由の報に接し、僕の欣喜限なし。僕は必ずハンチンドン停車場に出迎ふべし。バーナード夫人も亦君と會せんことを樂とし、其の子息を合せて、君と午餐の卓を共にせんことを望めり。僕は此の日の好天氣ならんことを望む。云々。

クロムウェルの生地

ハンチンドン

六月十五日早朝倫敦のキングスクロース停車場を八時四十五分に發した急行列車は、無二無三に北に走つて、途中一回も停車せず、頓て二時間半も走つた後、列車は尚どんどんと北に向つて進行を續けながら、唯僕等の乘つた最後の客車一輛だけを颯と切放し

て、ハンチンドン停車場で留めた。例のスリップ、カーといふのださうな。

プラットフォームには、年配五十位の日本人が子供を連れて立つて居る。僕の姿を見ると、急ぎ其の側に飛んで來て、僕の革嚢を取つて、恭しく僕の手を取つて、車の外に助け出して呉れた。『卿は瀬山さんですか』と尋ねる。相手は口をもぐ〳〵させて、何やらん言ひ澁る樣子。頓て思ひ切つたやうに、『杉村君でせうな』と、はツきりと英語で答へた。斯う英吉利語で出られると、勢ひ手を出さずには居られぬ。互に手を握り合ふ。先生、一寸連れて來た子供の方をふり返つて、『ヂス、イズ、マイ、サン！』。さてもえらいことに成つて來た。彼は過ぐる三十年間に全く日本語を忘れて了つたのである。

僕も仕方がないから、到頭英語を使つた。初めは、何だか馬鹿臭いやうな氣がして、動もすると、日本語が口元まで出かけて來たが、此の地の町立病院を見たり、馬車製造所に案内せられたり、クロムウェルが初めて教育を受けたといふ小學校や其の洗禮を

受けた教會堂などを見て、二時少し前、愈〳〵夫人の宅へ着いた頃には、僕も何時しか慣れて仕舞つて、夫人の前では、二人とも一向平氣で英語を喋つて、却て夫人から笑はれた位であつた。英吉利に來てから、隨分いろ〳〵のこともあつたが、僕が三味線の引き方を教へたのと、日本人と終日英語で語り暮したやうなことは、恐らく後にもあんまり有るまい。

停車場で瀬山君に會つて、其の足で直ぐ見物に出かけた。降りみ降らずみ氣の知れぬ英吉利の雨は、又もやしと〳〵と落ちて來る。

カウンチー病院に入つた。院長といふは年配の婦人で、之が懇に二人を案内して、院内殘る所なく見せて呉れた。此の病院は今から六十年程前に建てたもので、其の維持費は主として有志者の義捐に仰いで居る。夫れ一人の患は萬人の患、村に病人の無くなるのは即ち村民一同の利益であるといふ所から、成るべく村民の入院を手輕にして、入院

料とても一週僅に十八志を徴するに過ぎず、大抵の場合は施療を事として居るといふ。日本で斯ういふ病院といふと、必ず埃だらけの汚ない建物の中に、食ひ詰めた藪醫者が二三人、せうことなしにごろついて居る位のものだが、此處のは流石に行屆いたものだ。手術室、診察室、看護婦室、醫員室、病室等を順々に見て廻ると、何處やらの模範何々といふ物の模範らしからぬに比べて、模範ならぬ此處の設備の方が遙に模範らしい。閑靜で、清潔で、其の上に何處も彼處もくわらりとして明るい。廊下に一點の塵もなければ、階子段に草履の音高くばた〳〵と走せ行く無遠慮な者もない。凡て病院の模樣は看護婦の一言一行に知れるものだが、此處の看護婦の言語動作の靜淑にして丁寧なことゝいつたら、迚も、問さへあれば詰所に額を埃めて、燒芋をかぢりながら、醫員や附添人の棚卸を事として居る者と比較にはならぬ。あはれ、東京を六十哩隔てた某々の小村に、こんな病院の出來るのは何百年後のことだらうかと思ふと、心細くなつた。

院内を見廻つて後、醫員の一婦人が案内で裏庭に出ると、花には事缺かぬ英吉利の庭とて、一面さま〴〵の花の色どり、目の覺める心地がする。其の片側に木造の小屋が一つあつて、三面は板を覆ひ、一面は開け放しで僅に帳幕を垂れて居る。回復期の肺病患者を收めて、戸外の空氣療法を施す所ださうな。瀬山君と共につか〳〵其の側に寄れば、中に花の樣な少女が二人坐つて居て、僕等を見ると均しく、立ち上つて會釋した。瀬山君は持合せた畫葉書を二人に與へる。僕はやるものがないので、例の肺病全快談を一席辯じて、さも物識顔に横隔膜呼吸のことから、戸外療法のことなど、デビス老人式の氣焰を大分揚げたが、側に居た醫員は、斯んなことが患者に取つて非常な慰安になるのですと、大に喜んで呉れた。此の小屋には底に小さな車輪を四つ附けて、日向の方へ何方へも廻せる樣にしてある。寒中でも。戸は閉めず火は用ひず、夫で居て寒くも何ともないと、病人の娘は笑つた。

此處を出て、ウキドバ馬車製造工場といふを見に行く。瀬山君此の地に住すること三十年、交友上下に遍く、何處に行くとして識らざるはない。輕車肥馬の客も帽を脱し、短褐弊衣の徒も亦手を擧げて行過る。此處の工場などでも、木工、鐵工皆喜び迎へて、愛想よく案内して呉れた。馬車に使ふ板は切出した材木を何年とか水に漬けて、幾月とか雨に曝らした上で挽くのだとか、長々とシーズニングの講釋をするもあれば、馬車が次第に廢れて、近頃は自動車の製造の方が多くなつたので、勝手が違つて困ると顰すのもある。丁度此處に當地の領主サンドウキッチ伯の注文した自動車が、荒方出來かけて居るのを見て、其の自動裝置が最新の何とか式だとか何だとか、僕には丸で分らぬ器械の説明をする人も出て來た。親切といふは退屈なものだなと思つて、此處を出た。雨がまだ降つて居る。

頓て常春藤の隙間もなく絡みついた古いお寺に着いた。之はクロムウエルの初めて洗

禮を受けた所とかで、其の中に、彼れが誕生の書入をした記錄がちやんと遺つて居る。古色蒼然たる此の閑寂な堂の中は、閑として人の氣色全く絶えて、僅にステインド、グラスを透して、五月雨の空の朧げな光が鬱陶しくさし込む許り。何とやら人をして襟を正さしむるものがある。故跡を尋ねるのは、酒を飲むやうなもので、雨の降る日に限る。

今度はクロムウエルが、初めて教育を受けたといふ。クロムウエル小學校に出かけた。其の當時用ひた教室は、今も尙其の當時の儘に保存して、承塵の上には、彼の荒のある大きな顔の肖像が懸つてある。此處で受けた教育が基となつて、彼れが悲憤の餘り、遂にチャールス第一世を斬つて、英國の王政を顚覆するに至つたかと思ふと、此の小さな教室のベンチにも、卓子にも、自由を重んずる英吉利人の思想が彫り附けられてあるやうな氣がする。

此處の校長は面白い若い人で、能く談す。談偶地理學教授の事に及ぶと、校長は『地

理の教授に山や川の名を無暗に詰め込むのは、徒に生徒の頭を疲らすに止まる。一國の依つて以て立つ所以が、政治關係であるか。商工業であるか、交通運輸の點であるかを教へて、斯いふ性質の國には何いふ山、彼いふ成立の國には何いふ港があるといふ風に、國の發達に伴ふ自然の順序を、教授の上にも追つて行けば、乾燥な地名の諳記よりは面白くもなるし、覺え易くもなる。』と語り出した。而して其の揚句に世界各國の政治經濟に說き及んで、日本の財政が何うの斯うのと滔々と辯じ出す。財政に迂濶な僕は一方ならず面喰つたが、之と同時に校外一歩の世事を丸で心得ぬ、迂濶千萬な何處やらの小學先生に比べて、流石にクロムウエルの出た土地の先生だけあつて、自から選を異にした所があると感心もした。

辭して出やうとする所に、木工教室といふ新築があつた。之は生徒の望みにまかせて簡單な大工の仕事を教へる所だといふ。僕は此處でスペンサーだか誰だかゝ『どの人間

にも行き渡つて一番大切なことは、子を育てる一事であるが、不幸にして、何處の學校にも育兒に關する課目を置いたのがない。』と言つたことを思ひ出した。大工の仕事なども矢張り夫れだ。天性手先の器用な者ならばこそあれ、左あらぬ限りの者は、一寸した棚を釣るにも、小さな鼠の穴一つ塞ぐにも、一々大工を呼んで來る。之を學校で習はせて置くといふのは、成程宜い思付であると思つた。

バーナード夫人の宅へ着くと、夫人の姉さんや妹が、僕を珍客だとて下へも置かぬ。バ夫人の宅は、クロムウエルの生れた家で、今も尙ほクロムウエル、ハウスと唱へて居る。平生は、其の姉さんと二人暮しだが、今日は何處かに片づいてゐる今一人の妹も、僕を見旁來て居た。息子の辯護士も、態々倫敦から來る筈であつたが、まだ見えぬといふ。此處で此の三人の婦人と卓を共にして午餐の御馳走になつた。家の中は、日本好な故バーナード氏の蒐めた日本畫や日本刀や、其の外日本から持つて來た骨董品を一面に

列べて、彼は何處で買つたもの、此は誰に貰つたものと、夫人は一々説明して聞かせる。言ふ迄もなく、夫人も大の日本好である。瀬山先生、自分も士の子だとて、刀を一本持つて來た。夫人が、何か二人で日本語をやつて見て呉れといふから、僕は其の刀を指して、『之は君のですか』と問うたが、君には一向分らぬらしい。三十年前に恐らく「君」といふ代名詞がなかつたらうと思つて、今度は『此の刀はアナタのものですか』と問うて見たら、僅に分つたと見えて、肯いた。

雨が霽れたので、食後は瀬山君と其の娘と三人連で、警察の獄舍を見に行つた。之は警察署の裏にあつて、輕罪犯の者を禁錮しておく所だ。薄暗い石壁の兩側に監房があつて、一人宛入れてある。案内の巡査が、此れは何犯、彼は何罪と一々説明して行くと、中なる囚人は苦い顔をして目禮する。にたりと笑つて、『今日は』と聲を掛けたのも有つた。泥棒から『今日は』は聊か驚く。巡査は格別叱りもしないで、丸で友達同志の樣な

調子で談して居る。英語に敬語が少いから、さう聞えるのかも知れぬ。

此處からサンドウキッチ卿の居城ヒンチンブルークを見に行つた。瀬山君は、盛岡の藩士で、其の弟さんは、今同地で盛に林檎栽培をやつて御座る。此處の瀬山君は、十五六の時當地へ來て、英吉利の婦人を娶つて、男女合せて三人の子を擧げ、今は英國に歸化して、英國の臣民となつて居る。本國と背面の往復がしたくても、日本文が分らぬので、丸龜の中學に居る親戚の某學士を介して、一々翻譯の上で送るのださうな。小さい町の中で三十年も居たことゝて、ハンチンドンの村中で、何處に行つても瀬山君を知らぬ者は殆どない位。此のサンドウキッチ卿の邸を見に行つた時、門衛が居ないから、其の儘無斷で入つて、屋敷を一巡して後又門を出やうとすると、後からこら〳〵、〳〵と呼ぶ者がある。英吉利でこら〳〵は珍らしいと思つて、ふり返ると、雲を突く大男が立つて居る。瀬山君は打笑つて『泥棒でないよ』といふ。大男も笑つて、『ハ、ア君か、君ならば二十年

クロムウエルの生地

來の友だ』といふ。到る處之である。

歸途に此の村の麥酒釀造場に入つた。麥芽の製造から麥酒の梱詰の所迄巡覽したが、日本に麥酒のあることをさへ知らぬ瀬山君は、頻に『大きなものですな』と感心を促しに來る。が併し、此の小さな工場を見て、僕は初めて日本にも大きなものゝあるを誇り得るごとゝなつた。病院を見ても、警察を見ても、學校を見ても、馬車屋を見ても、貴族の邸を見ても、唯もう遠く日本の及ばぬ所とのみ見て來たが、麥酒の釀造場だけは、慥に日本にもつと立派なのが幾らもある。――之を平たく言ひ直すと、衛生司法教育交通は皆負けるが、酒なら來いといふことになる。

雨が漸く霽れる。一先バーナード夫人の宅へ歸ると、丁度お茶の時刻になつた。雨あがりの庭の若葉を眺めながら、香氣のいゝ錫蘭茶を啜りながら、老夫人の其と姉妹を相手に、やゝ暫し樣々の物語をしたが、今朝既にレミントンの方へ電報を打つて置いたことでもあり、天氣が何う又變るか分らぬので、今晩は泊つて行けといふ夫人の勸めを強て斷つて、瀬山君と一所に停車場に驅けつけた。

汽車の乘替

バンチンドンからレミントンへ行くには、大西線と中央線と二つあつて、何れを行つても、途中で二三度乘り替へなければならぬ。先づ中央線の方で時間を聞き合すと、何うも當會社の線には、都合の宜い列車がないから、一度大西線を聞き合せては何うだらうかと注意して呉れた。成程私立の會社が個々分立して居ても、斯う打明けて話して呉れると、分立の不便は餘程少くなる。去年和歌山市から名古屋へ出やうとしたことがあつたが、市驛では、關西線と連絡がないと言つて、中々手荷物の連絡輸送を引受けて呉れず。やッと驛長に懇願した上で、和歌山驛乘繼のことを計らつて貰つた。和歌山驛

汽車の乘替

と和歌山市驛と、互に目と鼻との間でありながら、會社が違ふと斯ういふ不愛想な取扱ひを受けるのである。

大西線の方に行つて聞き合せると、驛長は時間表を彼此と引繰り返した後、ケタリングとレスターとラグビーとで乘り替へれば、十時にレミントンに着くが、通し切符の用意が此の驛にないから、ラグビー迄の切符を差上げやうとのことであつた。斯くて此の由レミントンへ電報を打つて從いて、四時過に乘車したが、レスターに着いて聞くと、ラグビーを廻つて十時にレミントンに着くのは、土曜日の汽車に限るので、今日は生憎とそんな都合のよいのはないといふ。僕ははたと當惑した。居合せた驛夫に、何とか仕方があるまいかと相談すると、驛夫は、倫敦西北線の直通列車が八時に出るから、夫で行くが宜からうと教へて呉れて、件の倫敦西北線の停車場は、何のブリッヂを何う渡つて、何う曲つた所に在ると迄、細かく聞かせて呉れた。

教へられた通りに行つて、此處で又事情を話した所が、驛員は氣の毒がつて、之からレミントン迄の切符を買へば、ラグビー迄の切符は無効になるから、其の由大西線の會社へ通じて料金の拂戻しをお受けなさいと言ひながら、僕の切符の裏へレスターとラグビー間を使用しなかつた由、書き入れて呉れた。差金は僅か一志位で、拂戻しを求める程のこともないが、驛員の好意は謝せざるを得ぬ。

雨の田舍道

五時二十一分にハンチンドンを立つた。見送りに來た瀬山君のモーニングコートが、何時迄もプラットフォームに見える。夫が軌道の曲り角で消え失せたのを見屆けて、初めて座に着くと、八人詰の狹い車室に、お客は三十恰好の書生風の人と僕と唯二人。勝手の知れぬ土地に、然も之からレミントン迄行くに、二度も三度も乘替へなければならぬ

雨の田舍道

といふので、此の末如何に成り行くことやらと、非常に心細くなる。一體レミントンはハンチンドンから正西少し南に寄つた所に在るのだが、汽車は先づ北の方のケタリングへ行く、夫から更に一層西北に上つてレスターへ出て、今度はレスターから南の方ラグビーに戻り、夫れから更に南に後戻りをするのである。丸で矢を十分に矯めて置いて、一度に切つて放つやうな仕組だ。一つ乘替損ねたら、何んな處へ迷つて行くか知れたものぢやない。――雨が又ぽつ〳〵とやつて來た。

見る限りの靑野原に、時々小さな蕪菁が二つ三つ見える。物淋しい英吉利の田舍道を、此の短區間列車はのそり〳〵と歩を運んで、停車場毎に休んで行く。乘替驛が何番目の停車場だか皆目分らぬので、停車する毎に氣が氣でない。夫れに當地の停車場では、驛名を飛んでもない所へ書いておくので、一々頭を窓から突出して驛夫に聞かなければならぬ。其奴が運よく言葉の分り易い男だといゝが、妙な田舍訛りでやられると、二度も

三度も聞き直さぬと分らぬ。實に油斷も隙もあつたものでない。隣の男が大きな欠伸をして『のろ臭い！』と舌打と共に獨言を言つたのを機會に、ケタリングはまだかと聞けば、之から三つ目とやら敎へて呉れた。

一つ二つ三つ、果してケタリングへ着いた。車を飛び出したのは宜かつたが、何處で乘り替へるか分らぬ。驛夫に聞くと、諄々と說明して呉れた揚句、僕が一向合點せぬらしいのを見て取つて、自身で列車迄案內して呉れた。今度の列車には娘が二人に五十位の男が一人で、大分賑かだ。其處へ裾から脊中へかけ、頭まで飛沫を上げた男が飛込んで來た。一同之に眼を注いで、孰も其の泥は何したのだと、心安げに尋ねると、男は、いや斯な汚い風で誠に濟みませんが、實は……を何やらしてと、其の泥まみれになつた由來を得意氣に話して居る。此の男車の中では四方へ氣兼して小さくなつて居た上、次の驛では、丁寧に一同に挨拶した上で車を出た。

雨の田舍道

レスターに着くと、當にした時間にラグビー經由の汽車は今日出ないといふ。是れ大變也。僕は大にまごついた。停車場の中を驅け廻つて、彼地で聞き此地で尋ねて、漸くナニートンを經てレミントンへ出る列車のあるのを見つけて、初めて胸を撫で下したのである。ラグビー經由とは違つて、此奴はレスターから西南に下つて、一旦は肝腎のレミントンより西に在るナニートンに出で、此處で乘り替へて、更にコベントリーを通つて東南に逆戻りをするので、丁度稻妻なりにへこ〳〵と折れた樣な廻り道だ。併し先づ乘つてさへ居れば、何時か先方へ着くことにはなつた。幸ひ乘合は田舍の人の心安さに、何時しか親しく樣々のことを談し交す中となつて、十時過無事レミントンに着いた時、停車場に來てゐる筈の迎が誰も來てゐないので、一寸まごついてゐると、僕と同じ車にゐた若い男が通り掛つて、失敬だが道が分らぬなら案内しやうとて、態々デビス老人の宅迄送つてくれる人さへ出來た。厚く其の好意を謝して、其の後に尾いて、目ざす家迄着

いたが、女中が出て來て、主人は僕の電報を見てから、時間表を調べると、ラグビーからそんな時間に來る汽車は見當らぬので、不案内の土地でまごついては氣の毒だと言つて、態々ラグビー迄迎へに出かけたとのことであつた。成程、此處の主人のやりさうなことだ。翌朝になつて聞くと、ラグビーでは晩餐の用意迄して夜の十二時迄待つて居て呉れたのださうな。

老人は不在だが、老夫人はいそ〳〵と僕を迎へて、何うせ歸りは遲くなるから、夫れに構はず寢て呉れといふので、夫人が急料理のトーストをお茶で流し込んで、其の儘例の二階の臥床に入つた。隣の居酒屋ではまだ騒いでゐる。やれ〳〵眠たい。

村の日曜日

翌六月十六日の朝は、昨日の疲れに寢過して、九時頃食堂へ下りると、老人夫婦は新

村の日曜日

聞を見ながら、僕を待つて居た。『昨日ラグビー經由と言ふ電報であつたが、時間表を見ると、そんな汽車は見當らぬ。若し間違つては大變と思つて、早速出かけたが、幾何待つても來ない。停車場でちやんと二人分の晩餐を用意させて、三回列車を待つたが、三度とも影が見えぬので、到頭十二時過に悄然と引上げて來た。所で歸つて見ると、先刻來てもう寢て居るといふので、大に安心しました』と、老人は相變らずお世辭が宜い。老人を夜深迄待せて、自分だけ寢たのは罪なやうな氣もする。

珍らしく空がからりと晴れて、裏のポプラーの樹に夏の初の日影長閑にさして居る。今日は又しても例の日曜日で、近い邊の敎會では、絶間もなく鐘が鳴る。『坊主が儲け居る哩』と、老人がうつかり口を滑らして、又お婆さんに叱られた。

ふらりと老人と一所に外へ出る。さしも賑かなビクトリア通も、今日は戸々盡く戸を鎖して、人影とては、唯敎會に通ふ善男善女が彼地此地聖書片手に往き交ふのと、後生

氣のなさゝうな若い男女が、遠乘にでも出掛けるか、自轉車を列ねて走り行くがある。並木の美しいアベニューを通り過ぎて、彼れ此れ一哩、レミントンの町々が殆ど盡きかけた所迄出た。此の邊は兩側に低い生垣を廻らして、垣の中は家も何もない例の英吉利流の、牧場だか草原だかゞ廣々と打續く。此處に年古りた樫の大木の、參天の枝を廣げたのが、道の中央に立つて居て、周圍には玉垣を結つてある。此の樫の樹を、此の邊では『英蘭の中心』と唱へて居る。何から割出したものか、此處が英蘭の中心といふことに成つて居ると、老人が笑つた。此の樹の側に造りつけた共同椅子へ腰を下して、老人は盛に日本と加奈陀の聯合工業發展策を論ずる。金は自分が出すから僕に一つやれといふ。僕は生を一管の筆に託して江湖に放浪する者で、迚もそんな小面倒なことのやれる者でないと言ふと、『夫では君の子供が學校へ行く樣になつたら、英國へ寄越し玉へ。私が敎育してやる。』といふ。加奈陀開發策が妙な所へぐれて、樫の木の下の談判は僕の子供に

村の日曜日

及んだ。夫にしても、七十近い老人が僕の子供を敎育して、夫から何かやり出さうとは氣の長いのにも驚くが、元氣の宜いのにも驚く。

家に歸れば、親類の子だといふ五歲になる可愛らしい男の兒が遊びに來て居る。水兵服を着て居るが、女の樣な顏で、前髮はちり〳〵と縮らせて、小さな櫛をさしてある。リーダーで讀んだカールといふは、唯「縮れ毛」と許り解して居たが、斯な念の入つたことをするものかとは、此の時初めて知つた。人見知りをしない、人なつこい、歐羅巴の子供のことゝて、突然僕の膝の上に飛び上つて、おめず臆せず、いろ〳〵のことを廻らぬ舌で語り出す。君は何幾といへば五歲。名はと問へばにゝと笑つて、重々しい口調で『ヤング、ソルジャー！』

午餐は一所にと、此の少兵士は言ふ。子供は下でケート（召使ひの名）と一所に喫りと、老夫人が言ふ。柔順に下に行つて仕舞つた。晝飯の後、少し部屋で休んで居ると、又やつて來て、お客が來たから出て來いと云ふ。客室に行つて見ると、タイラー君、バリッシュ君、バリッシュの細君などいふ若いお客が尋ねて來て居る。之に一々紹介せられて、談が段々賑やかになつた。お茶の時刻になつて、一同して裏の芝生でローン、ボールをやる。眼の近い老人は妙な所へ見當をつけるので、少兵士がきやッきやと騷ぐ。

晩餐は主客合せて六人。日曜日だから何もないがとの斷りで、ロースト、ラムの大きな肉を眞中にして始めた。食後は老夫人がピアノを彈く、老人が歌ふ、バリッシュの細君が細い聲で歌ふ。今度は細君が彈くから、僕に『君が代』を歌へといふ。僕だつて『君が代』位は歌へる。ピアノの側に立つて、分りもせぬ譜を片手に持つて、眞面目にやつて仕舞ふと、皆々お葬式の歌みたいだといふ。勿體ないことを言ふものでない。

其の内お客は少兵士を先頭にして、追々歸つて仕舞ふ。間もなく蓄識の技師ジョー

分れの接吻

ンス君から使が來て、チャンドラー君も來て居るから、玉突に來いと言つて來た。玉を突いて、ボーカーをやつて、夫からウォスキーを酌む約束なのである。

巴里、倫敦で日曜日ほど詰らぬものはないと思つた僕も、成程斯な具合に暮して見ると面白いと思つた。

分れの接吻

今日はコベントリーのラッヂウォース自動車製造會社の案内で、自動車の遠乘をする約束になつてゐる。九時五分に汽車が出るので、夫迄に一寸髭を剃つて來るとて、老人は朝飯が濟むなり出かけたきり、頓と歸つて來ない。時は段々迫る、老人は一向見えず、僕も、老夫人も、女中のケートも、氣を揉んで頻に評定をするが、埒が明かぬ。愈發車時間十五分程前になつた。僕は堪り兼ねて、斬髪屋は何處だと聞くと、つい小半丁の

南だといふので、早速出かけて見る。何處の村にも能くある間口一間半許りの小さな店で、外面に例の飴棒の看板が出てある。戸を開けると、早くも正面の鏡に映つた僕の姿を見て、老人が聲を上げた。『お待せ申して相すまぬが今直濟む』といふ。見れば此の家の主人らしいのと下剃とが、今しも二人のお客の髭を剃つて居る所で、外に今一人腰を掛けて、馬方の樣な顎だらけな顔をした男が待つて居る。主人も下剃も三人の客も頻に何か談し合つて居る所、とんと日本の小田原邊の髮結床と言つた樣な體だ。組合員の智識を增進し、品行を方正ならしめんが爲に、「美髮會」を組織し、月刊雜誌「美髮」を發行す、などいふ底のえらいものでは無論ない。思按ずるに、老人は此處で例の加奈陀開發策か何かをやり出して、四人を相手に一席辯じたに相違ない。屹度夫れで遲くなつたのだ。

『タイム？』老人は耳の邊に石鹸の泡の殘つた顔を振り向けていふ。『タイム！』僕は戸口を入らうか、何うしやうかと、中腰になつて答へた。もう十分しかない。下剃は今

分れの接吻

しも濟んだ一人の男の頭を兩手で洗ひながら、凝と僕の顔を見て居る。入るなら入る、出るなら出る、中腰で居て呉れては、寒い風が入つて困るといふやうな顔だ。僕は滿更夫を知らぬでもないが、入れば遲くなる、出て居ては寒い、此を以ての故に即ち中腰であるといふやうな顔をする。

其の中老人は顔も洗はずに出て來た。外は風が寒い。老人は剃立の頬を擦りながら、ほう〳〵言つて居る。老人は背が高いので歩が早い。駈出すやうに急いで、頓て宅の前迄戻ると、細君が氣になつたものと見えて、戸口に待つて居た。老人は一寸と言つて飛込むから、何か忘れ物でもしたかなと思つて見て居ると、いやらしい哉、此の老夫婦は戸口で僕に尻を向けたまゝ、抱つき合つて、ちゆう〳〵と接吻をするのだ。ペッ！ペッ！汚ならしい。接吻が一ゲーム終つてから、流石の老人もちと氣がさしたか、僕の方を向いて、『アン、イングリシユ、カストム。カーント、ヘルプ』（習慣だから仕方がない）と

笑つた。沙翁のオセロの中に、オセロが其の女房のデスデモナを殺さうとする最後の幕の中に、斯ういふことがある。オセロが劍を拔いて女の寢て居る傍へ行つたは宜いが、接吻しては顔を眺め、又しては又眺め、今一度〳〵とやつてゐる中に、到頭女が眼を覺して仕舞つた。僕は此處を讀む毎に、其のでれ〳〵と思ひ切りの惡い所が、齒痒くて堪らぬ。所で、夫が今、汽車の間に合ふか合はぬか寸刻を爭ふ時になつて、悠々として之だ。之で汽車に後れたら何すると、僕は恨めしくなつた。

時を剩すこと僅に三分ばかり。後れては大變と、二人で停車場迄驅け出した。老人が南阿弗利加仕込の駈足恐ろしく疾い。停車場の坂道を喘ぎ〳〵走り上つて、漸とプラットフォームに入ると、時計は今しも九時七分、正に二分後れた。『シー？』（ほら）僕は忌忌しさに呟いた。所が僕の言葉の終らぬ中に、汽車がが〳〵と着いた。汽車が幸ひと二分ほど遲れたのである。老人は滿面に笑を湛へて、兩手をばッと開きながら、鸚鵡返

しに『シー！』（それ！）

自動車行樂

コベントリーよりケニルウォース

コベントリーのラッヂウチース自動車製造會社の案内に依つて、僕とデビス老人と會社の役員ソンダース君と、三人迚自動車で、今しもバーミンガムに着いた。

先づ同社の工場を一覽する。今丁度昼休みといふので、工場長自身が案内して、自轉車の小道具を製造する自動機械場を見せて呉れた。廣い工場に、器械が彼此二百臺も列んで居て、人一人居ない。工場長が、二つ三つ器機の脇にある槓杆を動かすと、幾十臺の機械が一時に運轉を初める。番人が一人も居なくて、どんなものが出來上るかと見て居ると、自動機械の作用で、丸い鐵棒が順々に器械に喰はれて行つて、程よい加減に切

れて取れる。取れた奴がくる〳〵と舞ふかと見る中に、中が轆れて輪になる。其奴が又機械に喰はれて、暫く姿を見せぬと思つて居ると、今度はばたりと下に落ちる。見れば輪の内側に牝螺線が出來て、外側にはぎだ〳〵が一杯についてある。其の途中に、油が自然に流れ出る。削られた鐵屑が自然に薬てられる。一つ出來上ると、丸い鐵棒が又に、ゆうと喰はれに來る。斯くの如くにして、人一人の力を借らずして、釘が出來、スクルーが出來、輪が出來、自轉車につくべき一切のこざ〳〵した小道具が、皆獨り手に出來るのである。成程、斯う人間が不用になつては、貧乏人も出來る筈だ。僕はつく〳〵不快を感じて、此處を出た。

停車場脇のホテルで、會社から午餐の御馳走になり、老チェンバレンが死にかゝつて居るから見舞に行かうと、例の關税政策の熱心家デビス老人が言ふので、又自動車をチ氏の宅へ飛ばして、名刺を門番に殘しおき、夫から一度コベントリーに歸つた後、今度

はケルニウォース迄、自動車を走らせた。

コペントリーからケニルウォース迄は、先づ坦々たる大道髪の如く連なり、之を挾んで鬱怨たるポプラーの大樹が、目の屆く限り立つて居る。行き盡すと一長坂の頂に出る。彼方を見やれば、道はだら〳〵と下りに下つて、其の底から又だら〳〵と上りに上る。丁度彼方の坂の頂が、此方と同じ程の高さなので、其の間の三四哩が程は、下る時は先細になり、上る時は先太になつて見える。ちとむづかしい形容だが、長い〳〵二等邊三角形の白紙の片を頂點で合せて、ぺッたり青い紙の上に張りつけたやうな。之へ自動車が唸り聲を立てゝ、全速力で走り下り走り上る快は、迚も、スナップを嗅いで嚔をすると同日の談でない。古い噺だが、さる所で、さる時、英國中で最も散歩に面白い道を投票したことがある。投票を開いて見たら、投票者の半分は、コペントリーからケニルウォースと書いてあつた。而して後の半分は、ケニルウォースからコペントリーと書いてあつたといふ。之ほどに知られた道である。

ケニルウォースに着いて、ソンダース君と分れて、又ケニルウォース城の廢墟を見に行つた。之で此處へ來るのが二度目で、僕は英吉利中で、之ほど面白い所はないと思つて居る。崩れかゝつた城壁、蔦生ひ重なつた石柱、青芝の上に白を點ずる羊、昔は湖であつたといふ廓外の野、レスター卿の寵姫が身を投げたといふ木橋、城門の跡、土牢の跡、見るとして、昔を偲ばせぬはない。若し夫れ、其の昔大饗宴場であつたといふ、今は礎ばかりを存した廣庭に出て、エリサベス女王を主賓に、幾百のロードやレディーが、綺羅星の如く居流れた當年の盛況を想ひやると、今も尙、髣髴として、扇影の裟娑たると、劍光の燦爛たるとに接する思がする。

僕が斯んな事を考へて居る間も、デ君は滔々と、關稅政策を論じ、自由主義の悲を罵り、はては一轉して、日米の關係に及び、日本が亞米利加と戰爭するなら、今の中に限

自動車行樂

る、パナマが開通して、大西洋の船が自由に回航するやうになつたら、もう取り返しがつかぬなどと、まくし立てる。

兎角してレミントンに歸つたは、夕の六時少し過ぎ。老人も今日は大分疲れたらしい。

公園の音樂會

今晩ジエフスン公園に音樂會がある。老人を誘つて見たら、少し込み入つた書き物があつて行けぬといふので、態々僕をチャンドラー君の宅へ送り屆けて、チャ君を誘つて呉れた。分れる時戸口の鍵を僕に渡して、いくら遲く歸つても構はぬが、廊下の瓦斯は細くしておくと、老人だけに、中々細かい注意をして行つた。

チャ君の細君も一所に行くことになつた。近所にレー嬢とて獨暮しの金持の婦人が居る。之を誘ひ合せると、丁度家の前の大きな樅の樹の下で、芝生に長椅子を横へて、小

説だか詩集だかを讀んで居た。年の頃は四十四五でもあらうか、獨暮しの金持で、大きな地所に、花園やら溫室やらを仕つらへて、花いぢり小説いぢりなどは如何にも暢氣らしい。獨身の女の多い英吉利のことて、誰も怪しむ者はないが、日本なら慥に問題になる所だ。レー嬢が差支へあつて行けぬといふので、僕等は其の庭をくる〳〵と廻つた後、公園へ出た。

公園では一片づゝの入場料を取る。まだ暮れ切らぬ夏の夕の涼しさに、ぞろ〳〵と大勢の男女が聞きに入る。音樂堂は日比谷のと違つて、四角な一方口の舞臺風に出來て、聽衆の席は前に向いた所に限つて居る。此處には埒を結つて、其の中の椅子一脚二片かに其處等で貸すことになつて居るが、僕等の行つた時は、もう之が一杯に詰つて、殆ど空席がない。餘儀なく僕等は埒の外の人込の中に立つて聞いて居た。此の邊からテニス、コートの方へかけて、村の若い男女が幾組幾十組手を組み合つて歩いて居るが、田舎だ

けに、ピカデリー邊で見るやうな魔性の奴の、べと〳〵と塗りこくッたのが見えぬので、何だか見心地が宜い。メーの樹の立ち列んだ邊をふらり〳〵とやつて行く影が、次第に夕闇に消えて、男の麥稈の帽子と女の白い衣物だけが、ほの白く見える。片方では又埒の外だけに、埒もないことを言つては笑ひ興ずる男女が、彼地にも此地にもある。一寸ゴールドスミッスの「寒村行」の初めの方の何が思出されるやうな光景、――と氣取つて言へば、先言へる所である。

樂堂の上には電燈眩ゆく輝いて、立ち代り入れ代り、歌ふもあれば踊るもある。此等は多く旅稼の逸人であるが、之を村で雇入れて、村人の慰みに演奏させるのだと、チャ君がいふ。日比谷の演奏は結構に相違ないが、此處のは美しい女も出れば、道化た男も出る、可笑しい身振もあれば、花やかな合唱もあつて、變化があるだけに面白くもあり、愛嬌を命とする商賣人だけに、聞いて居て肩が凝らぬ。音樂會といつても、聲樂が主で、

夫れに耳と共に目をも悅ばせる仕組になつて居るので、一寸寄席じみた所がある。耳に賣の入るやうな恐しい高いソプラノの獨唱があるかと思へば、能くあれで聲がかすれぬと思ふやうなベースの男が、足拍子面白く歌ふ。一寸日本では聞けぬ所だ。殊に僕の好きなのは、其の道で何とか名があるだらうが、節の變化の極めて速い、急調の陽氣な流行歌の合唱で、僕は日本にも斯んなのがあれば宜いと、いつも思ふのである。日本でこんな種類をと云へば先づ「がんにん坊主」とか何とかいふ奴位のものだが、幾ら自然主義の世の中でも、彼奴を高座で合唱する勇氣のある奴は恐らくあるまい。斯ういふ元氣な節を聽きつけて居るから、僕に「君が代」を歌はせて、お葬式の歌みたいだなどゝ言ふのである。日本に居てこそ、耳馴れて夫程にないが、如何にも之に比べると、伊太利や佛蘭西の國歌は、陽氣で面白いに違ひない。

演奏果てゝ後、チャ君と二人で近所のホテルで玉をついた。此處の玉臺にはポケット

に入つた玉が、其の底から出て、樋のやうな所を傳つて、くる〳〵と突手の側迄轉がつて來る仕組になつて居る。文明といふは無性なものだと思つた。玉をついて居る中、ホテルの主人が出て來て、一所にバーでウキスキーの杯を擧げる。又しても日英同盟の祝杯とある。

兎角して老人の宅に歸つたのは、十二時近く。成程瓦斯は細くしてあつた。

オックスフォード

其の翌十六日の朝デビス老人夫婦に暇を告げて、レミントンを出た僕は、倫敦への歸り途、オックスフォードで一先づ汽車を下りた。前日「時事」の小山君の紹介で賴んでおいた永井柳太郎君は、案内の爲として、態々停車場迄出て呉れて居る。初對面ではあるが、其處は日本人と日本人、車の窓とプラットフォームから互に顔を見合せて、やッと言つたら、もう十年の知己同樣、其の儘打連れ立つて、オックスフォード大學の見物にと出かけた。

僕は此處を世界に名たゝる教育の淵源と見て尋ねたのではない。宗教改革のどさくさ跡を弔ふ爲に來たのでもない。さりとて又內亂當時英國政治の中心としてやかましかつた、歷史を調べるといふ譯では尙更ない。僕が一個の私事に及んで甚だ相すまぬが、僕は今から十餘年前、不圖した事から運よく或筋の奬學資金を受けて、此處のマンチエスター、コレヂへ留學する筈であつたのを、不圖した所から止められて、來損つたことがある。其の以來、此の地は何とやら、なつかしい一種の故鄕の樣な氣がする。誰にもあることだらうが、自分が少くも三四年は來り住すべかりし筈の所へ、偶然來て見て、若し彼の時來て居たらば、彼もあり斯うも有つたらうと考へるのは、頗る異樣の感がするものだ。僕は此の異樣の感がして見たさにやつて來た。所が、其のマンチエスター、コレヂ

オックスフチード

へは、永井といふ早稲田大學の卒業生が、僕と同じ筋の奬學資金で來て居る。

一寸斷つておくが、オックスフチード大學と言つたとて、日本の帝國大學の樣に組織的の分科で出來た學校があるのでない。獨立した十九のコレヂがあつて、之を統一する一種の行政機關があるだけのもので、言はゞ此のコレヂの全體を總稱して大學とは言ふのである。尤も大學とは「組合」の義と、字引を引けば書いてある。但此の組合は頗るやかましい組合で、或點迄は、當地方に於ける警察權を持つても居れば、議會へも二人の議員を選出し得ることになつて居る。

此の十九許りのコレヂには、夫々敎授もあり、學生もあり、校舍もあり、財產もある。十九各が勝手に經營して居るので、學校に依つて夫々特色がある。或者は其の歷史を誇る、或者は其の建築を誇る、其の備附の圖書の優れたのもあれば、其の庭園池沼の秀でたのもある。甲には金が有る、乙には人才が多い、一方でガラリーを誇るもあれば、片

方では、其のチャペルを以て名を高うしてゐる。僕等はクライスト、チョーチ、コレヂから、順々に名ある學校や敎會を見て廻つた。何處を歩いて見ても、英吉利でヘンリー八世の跡といへば、大抵碌なことはないに定つてるが、此のオックスフチードだけには、王に取つてやゝ有利な傳說が少しある。兎角して僕等はテームスの上流で、此の邊ではテームと唱ふるアイシス河の畔へ出た。青葉若葉の間から、マグダレン、コレヂの高塔が空高く聳えて、如何にも氣が暢々する。マグダレンは、建築も立派だが、其の北には、小川に沿うて鬱葱たる森の下道うね〳〵と曲つた有名な「鹿の園」がある。此の森はアヂソンなんどの名ある文豪が、日夕逍遙して想を練つた所だといふ。

市街に出ると、オックスフチード、バヂャント（有名な假裝行列）の近づいた折とて、鮮麗な色の衣をつけた男女に屢行き會ふ。馬鹿なことをすると、永井君が笑ふ。黑いガウンを着て、四角な帽子を被つた、大學の學生や卒業生が到る處に見える。赤裏の黑地

の衣はエム、エー。白革の裏がビー、エーと、永井君は一々説明して呉れる。

兎も角も時分だからといふので、マンチェスター、コレヂは後にして、僕等は兎ある料理屋に入つた。

食事中話が大學生の惡戯に及んだ。是は僕も豫て聞き及んで居る。新入生の目を縛つて置いて、濕手拭で叩いて、首を斬る眞似をした所が、生憎と神經作用で其の男が死んで仕舞つたので、大騒動が持上つたとの話もある。學生が何かのお祭騒ぎに景氣を附ける爲とて、ボンファヤを焚く時などは、市中にある店の看板でも表札でも、手當り次第に持つて行つて燒いて仕舞ふとの話もある。尤も後には几帳面に其の代金を辨償するさうなが、兎に角西洋の人は日本人よりも、惡く巫山戯るのが好きらしい。

『惡戯も無邪氣な奴は我慢もなるが、此處等のは意地の惡い惡戯をして困る』と永井君は語り出した。其の話になると、何でも永井君の初めて寄宿舍へ入つた晩などは、先づ

人の寢靜まる頃を見計つて、廊下をがたゝと踏み鳴して歩く。高聲に何やら歌ひ出す。何が可笑しくてか、一同がどッと笑ふ。眠られるものでも何でもない。而して翌朝食事に出ると、前晩騒いだ奴等が白々しく、昨夜は能く寢られましたかなどゝ尋ねるのださうだ。其位は先づ惡戯の手ほどきで、夫から追々にやり募ると、電燈を消して、人の部屋を暗がりにする、廊下で人の惡口を讀み込んだ歌を高々と歌ふ。用もないに部屋の戸を叩く。不在の間に人の寢道具を引摺つて行く。毎日毎晩手をかへ品をかへて、何か知ら人の厭がるやうなことをしないことはない。所で、之が永い間の習慣だとかで、惡戯をされた者はされ損になつて、誰も野暮らしく舍監に訴へて出もせねば、訴へた所で、舍監も如何ともすることは出來ぬ。

『中にも僕の小癖に觸つたのは、食事の最中に全校の學生が、(と言つても、此處には十五六人しかないが)寄つて集つて、日本に日が照るかとか、雨が縦に降るかとか、尋ね

オツクスフチード

るのです。而して僕の答への模樣に依つて、樣々の日本の惡口を叩いて、一同して大笑ひをする。何千里と隔てた外國へ來て、見ず知らずの他人の中で、斯んな目に遭ふのは何う考へ直しても、心持の宜いものでない。僕も腹立紛れに、日本にはそんな馬鹿なことを尋ねる奴は一人も居らぬと、遣り返してやつたことがある。』と永井君は言ふ。

斯んな調子で、今迄日本人は大概中途で下宿して仕舞つたさうな。永井君は何でも一つ踏み止まつて見やうと思つたが、何しろ武骨な人である上に、右の樣な無愛想をやるので、段々互に不快の感を增す許り、頓と親しくならない。所が或る冬の夜、仕事を終つて丁度部屋に寢て居ると、變にぶちや〳〵と水音が窓の方に聞える。能く見ると、二階のタンクから此の部屋へ水を投げる奴があつて、床の上はもう水だらけになつて居る。永井君も此の時こそは腹に据ゑ兼ねた。早速起き上つて、潛と三階に出かけると、果して、暗中に二人の男がせッせと、バケツで水を汲み出して、窓の方へ投げて居る。己れ畜生

何するか見やがれと、一寸柔道の心得があるのを幸ひ、突然今しも水を片手に持つた男の襟頭を掴んで、ずでんどうと許り見事に投げ附けた。所が運よく之が暖爐の脇へ倒れて、持つて居た水が火の中へざんぶりかゝつたので、非常な音がして、ぱッと灰神樂が上つた。之を見て今一人の男は手巾を振つて、頻に休戰を求める。舍監が物音を聞きつけて飛んで來る。自餘の學生も何事かと思つてやつて來る。忽ち學校中の大騷ぎとなつた。其の時でも舍監は永年の習慣を言ひ立てゝ、動もすれば永井君が人の惡戲を眞に受け過ぎたのを責めやうとするので、先生大に怒つて散々小言を食はせた。此の時以來、初めて君に對する惡戲はぱッたりと止んで仕舞つたといふ。『今では雙方表面だけ親しくなつてゐるが、腹の中では何と思つて居るか知れたものぢやない』と、永井君は又笑つた。僕が來て居ても、水責位に遭はされたに違ひない。

二人でマンチェスター、コレヂに出かけた。校舍を見て後、寄宿舍の方へ行くと、入

オツクスフオード

口の小庭で、四五人クリケットを行つて居たが、永井君を見て一同會釋した。其の中の赤ちやけた上着を着たのを、永井君は指さして、『彼だ、僕の投げたのは、』と言ふ。此處を過ぎて、永井君の部屋に入れば、水を掛けられたのは此の窓、暗中の搭闘は彼處の二階と、一々説明して呉れた。僕には豫期した「異樣の感」も格別起らず、やゝ暫く此處で談した後、又永井君に送られて、公園を廻つて、停車場へ歸つた。

暫くて午後五時四十五分發の急行で、倫敦に歸つたのが、次のレミントンの終りである。――父が斯なに何の氣もつかず遊び歩いてゐる中に、長女は愈大學病院で、到底助からぬものと認められて仕舞つた。

大名屋敷

サットン、プレース

午前九時半、ベチー遲しく來りて、自動車來り待てりと告ぐ。すはとて立ち出づれば、美々しき一輛の自動車、今しもわが宿の前に止まり、削々の聲甚だ忙はし、マッケンジー君車上に在り。莞爾やかに僕を迎へて、急ぎ乘り移らるべしといふ。

今日は「メール」の社主ノースクリッフ卿の招に依りて、之をそがギルドフォードの別墅に訪ふべき日なり。僕初め以爲へらく、苟も貴族を訪ひて、午餐を共にすといはんに、日本ならば、必ず羽織袴とあるべき所なり。服裝のやかましき英國のことなれば、必ずフロックコートにシルクハットは免れざるべしと。出でゝ君を見るに、彼は春廣に鳥

サットン、プレース

打帽を戴けり。僕は如何にすべきと問へば、彼れ大に笑つて、オペラにでも出かけんず
る時ならばこそあれ、自動車に乘つて田舍の下屋敷に人を訪はんに、貴族なればとて、
脊廣鳥打帽にして何かは苦しかるべきといふ。僕乃ち、之にて、又一つ賢くなつて、
言はるゝ儘に脊廣鳥打帽にして車に乘る。とてものことに、浴衣がけ兵兒帶ならましか
ばと、打つぶやけば、マ君又笑ふ。

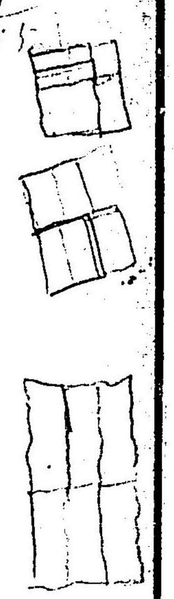
車、西に向つて走ること疾風の如し。途にて、リツル君といふが亦わが車に入り來る。
リツルといふと雖も、大兵肥滿の人にして、其の聲破鐘の如し。彼れマ君と僕との間に
坐し、身を動かす毎に、僕等の壓潰されんとするもの屢なり。彼が其のぶく〳〵と膨れ
たる身に自動車用の外套を被り、大眼鏡をかけたる樣、左ながら潛水夫の水に溺れたる
に似たり。

程經て初めて市外に出づ。坦々たる大道髮の如く、遠く之れを望めば、自轉車を走ら

す者絲の如く連れり。車走ること益早く、乍ちにして十車を拔き、乍ちにして二十車を
追ひ越す。偶行人の全く絶えたる處に到れば、御者全速力を擧げて之を走らしむるに、
砂塵濛々として雲の如く起り、車、空を斬つて吼ゆること狼に似たり。路の邊の居酒屋
に自轉車を立てかけて憩へる者、皆手を額にして呆れて見送る。

凡そ世に、英吉利の田舍道ばかり車を行るに快きはなし。道は平らかなり、樹は青々
と繁れり、歩む者一人として、道の中央に迷ひ出でゝ車を妨ぐるはなく、車を驅る者は、
往く者わが右を避け、來る者わが左に避く。偶道を横ぎらんとする者あらば、必ず先
づ手を擧げて、後なる車に其の由を報ず。人皆其の則とるべき所に則とりて、整然とし
て一絲亂れず。

英吉利の田舍に田畠といふもの殆どなし。見渡す限り、唯草又は丈低き灌木の生ひ茂
るに任せたり。偶馬を放ち羊を牧へるはあれども、之とても極めて少し。此に於て、



サットン、プレース

草と木とは生ひ〳〵て、到る處に紅黄白紫の花を開き、夏尚淺き六月の初頃より、秋の初にかけて、野は左ながらの錦を織り成すなり。如何なればか、斯くは野を草木の茂るに任せて、田畠を作らざると聞けば、自由貿易の國柄として、價低き海外の米穀盛に入り來れば、勞銀高き英吉利の農夫に作らせんこと勘定に合はざるなりといふ。寸地も耕さざるなき我邦などより來て見れば、何とやらん異樣に感ぜらる。

英國の自由主義たると保護政策たるとに委細かまはず、車はひた走りに走りて、畫少し前サットシ、プレースに着きぬ。サットン、プレースはノースクリッフ卿が家の名なり。門を入りて後、見る目遙に、バタカップの一面の咲き亂れたる間を縫うて走る。森を過ぎ、小川を越え、右に曲り、左に外れて、彼此三四町も來つらんと思ふ頃、初めて古風なる赤煉瓦の巨屋が、青葉の間に隱見するを見る。マ君指さし示して曰ふ、是れ即ち其の家と。

サットン、プレース

やがて、車ひた〳〵と其の家の前に近づけば、内より儼めしき金釦の制服着たる家の子三四人、急ぎ駈け寄りて車の戸を開く。リッル君先づ下る。下らんとする途端に、洋袴の裾少し上りて、緑色のはでやかなる靴足袋、さと顯はれぬ。突如として、後より、『何等奇怪の靴足袋ぞや』と笑ふ者あり。ふり顧みれば、主人の男爵が此處まで出迎へ呉れたるなりき。僕次いで下り、マ君亦下る。主客互に手を握つて、先づ玄關脇なる客室に入れば、此處に加奈陀の自由黨議員といふが、三四名シガーを薫らして語り居たり。乃ち一々之に紹介せられて、僕も亦シガーの人となる。

主人に導かれて、後園に出づ。園廣きこと幾萬坪なるかを知らず。其の中大凡八九反を芝生とし、其の彼方を花園とし、夫より先は唯一面の草原なり。芝生に下り立たんとして、此處にて男爵夫人に會し、之に紹介せらる。夫人は三十左右の美人なり。隔てなく打語る。一同して、夫人が丹誠に成れる花園を觀んとて、芝生を過りて之に向ふ。芝

生より崖に沿ひて、下の方小川の岸邊に至る迄、百花繽亂行くとして花ならぬはなし。中に海棠の咲き亂れたるあり。故郷を懐ひ出でゝ、いとなつかし。花と花との間小徑縱横し、處々小亭を安ず。小亭といふとも、我邦の打開けたるとは異なりて、英吉利のいはゆる、サマー、ハウスは、煉瓦の壁に小さき硝子窓を仕つらへたる、見るからに熱くるし。

芝生に出でゝ、ブームランを弄ぶ。ブームランとは、薄く削ぎたる三日月形の木なり。こを投げ上ぐるに、其の投げ方に呼吸ありて、くる〳〵と風を切つて空高く舞上るよと見る間に、何時しか又元の空を舞ひ戻り來る。初めは濠洲某地の土人が用ひし武器なりしを、今は斯く英吉利に弄ばるゝに至りしなりとぞ。但し日本の庭にては、之を弄ばんこと難し。總じて我邦の庭は、座敷の眞中に寢轉んで居て眺望すべきやうに出來たり。下り立ちて運動などせんと思も依らず。今後の日本が尙斯の如き茶人式のみを求むべき

や否や、甚だ疑ふべしとなす。

主人の男爵ブームランを投ぐること、甚だ巧なり。些の力を用ひずして、之を投ぐるに、飄々乎として、舞ひ上り舞ひ戻り來ること、左ながら飛鳥の、命に從つて往來するが如し。マ君之を學びて成らず。リッル君之を試むれば、僅に飛んで十歩の内に落つ。其の度毎に、皆哄然として笑ふ。夫人は、其の樣が可笑しとて、屢之をリ君に勸む。勸めらるゝ毎に、リ君輙く諾して輙く敗る。男爵問ふ。斯る折に日本語にて何と言ふべきかと。僕答へて曰ふ、妙と。其の以來リ君の失敗する毎に、男爵手を拍つて妙々と呼ぶ。

午後一時家に入りて、午餐の席に就く。主客合せて十人。卿の弟、前日自動車より落ちて肋骨を挫きたりとて、椅子車に乘りたる儘、卓子に向ふ。男爵夫人其の隣に坐して、手づから一々飲食を侑む。友愛の情掬すべし。食事中リッル君のブームラン、屢話頭に上る。食事終りて後、リ君の靴足袋又話頭に上る。リ君笑ふこと亦破鐘の如し。

サットン、プレース

食後家を見る。家は一千五百八十一年ヘンリー八世の臣サー、リチャード、ウェストンの建つる所。今に至りて三百二十餘年を經たり。昔はエリザベス女王、屢行幸せられたることありといふ。樓上樓下を見回るに、彈線なき鐵製の寢臺あり。我邦のと聊か異なる所なき火鉢、さては壁に掛け列ねたる銃槍鹿角の類、昔を偲ばせずといふことなし。見終りて客室に歸れば、加奈陀の一議員、突然、此の家に僧室ありやと問ふ。男爵夫人、暖爐の烟突を覆へる板圍の大きやかなるを指して、恐らく此の中なるべしといふ。僧室とは、其の昔新教の僧の、迫害に遭うて逃げ來れるを隱したる所なり。今一人の議員、此の邊に家附の幽靈やあると問ふ。夫人、之なしと答ふれば、件の議員、余が家には即ち之あり、名を藍色姫といふとて。其の樣を說くこと甚詳か也。蓋し英吉利の舊家には、概ね家附の幽靈といふがあり。名を某々といひ、某々の形して、時々出で來ると傳ふ。語る者元より疑はず、聞く者亦强て怪しまざる者の如し。但し英吉利の幽靈は化け出でゝ其の家を護るといへば、日本の如く「恨めし」からざるに似たり。

四時茶を喫して、愈辭し去らんとすれば、男爵戸口迄送り來りて、自動車用の外套を僕に着せんとす。辭すれども肯かず。强て自ら手を取つて之を着せたる後、更に大眼鏡一個を取つて僕に與ふ。曰く、之で宜し之で宜しと。リツル君を顧みて云ふ、靴足袋は無事なりやと。リツル君、裾を少し捲り上げて之を示せば、男の曰く、之で宜し之で宜しと。車乃ち倫敦に向つて出發す。（五月五日）

ストーンレー、アベ

上

馬車の用意出來たりと聞きて、僕はデビス老人と共に、午餐の卓子より立てり。デビス夫人亦急ぎ立ち上りて、斯く霽れつる上は、妾も御伴仕るべし、日本のムスメとや

ストーンレー、アベ

ストーンレー、アベ

らんのやうに、勉めて柔和しうして、夢にもしやく〳〵り出づるやうのこと致すまじければ、何卒連れて玉はれと、打笑ひつゝ言ふ。さらば用意あるべしとて、三人打連れ立ちて、急ぎ馬車を驅つて、ストーンレー、アベに向ふ。

アベは、レミントンを距る四哩の地に在り。レミントンの領主レー卿の住する所。其の之れをアベと稱するは、中世モンクの隱れ棲める僧菴なりしに由る。今新に希臘式の大厦を、其の側に建てたりと雖も、昔のアベは、尙昔の儘に存せり。デビス老人行く〳〵語りて曰く、前のレー卿の頃は、邸宅園池一切を開放して、一般の縱覽に任せありしが、米國の覬覦客が、兎もすれば、紀念の爲と稱して、花をもぎ壁を傷くること屢なるより、今のレー卿に至りて、全く縱覽をさし止めたり。唯今日のみは、領主の好意を以て、特に遠來の客の爲に開かるゝなりと。亞米利加嫌ひのデ翁、事の次手に米國人のづう〳〵しく不作法にして、紳士の態なきを罵ること甚し。曰く、日本人とは大變な相違と。蓋しデ翁は、日本人を以て、世界一の溫厚篤實なる國民と心得たるなり。

レー卿の屋敷は、レミントンの市外より直に引續きて、四五哩の間に亘れり。馬車初めの門を入りて後、行き〳〵て何時行き盡すべしとも覺えず。森あり、川あり、羊を牧へる廣野あり、横ぎつて人の往來すべき大道あり。其の間三五の門番所を除きて、他に家らしき家といふものあるを見ず。野はバタカップに充ち、道の兩側には紅白の石楠木、今を盛りと咲き香へり。宛として、山路を分け入るに似たり。僕は未だ曾て、斯ばかり廣き屋敷を我邦に見たることなし。試みに、之をデ翁に質せば、昔の領地を其の儘領し居ればなりといひて、更に怪まざるものゝ如し。僕乃ち、日本の舊領主が維新の當時藩籍を奉還し、城池と園囿と擧げて、之を皇上に致せる顚末を語る。デ翁感心すること一方ならず。

兎角する中に、馬車はアベに着きぬ。車を下りて案內を求むれば、マックラカン夫人

ストーンレー、プベ

とて、四十ばかりの人柄よき女出で來る。未だ來意を通ずるに及ばずして、夫人は早くも夫と察して、いざ此方へと請せらる。

先づ新邸より入る。入口に家族の禮拜堂あり。ホールを過ぎて、圖書室あり。其の彼方に應接室二あり。之を過ぎて後、食堂あり。チャールス第一世がクロムウエルの軍に追はれて、來りて隱れ住める室といふが、其の隣に在り。チャールス嫌ひのデ翁、滔々スチュワート諸王を罵る。之を過ぎて、夫人室に入る。窓より臨めば、脚下にアボンの流を見る。アボンは、レー家の庭を貫き流れて、沙翁の生地ストラトフォードに續けるなり。川の彼方には、今しもレー家の召使等、頻にクリケットの勝負を爭へるを見る。

日本式寢室と唱ふるあり。デビス夫人、果して其の日本式なりや否やを問ふ。見れば、支那製の絹をかけ渡し、支那風の畫を壁に掲けたるのみ。支那式といはんには如かず。此處を出でゝ二階に上らんとするに、階段の脇に、頭禿げたる僧の、うすら淋しき顏したるを畫ける額あり。デビス翁、こは誰の像なるかと問ふ。案内の夫人笑つて答へて曰く、是れ家附幽靈の肖像也と。此の家の幽靈は坊主なりとおぼし。坊主にして、幽靈に化けて出るが如きは、能く〳〵悟り損ねたる者なるべし。マ夫人の曰く、法衣の音のさら〳〵といへるを聞きたることはあれど、正の物は未だ見たることなしと。英吉利人の幽靈を信せること、之にても推せらる。

下

デビス夫人、なか〳〵日本のムスメの如くならず。頻に根問ひ葉問ひ、樣々のことを聞き質して、マックラカン夫人を閉口せしむ。デビス翁は、名だゝる近眼なれば、薄暗き廊下に出づる毎に、摺足にて兩手を擴げて歩くこと、茶屋場の由良之助に異ならず。段々ある毎に、先段の數幾つあるかを尋ねて、之を數へつゝ上り又は下る。偶數へ誤る

ストーンレー、プベ

ストーンレー、アベ

時は、最後の一段に途方もなき力足を踏み締めて、床板を踏み鳴らす。靜けき家居の内とて、其の音樓上樓下に響き渡る。其の毎度に、デ翁、此の眼尋常ならましかば、露艦を沈めけんものをとつぶやく。蓋し、翁は日露戰役の當時、露艦の上海に逃げ入りたるを聞きて、自ら上海に下り、小艇を艤して、露艦の碇綱を斷ち、之を港外に引ずり行きて、日本艦隊の手に委せんとの大計畫を立てたる人なり。不幸、出發の前夜、急に眼を患ひて、其の事已みぬといふ。

階下の各室殘らず見了りて後、二階に上れば、兩三のベンチを列べたる教場やうの一室あり。レー家の子弟を教育する所といふ。此處より廊下に出づるに、傍なる棚の上に、鐵製にて蛾劍の面に似たるものあり。其の口に當る所に、舌の如き小さき鐵片ありて、中の方に飛び出でたり。昔女中の餘りに口喧しきものある時は、此の面を被せて、堅く錠を下し、件の鐵片を枚に代へて、其の舌を押へしめたるなりといふ。之より故レー卿

の室に入る。卿が在世の日のまゝにして、杖の置きどころ、パイプの列べ方をさへ改めず。前のレー卿は寛宏にして能く人を憫み、レミントン附近の民、皆神の如く之を敬せりと、デ翁語る。デ翁と舊知の間柄なり。

新邸を見了りて後、舊邸オールド、アベと稱するものに入る。こは千百十五年の建築に係り、年を經ること實に八百九十二年なり。中世の昔、群雄割據、爭鬩是れ事とせる時に當り、屋上に燈火を點じて、敵の襲來を報ずるの用に供したりとぞ。屋内古色を帶びて、如何にも、モンクなんどの住めりけん樣見らる。此處にチャールス第一世が、敵手に落つる前、一夜を明かしたりといふ怪しき鐵製の寢臺一つあり。窓小さく室暗くして、此處に玉しきの臺の中に榮華の夢を貪りたりける人の一夜を明しける樣、思ひやるだにいと憐なり。デビス翁、王が當時用ひたりといふ夜具を、兎見角見て、嘸苦しき夢を見つることなるべしと打笑ふ。翁は大のクロムウェル好なり。僕一日クロムウェルが

ストーンレー、プベ

英國文藝の發達を阻碍したる點を擧げて、之を攻擊せしに、翁躍起となつて辯解頗る勉め、道を歩きながらも之を說き、食卓に就いても之を說き、果は將に臥床に入らんとする時迄、尙之を說いて已まざりき。僕は此の以來、二度とクロムウェルの惡口は言はぬこと丶定めたり。翁が此の夜具に特殊の興味を有すること、誠に故あり。

寢臺の傍に、美はしき女の正裝して、箒を持てるを畫きたる油繪あり。怪しみて、其因緣をマ夫人に問へば、今より幾代前のレー卿の時なりけん、此の家に十七八になれる美はしき小間使ありき。年頃のことゝて、暇だにあらば、人に隱れて脂粉を施し、美服を着飾るを常としたるが、或時用をさしおきて、又もやお化粧に耽り居たる所を、老女に見とめられ、老女は懲しめの爲とて、正裝したるまゝ庭を掃かしめたり。其の折恰も、此の家に出入せる畫家某の、ふと來合せて、此の樣を見て、如何にも可愛ければとて、其の儘に畫きたるが即ち是なりといふ。

其の隣の室に、博物室とて、樣々の古器物標本などを列べたるがあり。ふと古風の鍬の立ちたるが、目に入りたれば、取りて見るに、柄に千五百五十八年求めたる由記しあり。千五百五十八年とは、オリバー、クロムウェルの死せる年なり。

下りて、階下の石室を見る。石壁の床に石の柱立てり。四壁盡く石を覆ひ、入口の外には窓といふものなし。柱と柱とに圍まれて、大きやかなる穴藏樣の室あり。是れ其の昔モンクが潛みて、聖書の英譯に從へる所なりとぞ。嗚呼天下亂れて劍戟の音を絕たず、彼方に烽火の揚がるを見、此方に陣鉦の叩かるゝを聞き、世を擧げて、恟々として其の堵に安ずる能はざりし時、此處穴の如きいぶせきアベの內に隱れて、幾多のモンクの經を誦し、神を禮し居たりけん樣、思ひ出されていとゆかし。

此處にて、マ夫人と分れ、更に園丁に導かれて、アボンの流に沿へる花園を觀る。新綠滴らんとする所、石南花盛に咲き亂れたる樣、又なく美はし。

見巡り了りて後、愈此處を辭して、馬車に歸れば、雨再び沛然として至り、アボンの川面、左ながら秋の渡るに似たり。（六月一日）

ウヲリック、カツスル

ウヲリック、カツスルは、ウヲリック伯爵の居城也。負債整理の爲とて、今は某シンヂケートの手に落ち、一志の見料を徵して、廣く一般の縱覽を許せりと雖も、其の伯爵の居城たることは依然たり。城の由緒、極めて古く、紀元七八十年の頃、既に羅馬の勇將アグリコラに依つて、一城塞の築かれたることあり。後紀元四百四十七年に至り、一教會堂の敷地となり、次いで九百十五年に至り、アルフレッド大王の女エセルフレダ、初めて此に一城塞を築けり。爾來年所を閱すること凡そ一千年。其の間一壘倒れて、一塞を築き、東樓破れて、西翼を興し、主を代ふること幾度、戰ひに交はること幾十回、遂

に今日に及べり。ウヲリック、カツスルの名天下に聞え、旅客の杖を英吉利に曳く者、殆ど行いて訪はざるはなし。

僕は、レミントンの老人と共に、今日しも此處に着せり。先づ城門を入るに、蜿蜒と曲りくねりたる道あり。兩側には、高く石垣を築きたる樣、我邦の城の樣に異ならず。石には蘚苔蒸し、羅葛纏はり茂れり。世の治亂興廢を見たること幾度ぞや。雲を凌げる杉の大樹の下を過ぎて、突如として靑草地に布ける廣庭に出づ。三五の孔雀、揚々として其の間に遊べる、いと似つかはし。左に、居然たる一大厦立てり。先は本丸といひつべし。之に向ひて、二大壘あり。ガイ塔は彼れ、シーザー塔は此と、一一指さし示す。右の方にある小門を潛りて、外に出づれば、此に昔の城濠あり。濠とは名のみにて、今は水を湛へず　石南花一面に生ひて、目さむるばかりの紅白の花、盛りに咲き亂れたり。實にも石南花は英吉利の名花、其の到る處に多きは、我邦の櫻に比すべく、其の美

はしきは、牡丹に類へつべし。

半ば朽ちたる古城塞の間を過ぎて、更に進めば、局面俄に開けて、左の方目近く、アポンの流、緑樹紅花の影を醮して流るゝを見る。アポンに向ひ合ひて、花を植うること十反許り。紫のつゝましき、紅の驕れるなど、とりどり咲き香へり。花壇の背に一大溫室あり。白き枠に硝子張りつめたる上を、藤の蔓のからみつきて、今しもゆかりの色めでたき花房一面に垂れたり。此の溫室の中に、伊太利のさる敗墟より取寄せたりといふ、大理石造の大花皿を藏む。三千餘年を經たるものなりといふ。

僕は、今此の大花皿の下に立てり。見上ぐれば、藤、紫に匂ひ、見下せば、名も知れぬ草花、きらびやかに地に滿てり。眸を放てば、遙にアポンの流を見る。嗚呼三千年前の花皿の下に、昨日今日までは、名をだに知らざりし此のレミントンの翁と會し、此處にプランタジェネット家の勇士が苦戦の跡を弔ふこと、何等不思議の因緣ぞや。僕感慨無量、去らんと欲して、殆ど去るに忍びず。僅にデ翁に促されて、此處を出づ。

本丸といへる所に立ち歸りて、城内を見る。金鈕ふさはしき紺色の制服着たる案内の老人、能く語り能く笑ふ。彼れは三十年前、海軍下士として、日本に來れることありとぞ。頻にデ翁と日本の事を語る。彼は三十年前、此は四十年前に日本に居たるのみなれば、孰も僕などの知らざる日本なり。偶〻何事かを僕に尋ねて、僕の知らざるに會すれば、此の兩個の老物、打揃ひて頻に僕を嘲り笑ふ。

城内の各室を見巡る。古武器の陳列室に、日本の弓袋弓掛なんどあり。孰も葵の紋をつけたり。如何にして傳來したりけん、不審かし。貴賓寢室に至る。アン女王の崩せし所なりといふ。大客室に入れば、サキソンの猛將ガイの酒壺佩劍などあり。其の並外れて大なること、人間のものとしも覺えず。

暇なく案内せられて後、再び庭に出づれば、雨近しと覺えて、雲漸く低く、孔雀啼く

こと頻なり。前には氣づかで過ぎにし石橋の邊に、メーの花、雪の如きが見ゆ。

ガイス、クリツフ

古いことを言ふと笑ふこと勿れ。紀元一千百何年とやらんの昔、ウチリツクの邊にサキソン族の武將ガイなる者ありき。ウチリツク伯爵の女を娶りて妻とし、其の緣に依りて、自ら伯爵家を襲へり。第二(?)十字軍の起るや、一隊の手兵を提さげて、奮つて之に加はり、惡戰苦鬪の後、其の再び英國に歸るや、彼はウチリツクの側に一地を相し、自ら石を切りて家を造り、隱棲三年、其の將に命を終らんとするに臨みて、初めて此の地に留め置ける其の妻を見たりといふ。僕はガイなる者が、果して此の世に在りし人なりや否やを知らず。唯ガイの事蹟は、史に傳はり、詩に歌はれて、遍ねく人口に膾炙したるを知れるのみ。ガイス、クリツフは、實に彼が終焉の地と傳へらるゝ所也。

ウチリツク城を出でゝ後、僕はデビス老人と共に、馬車を驅つて、此のガイス、クリツフに向へり。此處も亦、平生人の縱覽を許さずと雖も、領主バーシー卿の好意特に命を家人に傳へて、豫て僕等の爲に、案內の者を派せらるゝことゝなり居たるなり。僕等の馬車門に入るや、果然待構へたる一老園丁は、急ぎ出で迎へて、僕等を導き進めり。

園丁に導かれて、門內に進むに、其の廣きこと例に依つて例の如し。試みに之を園丁に質せば、邸內の總面積四千エーカーなりといふ。四千エーカーは、我四百八十萬坪以上に當る。英吉利の貴族の屋敷の、馬鹿々々しくだゞ廣きこと、之にても推し測らる。列樹正しき小砂利道を過ぎて後、行手に見上ぐる許りの巨巖をくり拔きて、家居を仕つらへたるを見る。バーシー卿の今の邸宅は、別に其の側に建てり。此の邊の岩石は、わが鎌倉邊のと同じく、質柔くして、容易に切るべし。切りて石垣を築き柱を建つるに、前に切り取りたる儘に据うれば、幾歲月を經て朽つることなしと雖も、偶誤つて上下

を顚倒すれば、直に毀れ崩ると園丁の曰ふ。石にも亦自然の順序あるに似たり。

嗚呼、其のアボンの流に沿ひて、此の石窟の樹間に登えたるを見たる時、僕は實に中世の騎士が、所謂「魅せられたる城」に行き合ひたるも斯くやありけんと、思はざるを得ざりき。地は人烟を絶したり、樹は思ひの儘に茂れり、蔦は生へり、羅は絡れり、山の如き當面の大巖を、唯一通りの巖とのみ見てありしに、行きて其の端を回れば、巖の中に、其處に、薄暗き石室廣々と開け來る。園丁の一々樣子を語るあればこそ、夫とも知れ。昔のナイトなんどが、孤劍飄然、野道に行き落れて、偶此の邀にうろつき來らんに、誰かは此處に鬼などの住めりて、美はしき姫君を隱しつなど想ひ及ばざらん。試みに目を瞑づれば、スコット、サーバンテスなんどの中にて見覺えたる野武士の、わが前後左右に往來するを覺え來る。黑鎧を着けず、長劍を佩びず、脊廣鳥打帽にして、ひよろりと立ちたる我等の姿の、さても似つかはしからぬ事よ。

岩を抉りて、モンクの經を誦せる所あり。其の隣に厩あり。サキソン式の敗石いと古びたり。昔は幾十の軍馬アボンの風に嘯きけんに、今は寂として蹄の影だになし。厩と向ひ合ひて、モンクが麥酒を醸したりといふ穴小屋あり。其の隣は禮拜所とて、經壇立ちベンチ列べり。禮拜堂の壁に、猛將ガイが劍を按じて立てる等身の肖像を掛けり。等身といふと雖も、僕等が身とは等しからず、丈の高さ七尺に餘り、腕の長さ三尺に近し。此の像何年の昔に畫かれたるかを知らず、心なき人の爲に、一時其の上を白堊にて塗り潰され居たりしを、近き頃に至りて、之を剝ぎて、辛く今の樣に復したるなりといふ。

禮拜堂の下に、地を穿つて藏あり。モンクが其の造れる麥酒を藏めたる所なり。案内の人打笑ひて、昔は美酒に充ち居たらんも、モンク一たび去りて後、酒も亦亡くなりぬ、と曰ふ。デビス翁聞き咎めて曰ふ、モンクの居たりし時、酒は果して亡くならざりしかと。一同啞然として笑ふ。

ガイス、クリツフ

禮拜堂を出でゝ後、再び厩の傍を過ぎ、斷崖の腹に僅に刻める小徑を辿りて、其の背後に出づ。アボンの流に向へる所なり。アボンは、此處にても亦庭内を流る。雨大に至る毎に、水溢れて屢斷崖の腰を洗ふ。崖下に下りて、之を見るに、石に水の至れる高さを標し、此處に其の年月を記しあり。古きは千五百年代より始まれるを見る。

川に臨みて立てる絶壁の中に、欝葱たる綠樹に覆はれて、洞穴深さ八九尺、左右三間に餘れるがあり。三五の石階を拾うて、之に上り見るに、地濕やかにして苔蒸せり。是れガイが遠征より歸りて後、自ら切り開きて其の中に住める所なり。傳說に據れば、ガイは此處に隱遁して、深く自ら跡を晦まし、唯此の邊の情ある人の憫みを請うて、其の衣食を得たり。妻なるウチリック伯の女も、亦時々之に衣を給し食を與へしが、久しうして其の良人たるを知らず、ガイ愈其の命を終らんとするに臨みて、初めて事情を打明けて、其の妻を病床に招けりといふ。ガイが何故に爵位を棄て、城池を餘處にして、斯る處に隱れ住みけん、總に其の意を解し難し、愚に非ずんば狂のみと、デ翁の曰ふ。僕の曰く、ガイ若し無常を觀じて遁世したりとせば、日本に其の例甚多し。唯臨終に其の妻を招けるが如きは、聊か往生際の惡きに似たりと雖も、之にてガイが最期に多少の詩味を加へ得たるを見る。誠に是れ好詩料と。デ翁服せず。

ガイの隱棲、既に鎌倉式なり。此の洞窟に續きて、巖を穿てるモンクが遊歩の室といふものあるに至つては、愈以て鎌倉式たり。穴の高さ約三間、深さ七間、中に二尺四方の角柱を建つ、皆石を搏れるなり。曰ふ、昔モンクの瞑想に疲れたる者、來りて此處を歩せるなりと。禪僧の坐禪に倦める者、立つて禪堂内の土間に經行を行ふ。此の洞穴は、正しくモンクの經行を行へる所なるが如し。

アボンの岸に、參天の杉樹一株あり。十字軍の勇士が聖地より齎し歸る所といふ。又一位樹の老幹、兀として天を摩せるあり。其の側に井戸あり。名けて、ウキッシュ、ウエ

ガイス、クリツフ

ルといふ。ウキッシュ、ウェルとはよき名なりとて、デ翁がぶ〳〵其の水を飲む。曰くウキッシュ、ユー、ウェルを、わが腹に藏め了ると。所柄左ながら、禪僧の問答に似たり。

庭を行盡して後、邸後の大水車を觀る。アボンの流れを利して、水車を建てたるなり。ノルマン征服の頃より存せるものとて、其の名高し。ノルマン征服は千六十六年、今を距ること約九百五十年なり。此の水車ガイス、クリッフ名勝の一として、屢名家の筆に上るといふ。僕も亦念の爲に、之を筆に上すこと爾り。

邸内盡く見了りて後、ガイス、クリッフを出づ。デ翁更に園丁を勞して、ブラックロー丘に、ガーベストンの碑を吊せんことを求む。丘は一大牧場の中に在り。同じくバーシー卿の有にかゝる。青草を踏んで進むこと數百歩にして、丘の麓に出づ。大小の緬羊僕等の近づくを見て、逃走ること鹿の如し。老杉古松の下、參差たる荆棘を分けて、丘に上れば、此處に、十字架を四本の角柱に支へたる石塔あり。是れ即ちガが碑なり。ガ

はエドワード第二世の寵臣。寵を恃みて專横を極めたる結果、彼を嫉視せる大名の爲に首刎ねられたる者なり。碑腹に鐵板を嵌め、鐵板に碑文を刻す。其の文に曰く、

In the hollow of the rock was beheaded on the first day of July by barons lawless as himself, Pierre Gaveston, Earl of Cornwall, the minion of a hateful King in life and death, a memorable instance of misule.

千三百十二年七月第一日、生きて憎むべく、死して猶且憎むべき某國王の、嬖臣コーンウォールの伯爵ピアス、ガーベストンなる者、暴狀己に劣らざる貴族の爲に、此處此の石塔下の凹所に斬らる。——是れ記憶すべき失政の好一例也。

と。碑文とさへ言へば、死者の德を頌するに限りたるものと心得たる世の中に、之は又思ひ切つて、ガーベストンを罵しり、エドワード二世を罵しり、はては手を下したる大名等迄を罵り、當るを幸ひ、八つ當りに當り散らしたる勢、誠に天下碑文の絶唱也。塔と文と共に、ガイス、クリッフ先代の主グレートヘッド氏の手に成るといふ。

雨再び至らんとするに會して、倉皇として此處を去る。

ヒンチンブルーク城

バーナード夫人が家にて、午餐を終りし後、瀬山君僕を促して、共にヒンチンブルーク城に行かんことを勧む。乃ち瀬山君と瀬山君の女、名はツル、年十三四なるとを伴ひて出づ。城はサンドウキッチ伯の邸宅なり。

ザンドウキッチの名は、遥ねく我邦の人にも知らる。先づ弁當代りに代ふサンドウキッチなるものは、サンドウキッチ伯爵家の先、ジェミー、ツキッチャーなる人、賭博を好み、食卓に就くの暇も惜しとして、今の所謂サンドウキッチを作らしめて、手づかみに且つ食ひ且つ博戯を弄したるより、其の名に因みて、斯くは名づけたるなりといふ。次で布哇諸島をサンドウキッチ島と唱ふるは、初めて布哇に上陸したるカプテン、クックが、今の伯爵家の先代にして、時の海軍大臣たりしサンドウキッチ卿の名を取れるなりとぞ。遠祖のサ卿は、クロムウェルの軍に屬したる勇將たり。今のサ卿は、英國海軍中に知られたる一提督たり。サンドウキッチと聞きて、唯牛肉を麺麥に包みたるものとばかり解すべからず。

ヒンチンブルーク城に別の奇なし。其のだゝ廣きと、樹立の物古りたると、邸宅の儼しきとは、今改めて言ふを須ひざるべし。庭内森林あり、花園あり、畑地あり、温室あり、別に一地を畫して庭を作り、之に命ずるに「日本の庭」の名を以てせり。英吉利の人の日本を愛する者、動もすれば、邸内に日本式の何物かを作りて、之に日本の名を冠す。ストーンレー、アベの日本室の如き即ち夫なり。「日本の庭」といふものに入るに、中央に、小池を穿ち菖蒲を植ゑたり。之に我邦ぶりの橋を架け、橋の彼方に小さき築山を作り、其の上に小亭を仕つらへたり。所々に銅製の鶴を立て、又所々に飛石を置

ヒンチンブルーク城

き列ぶ、實にも日本の趣なきにしも非ず。主人の伯爵日本に來ること再三。樣々日本の品を買ひ集めて、優に小日本博物館を開くに足れりと聞く。

雨の驟に至るに會し、小亭に入りて、且つ烟を吹き且つ語る。湘山君の女、色は之を母に受け、形は之を父に受けたるに似たり。嬌嗔愿無邪氣に英語を語る、甚だ愛すべし。僕日本に來らんとするの意なきやを問ふ。笑つて答へず。湘山君、豫て長子が大學卒業の時を待ちて、一たび歸朝せんとするの意ありき。不幸にして、長子病みて逝き、今は其の望を絶ちたりと語る。甚だ悲し。嗚呼此の地日本を距ること八千餘哩。今日偶日本の人、日本の家に會して、驟雨の過ぐるを待つ。驟雨一たび過ぎ行かんに、又何の日か、此の草葺屋根の下に相會するを期し得んや。

雨は霽れぬ。乃ちいざとて、此處を立ち出づ。

後記の一——白耳義と南獨逸

倫敦出發

盡きぬ名殘を、わが親愛なる倫敦に惜んで、午前十一時、ビクトリア停車場を出發し、午後零時四十五分といふに、ドーバーに着いた。相も變らぬ乘替の面倒臭さ。車を出る、赤帽を呼ぶ、棧橋に出る、船に乘る、やッさもッさの揚句、漸く船が出ると、相も變らぬ横波が手ひどく左舷にぶつかッて來る。僕の曾孫か玄孫の時代になつたら、定めて、此處に海峽隧道が出來て、下の關門司の間に、橋が架つて、門司と釜山の間にも海峽隧道が出來て、花のお江戸の眞中から、霧の倫敦の眞中迄、一息に通し汽車で直行出來るやうになつても居るだらうが、彼等の祖父の頃には、却々そんな生柔しいことで行かなか

つたのである。今から百年さきの孫共に申し聞けて置くが、其の時になつて、昔を忘れて汽車が退屈なゝどゝ言つたら、夫こそ冥加に盡きて、汝等が祖父の樣に地獄に落ちること請合である、と思つて貰ひたい。

海峽を過ぎて、カレーに着くと、又乘り替の面倒が有つて、夫に今度は、稅關の荷物調べがある。見ると、大勢の乘客が、一時に荷物を持ち込んだので、稅關の中は身動きもならぬ雜沓。何したものかと茫然立つて居ると、金線の人つた稅關の帽子を被つた男がやつて來て、親切に僕の連れて居た赤帽を案内して、人をかき分けて、荷物を結界の上へ上げて呉れた。夫ばかりか、檢査の役人を態々呼んで來て、特別至急の取調を賴んだ上、僕が片言ばかりの佛語を、一々通譯して、荷物の中には一切課稅品がないと迄、言葉を添へて呉れた。お陰で、稅關の手續は存外早く片づいたので、僕は厚く禮を言つて、赤帽と共に汽車の方へ行かうとすると、先生小聲で僕を呼び止めて、「プール、ボアール、モシュア」と來た。まさかに稅關の制帽を着た奴迄が、金を欲がることはあるまいと思つたのが、僕の間違であつた。僕は忌々しさに、投げるやうに六片を與ると、彼は衆人環視の中で、一向平氣に之を受取つて、「メルシ、モシュア」と丁寧に挨拶して行つて了つた。思へば、日本人ほど、金に奇麗な國民が、又と世界中にあらうかい。

乘り移るが早いか、汽車は非常の勢で走り出した、佛國の國境を過ぎて、白耳義に入つたのは、午後二時二十五分。夫から一走りに、七時十二分プラッセルのミヂ停車場に着いた。

直に馬車を驅つて、グランド、ホテルに行くと、丁寧に迎へられて、三階の一室に案内せられた。室は奇麗であり、取扱は丁寧であり、晩餐に下りて見ると、巴里式の料理頗る旨い。ホテルの中に、汽車の切符賣渡場がある、小間物店がある。帳場に行くと、奇麗な繪端書やら、立派な金緣の案内記やらを一面に列べて、客の持ち去るに任せてあ

る。試みに、其の案内記を開くと、中は英佛兩文で認めて、寫眞版を一杯に入れて、ブラッセルを三日間に見物する都合に順序を立てゝ、名所の説明から、汽車馬車の賃金時間など迄、細々と載せてある。二つ三つ帳場の者に土地の事を尋ねると、一々親切に説明して呉れる。旅客に馴れた土地だけあつて、流石に萬事行き届いたものと、僕は一方ならず感心した。

食後ぶらりと外に出る。甚だ陽氣だ。ノール停車場の方へ行くと、見世物やら、鞦韆やら、活動寫眞やらがあつて、恐ろしい人出で、如何にも太平な國の樣が見える。試みに活人畫の見世物に入る。幻燈を用ひて、半裸體の女を見せる。見物人一同は頻に喝采して居る。日本の樣に、到る處で、女の脛を露したり、乳を出したのを見る處から來ては、一向何の變哲もないことだが、夫でも、見物は皆喜んで居る。喜んで居る者に向つて、強て喜んではいかぬと言つて、喧嘩する必要もないから、其の儘此處を出る。今度は、隣

の活動寫眞に行く。基督の一代記を、生れた時から十字架に上る所迄、如何にも實際の樣にやる。基督が海の上を渡る所などは、其の小波を分けてすら〳〵と歩く具合、實によく出來て居る。一劇濟んで出やうとすると、半札を呉れたが、夜が大分深けたから、半札は貰はずに、其の儘此處を出た。

此處迄は、僕も感心に感心を重ねて來たが、外に出て見ると、之はしたり、男と女とが聲高に罵り合つた揚句、今しも掴み合を始めてゐる。町次馬がわい〳〵騒いで居る。が、誰一人止めさうにもない。大道で女を擲るなどいふことは、決して倫敦では見られぬ所である。僕の感心は、此に至つて、やゝ小首を傾け出した。

歸つて人に聞くと、活動寫眞は半札から後が面白いのだといふ。成程さうかと、僕も聊か悟る所があつて、僕の感心は益小首を傾けた。

ウォーターールー

浩々乎として、平沙垠なく、夏に人を見ず。河水縈帶し、群山糾紛たり、――夫から何やらして、蓬斷え、草枯れ、凜として霜晨の如し、など、來ると、成程、如何にも、古戰場らしく聞えるが、ウォーターールーの樣に、畑が拓け、道が開け、遊覽用の汽車も通へば、ブレーヌラル停車場から馬車が頻々と出る、ホテルもあれば、立派な紀念碑も、彼方此方に立つて居る、とあつては、何だか一向古戰場らしくない。鳥聲有つて、山寂々たらず、夜正に短うして、風淅々たらず、魂魄結ばず、天沈々たらず、鬼神聚らず、雲霧々たらず、日光暖く、艸長く、月色苦へず、霜白からず、丸で李華の數百言一として當る所がない。迚ものことに、ホテルの親父余に告げて曰く、是れ古戰場に非ずと來るなら、世話のない所だ。

今朝、此處へ來る積で、停車場へ出懸けた時、ウォーターールー、ホテルの制服を着た若い男が、僕の姿を見ると、飛んで來て、ウォーターールーへ行くなら、切符を何處で、幾何出して買つて、何處を何う通つて汽車に乘るのだと、一々丁寧に世話を燒いて呉れた。世話の燒賃として、僕は十文ばかり心付をやると、此の男、何と言つても受取らぬ。白耳義にも感心な奴が居る哩と思つて居ると、暫く立つて、又やつて來て、ウォーターールーの名所舊跡を悉く馬車で連れて回つて、三フランだが賛成せぬかといふ。三フランは切で何も要らぬのかと、念を押して見ると、其の男右の手を胸の所に當てゝ、少し前に身を屈めて、私への心づけは、其の外にお心持次第と來た。其の口上の言ひ方が、變に落ち着いて、變に氣取つて見せた所、今思ひ出しても、眼さきにちらつく樣な。成程、先刻十文を斷つたのも、之だなと僕は初めて悟つた。

汽車がブレーヌラル驛に着くと、例の男は此方へ〳〵と案内する。不案内の土地に、

ウナータールー

英語の分る相手とあるので、僕は一も二もなく之に乗り移る。間もなく、六十許の老人夫婦と二十四五位の若い男女が、一所に此の馬車に入つて來た。老人の方は知らぬが、若い方の男は、エス某とて、倫敦の室内裝飾業。女はビー何某嬢とて、白耳義生れのあだッぽい娘であつた。――之は、後に今一度出て來る。

案内の男は、時々馬車を止めて、名所の説明をする。説明する毎に、自分だけ下りれば宜さゝうなものを、態々一同を下して、自分の前に皿陣を作らせて、而して演説口調でやり出す。英語は中々達者に話すが、時々文法違ひの妙な言葉を使ふので、其の度毎に一同は顔を見合せて、くす〳〵と潜び笑ひをする。何か言ひ出す前には、必ず「レーヂース、アンド、ジェントルメンス」と來る。

此の邊は、多く麥畑で、麥の間に野生の罌粟の花が眞赤に咲いて居る。遠くから見ると、其の花が風に煽られて、麥と見え隠れになる樣、如何にも美しい。道は磊々した敷

ウナータールー

石で、處によると、其の側をのろ臭い小さい汽車が通る。佛軍の立籠つた煉瓦造の家の跡がある。英吉利兵の陣地がある。巴里迄殆ど一直線に、四百何十哩とか續いて居るといふ大道がある。野戰病院に宛てたモンサンジャンの農家がある。アックスブリッヂ侯の片脚を埋めた墓がある。戰勝つて後、ウェリントンと、普魯西のブルーヘル將軍と會見した家がある。色々見た中で、僕の頗る異樣に感じたのは、此の大戰に英佛兩軍の司令本部であつた處が、其の間僅に一哩餘りを隔つる許りであつた一事である。一哩なら、ウェリントンとナポレオンとが、睨めッくらでも出來る。大戰と言つても、昔の大戰は今から見ると、小さなものであつた。

白耳義で建てた戰役紀念碑が、兀として麥畑の眞中に立つて居る。紀念碑と言つても、一通りの紀念碑でない。三稜塔のやうに築き上げた小山の上に、獅子の像を安んじたもので、此處迄上るに、石段の數が二百二十五ある、といふのを聞いても、凡そ高いこと

ウチータールー

が知れる。

僕等の馬車が、段々之に近づいて、其の獅子の像がはッきりと見え出した頃、案内の男は、突然例の「レーヂース、アンド、ジェントルメンス」と呼はつた。之を聞くとひとしく、ビー嬢とエス君とは笑ひながら、口の中で『又ジェントルメンスが始つた』といふ。氣の早い一方の老人は、早くも尻を浮かして、『又下りるのか』と聞く。案内の男は、そんなことに委細構はず、頗る勿體ぶつた手の振り方をして、遙に鞭を紀念碑の方に向けた。

『レーヂース、アンド、ジェントルメンス』と又やる。一同は何を言ふかと片唾を呑む。『諸君は英吉利の獅子と、白耳義の獅子と何う違ふか、御存じでありますか。』と、やり出した。一同は面喰つた。僕も亞弗利加の象と印度の象との相違なら、心得て居るが、獅子に至つては、曰く識らず焉だ。剽輕な老人、中々默つては居らぬ。『ゼー、スピーク、

ヂフェレント、ラングェージェス（話す言葉が違ふのだらう）』といふ。一同は笑つた。案内の男は愈濟し切つて、『英吉利の獅子は、尻尾が上に上つて居る。白耳義のは、下に下つて居りまする』といふ。人を馬鹿にするにも程がある。尻尾が上らうが、下らうが、そんなことに、「レーヂース、アンド、ジェントルメンス」もあるものでない。

時分だといふので、ウェーターールー、ホテルに入つて、中食をする。ホテルといふから、何な立派な家かと思つたら、唯日本のビア、ホールを少し綺麗にした位のものだ。白耳義は人が惡いとて、老人夫婦、中食の注文に、麥酒は幾何、麪包は幾何と、一々念に念を押す。食事が愈濟んで、僕が勘定を聞くと、ビー嬢一々之をフレミッシュ語に譯して聞かせて、勘定の〆高愈間違なしと見る迄、根問ひ葉問ひする。僕が大きな紙幣で勘定した爲、釣錢を受け取るに手間取つて、少し後に殘ると、エス君態々立歸つて來て、細かい釣錢の中には、能く、僞造紙幣や、通用せぬ舊貨を交ぜることがあるとて、

ウチータールー

ウチーダールー

一々僕の爲に、釣錢を嚴重に調べて呉れた。油斷も隙もなるものでない。

食事中、案内の男は、一同から金を貰つて、又もや、停車場へ、新しい客を迎へに出かけた。ホテルを出ると、近邊の婆々共、土産の畜端書や、ブローチや、洋杖などを賣りつけに來る。婆々共は大抵皆英語を使ふ。ホテルで、ナポレオンの寫眞入のブローチを買ひ取つたビー嬢は、此處で其の直段を聞くと、殆ど半分直にしかつかぬ。其の外國人の足もとを見てかゝること、之でも知れる。素見して置いて買はずにでも通らうものなら、此の婆々共、厄體もない惡口をいふ。いやもう實に薄氣味の惡い所だ。

紀念碑の丘に上る。一望千里、如何にも浩々乎として、平沙垠なきの趣がある。但し負に人を見ず所か、觀光の客やら、其の邊の農夫やらが、彼方此方に往來して、中々賑しい。獅子の眞下に行くと、成る程尻尾は下に向いて居る。此處を下つて、今度は畑中に在る佛軍の紀念碑を見る。流石は美術國の手に成つた紀念碑だけあつて、日本の樣

にのッぺらぼうな石一つ建てたのではない。搏天の巨鷲が今や兩翼を張つて翔らうとする所を、矢だか槍だかで、羽がひを縫はれて、足下に佛蘭西の國旗を踏まへた形を、大理石に刻んだものだ。夫が巍然として、山の樣に突ッ立つた白耳義の獅子像のすッと下の、低い畑地に、低く立つて居るので、如何にも悄然たる敗軍の將士を弔ふ趣がある。戰敗者の爲に建てた紀念碑としては、誠に似つかはしい上乘のものと、僕は深く感心した。

此の邊の者は、總じて、同情を佛軍の方に持つて居る。畜葉書でも、土産用のピンでも、ブローチでも、ナポレオンを刻したのは幾何でもあるが、ウェリントンのは、一つもない。僕と同行した老人夫婦は、頗る不平で、全體此の戰爭に何方が勝つたと心得て居るのだと、敎圍くこともあつた。

ブラッセル

ウォータールーの見物終つて、ブラッセルのミヂ停車場へ歸つたのは、まだ日の高い頃であつた。次手に市中を少し見物する積で、停車場から、右の方に見える有名なパレー、ヅ、ジュスチスに向ふと、エス君もビー嬢も、歸つたとて別に用はないから、案内かたゞ〳〵一所に行つてやらうといふ。ビー嬢は、佛語も英語も、乃至當地の下級の者が使ふフレミッシュ語も自由に話すので、道を聞くにも、買物をするにも、電車に乘るにも、一々通辯を勤めて呉れる。

パレー、ヅ、ジュスチスの壯大な建物を見て、白耳義の王宮の前へ出る。此の邊一帶に、家は大きいし、町は美しいし、道の兩側には、列樹が森のやうに繁つて居るし、誠に小巴里たるの名に背かぬ。公園に出ると、丁度音樂堂で合奏の最中とて、大勢之を取

り圍んで聞いて居る。實にも、繪畫を見るの快と、音樂を聞くの樂みは、歐羅巴中到る處、殆ど一厘錢を費さずして得られること、羨ましきの至りである。夫から見ると、日本などは憫れなものだ。僕等は、やゝ久しく此處に憩んで、一には樂を聞き、一には人を見て居たが、何だか來る人も來る人も、太平の國の民とて、何處となく生々した元氣な所がない。今少しできはきしても宜さゝうなものと、齒痒くなる。

日の暮方に、二人と分れてホテルに歸る。食事をすませて後、帳場に、今晩出立の旨を通じて、昨日以來の勘定をすると、又釣錢の中に、通用せぬ舊貨幣がある。現に、之と同じ奴を何處かで掴まされて、今しも帳場の脇の煙草屋で斷られたのを知つて居ながら、番頭は知らぬ振で、僕に支拂はうとするのである。僕は腹立しさに、斯んな金が通るものかいと突き返した。番頭は其の突返された金を、穴の明くほど眺めながら、上唇を尖がらかせて、糞落ちつきに落ちついて、『ホヮイ』と來た。ホヮイもオヮイもあるも

のでない。僕だつて、白耳義の貨幣の通る通らぬ位のことは、能く知つて居ると、高飛車をかけたので、番頭は澁々新しいのと取り代へて呉れた。世に佛蘭西と白耳義ほど、通用せぬ舊貨幣の多い所はない。

部屋に歸つて、荷物をしめにかゝると、外面は非常な騷ぎだ。何事かと思つて、窓を明けると、何時の間に點けたか、此の遊の戸々家々、孰も提灯を吊し、色硝子の洋燈を吊し、二階からも三階からも、老若男女バルコニーに出て、下を見下して居る。下はと見ると軍樂隊を先頭にして、兵隊やら、職工やら、何萬人といふ人數が、松明行列を組んで練つて行く。之を見んとて集つた者が、又道の兩側に身動きもならぬ程に押し詰つて居る。之がそろ〳〵と行列に尾して動くので、さしもの大通も肩摩轂擊、其の雜沓といふものは、誠に言語道斷である。凡そお祭騷ぎの盛なるものは、日本でも佛蘭西でも隙分見たが、之位のだゝら騷ぎは、未だ曾て見たことがない。日本の祝勝行列などは

之から見ると、丸で足もとにも及ばぬ。

午後十時三十分、愈出立の支度は出來た。が、此の大騷ぎで、馬車は悉、細長きこと僕の如き者すら、迚も通へ出ることは出來ぬ。餘儀なく横町の裏門に馬車を廻して、殆ど夜逃同樣の體で、ノール停車場に駆けつけた。十一時二十八分、愈汽車が出ると、乘り合せた「マタン」新聞社の男が、乘客一同に、一枚づゝ明日の新聞を呉れたので、之を讀むと、此の騷ぎの記事が殆ど第一面の全部を埋めて、之がブラッセル市中に公設電氣燈の出來上つた祝賀の騷ぎであることが分つた。十一時過に刷り上げた新聞に、今夜の記事を之ほど入れた手際にも感心したが、電氣の街燈が點くやうになつたからとて、此の大騷ぎをやる市民にも呆れ果てた。戰爭はないし、金はあるしといふので、何かなしに騷いで見たいものと見える。兵隊も、斯いふ時の外に使ひ道がないとは、有り難いやうな、氣の毒なやうな、分らぬやうな。

ぐッすりと汽車に寢込んで、何時の間に國境を越えたかも知らず。翌朝目を覺せば、早やシノ、メのストラスブルヒに着いて居た。迎へに來て呉れた友人と、預けて置いた小荷物を取りに行くと、昨夜國境の稅關の檢査に立ち會はなかつたので、未だ稅關に殘つて居るとのことだ。而して、早速電報をかけたところが、今日は日曜で、都合のよい汽車がないから、明日の午後でなくちや着くまいといふ。稅關を寢込んで通つたのは、重々の落度だが、夫にしても、汽車が日曜に休むなどゝは、失敬極まる。

白耳義一瞥

○

十日倫敦に居つたばかりで、直に日本人の英國觀といふものを、倫敦の眞中の新聞に投じた位のそゝつかしい僕だから、一晩ブラッセルに泊つた許りで、直に白耳義を論じた所が、別に不思議はあるまい。早い所がお慰みだ。

○

盡せぬ名殘を倫敦に惜みて、昨晩當ブラッセルに來て見たが、成程、人が小巴里といふだけあつて、如何にも巴里的だ。街道の具合から、公園の模樣、乃至は、大道に椅子を列べて、珈琲を召し上がる所まで、巴里そッくりと云つても、差支がない。唯違ふのは、人間の顏に、一點の生氣がない點だ。

○

道を歩くにも、ぶらり〳〵とやつて居る。店頭に番をして居る者も、春の日の長きにあぐんで見える模樣がある。公園に行けば、うろ〳〵と當度もなくうろついて居る若者が多い。路傍の椅子には、ぐッたりとさも所在なげに坐り込んだ女が夥しい。獨逸や日本の樣に、新興國の氣勢が、到る處に横溢して居るのとは違つて、如何にも齒痒い

物足らぬ心地がする。此の感じは、多少巴里でも倫敦でも起らぬでなかつたが、此處のは又一入甚しい。丁度共和時代から、帝政時代に移らうとした古羅馬の民が、こんなではなかつたらうかと思はれる。太平に馴れた羅甸民族は、盡く斯ういふ調子になるのではあるまいか。

○

嗚呼天下太平。――之が抑白耳義國民の元氣を奪ひ去つた大なる原因かも知れぬ。獨立したる國民とはいふものゝ、白耳義は僅に一中立國として存立して居るだけに、一國民としての活動は、殆ど全く無用である。製造工業が盛であらうが、文藝學術が進んで居らうが、國と國との接觸する所に、其處に、政治的の理想がない爲に、所謂國民の精神なるものは全く萎靡し去つて居る。丁度恐ろしいお人よしの金持の隱居が、終日で近所の若い者同士喧嘩を始めたのを見物して居るやうなもので、買つた植木に怪我あらせまいとて、仲裁にも出て行くことが出來ず、さりとて隣の八公を助けて、近所の義理を立てる甲斐性もない。先づは事なかれかしと、避けて歸つて、早く孫の顏でも見やうとするが落だ。

○

白耳義は、殆ど、僕の理想の國として居た所であつたが、來て見て全く愛想が盡きた。夫れ、國民的生命のない、而して國民的競爭の圈外に立つた國は、動もすれば文弱に流れる。唯樂むことを知つて、もがくことを知らぬ。勝氣の多過ぎるのも困つたものだが、之が全くないのも亦甚困る。白耳義は、即ち其の弊を受けたものと、僕は一晩泊つて見て、確かにさう認めた。

○

巴里や倫敦から、此處に來て見ると、遊樂の地の多いこと、建築の立派なこと、道路

白耳義一瞥

の整備したこと、料理の進歩して居ること、音樂の發達して居ること等、誠に驚くに堪へたりであるが、之と反比して、人間の不作法極まることも亦驚くに堪へたりである。巴里でも倫敦でも、僕は三等の汽車に乘つて、未だ曾て不快を感じたことはなかつたが、此處の三等列車と來ては、列車の粗末なばかりか、其の乘客の禮儀を解せざること、實に言語に絶して居る。此處では、佛語が國語となつて居るが、下等の賤民はフレミッシュ語を使ふ。夫を彼此といふではないが、其の僕等に分らぬに乘じて、樣々のことを高聲に罵りわめくに至つては、不快極まる。僕がウォータールーの古戰場で道づれになつた若い男女と、公園を散歩して居ると、何とか彼とか言つて、ひやかす者一再に止まらぬ。こんなことは、決して巴里や倫敦にない。殊に外國人と見ると、動もすれば金をねだるばかりか、乘ずべき隙だにあらば、釣錢をごまかすか、不當の酒手を貪る。僕が泊つた堂々たる大ホテルでさへ、釣錢の中に、通用せぬ古錢を交ぜやうとしたので、僕は一喝を加へてやつた。顧みて倫敦を思ふと、嗚呼、倫敦は實に君子の國であつた。

○

僕は、大失望を以て、今晩此處を引き上げて、獨逸に向ふ積りである。僕の英國觀はちと早過ぎたとて、山本大將に冷かされたが、此の白耳義觀も或は又誰かに冷かされるか知れぬ。冷かされる程ならば、白耳義に取つて幸である。（六月二十三日ブラッセルにて）

南獨の三日

○

ブラッセルを出て、ずッと南に下つて、アルサスの首府ストラスブルヒに行つて見る。大分北獨逸と樣子が違ふ。此處に、日本の學生が二三十人も居るさうな。

○

南獨の三日

此處で、不思議なことを聞いた。此の州では、新聞記者が禁錮の刑に處せられると、半日だけは、自宅に居ても差支がないことゝなつて居る。夜は、無論獄内に泊らなければならぬが、午後の一時から六時迄は、勝手に外に出歩いても構はぬ。夫ばかりか、獄内へ妻君がやつて來て、飯の世話をしたり、友人が尋ねて行つて、世間話をする位のことは、公然と許されて居るさうな。現に、僕が尋ねた友人某君の知合の記者などは、禁錮の刑を受けながら、午後には、平氣で社に歸つて、原稿を書いて居たといふ。監獄も之ほど暢氣に出來上ると、新聞記者は大に助かるがと、僕は一方ならず羨ましかつた。

○

ストラスブルヒは新開の市街で、目下續々新築の家屋が出來上つて居る。新開地と言つた所が、市の方で豫め市街の外廓を區切つて置いて、之は形ばかりの城壁を同らして、其の中へ、縱横に街道を作つてあるのだから、其の街道に沿つて、然るべき家を作ることになつて居る。大森や新宿附近の新開地の樣に、盲滅法界に飛んでもない山の上や、森の陰に、銘々勝手に家を作つて、道路があらうが、無からうが、そんなことに頓着しないのとは、餘程趣が違ふ。一面草茫々とした野原の眞中に、頻に家を建てゝ居るから、此處等はもう市外かと聞くと、いや此の邊は、まだ〳〵ずッと城壁の中に入つた所で、現に草こそ生えては居れ、此の野原の中に、坦々たる大道路が既に貫通して居るのだと言ひ聞かされた。いくら南の方でも、獨逸は何處迄も獨逸式だ。

○

此の町の家々には、每戸街道に向いた二階の雨緣に、植木鉢を列べたり、木蔦を這はせたり、頗る小綺麗に飾り立てゝある。丁度今麥や櫻草の咲く頃として、例の菩提樹の列樹美しき大道の兩側に、高く紅白咲き亂れた樣々の花を見るのは、實に綺麗だ。此の雨緣の裝飾なるものは、此の土地の名物の一つで、其の裝飾の巧拙醜美を、市の吏員と園

藝家とで成立した一種の半官半民の協會で鑑査して、上手に出來た者に、御褒美を下さることになつて居る。賞を懸けて鼠の死骸をお募り遊ばさるゝとは、以ての外の相違である。

○

今日此處を出立といふので、昨夜馬車を雇ひに出ると、何處にも馬車の影が見えない。夫から夫と尋ね回つて、とう〳〵停車場近行つたが一臺もない。偶一二臺居酒屋の前に居るのを捉へて談判すると、御者は笑つて相手にしない。癪にさはつて巡査に聞けば、今朝から御者のストライキで、ストラスブルヒ全市中に一臺も御座らぬとの挨拶に、僕等は遥々の體で宿に歸つた。今朝は友人に手傳つて貰つて、二人で革嚢を擔いで、停車場に驅けつけた始末だ。如何なストライキ好きの僕も一方ならず參つた。

○

ストラスブルヒから少し北に戻つて、ウルツブルヒに來る。此處の電車には、車掌といふものがなくて、無論乘車切符もない。お客は、勝手に車内に備へた小さな函へ賃錢を投げ入れるだけだ。維也納では、普通の賃錢の外に、車掌へ心付として五厘か一錢づつ呉れてやるのが、普通になつて居る。同じ電車の賃錢の支拂方にさへ、之位の相違がある。電車自身の、國々で違ふのも、無理のない話だ。但し、乘替切符に三つも四つも鋏を入れて貰つて、車を出る毎に、一々切符を車掌に御返納申し上げるといふやうな、小面倒な日本の手續は、歐羅巴中で見たことがない。敢て電車の會社を咎めるのでない。此の如き小面倒を必要とする我國民の、自治の精神のないのに呆れるのである。

（六月二十五日ウルツブルヒにて）

後記の二——露國横斷記

維也納の旅行券裏書

歸りの露國横斷は、墺地利の維也納から始まる。

日本から行くにも、墺地利から行くにも、苟も、一たび足を露國に踏み入れんとする者は、必ず先づ、其の旅行券に露國領事の裏書を頂戴しなければならぬ。凡そ露國で、旅行券のやかましいことゝ言つたら、今更事々しく語り出すだけが野暮である。之なくんば、一歩も國境の中に入ることは出來ず、身既に露國に在る者は、一歩も國境の外に出ることが出來ぬ。樣子を知らずして、うッかり出かけると、之が爲に、國境から追返さるゝ樣な憂目に遭ふ。僕が此の春出かけた頃には、敦賀浦潮間の船の中で、之を船長

に預けて、浦潮到着の後裏書をして貰つても、差支はなかつたが、近頃は又、何でもかでも裏書がなくては通れぬことになつて居るさうな。敦賀に、露國領事館のない今日、斯な六かしいことを言ふのは、言ふ方が無理と僕は信じて居る。無理は無理でも、兎に角、之なくては通さぬとあらば、先づ泣く〳〵裏書を受けることゝする。受けた裏書が、國境に入る時に調べられる、宿に着くと調べられる、旅をすると調べられる、幾日か一つ所に滯在して出發すると調べられる。而して愈露國を立ち出るといふ時には、又新しい裏書を受けて、之が國境の出口で調べられる。其の外、何かの都合で警察が必要と認めた時は、何時何處で調べられるかも知れぬ。旅行券は、實に露國に旅する者の、命よりも大事な品である。

此の命より大事な旅行券の裏書を求めんが爲に、僕はウルップルヒから維也納に着くと其の儘、荷物をホテルに投り込でおいて、先づイの一番に、馬車を露國領事館に飛ば

せた。行つて見ると、うすら淋しい大きな建物の中は、森閑として人の氣はひもせぬ。やつと受附らしい男が、唯一人悄然と立つて居るのを見つけて、旅行券のことを手眞似交りに話すと、其の男、何やら壁に張つた掲示を指さして、何やら言ふ。分らぬ。意味の分らぬ許りでない、獨逸語だか露西亞語だかも分らぬ。念の爲に掲示を見ると、露西亞語で何やら書いてある。僕は露西亞語が分らぬといふ積で、「ニエズナイ、バルスキー」とやる。ニエズナイことも亦苦だしいものだ。其の男漸く合點が行つたと見えて、つかつかと掲示の傍へ歩み寄つて、其の三行目か何かを指で押へた。見ると、「一時半より三時半迄」といふことだけ分つた。さては、執務時間が、一時半から三時半迄だなと悟つて、ハラショーやら、ニイチエウチやら、スパシーヲやら、プラゴダリユスやら、凡そ知つてゐる限りの露西亞語で挨拶して、此處を出た。時計を見ると、まだ午前十時。一時半迄には中々間がある。全體一時半から仕事を始めるなどゝは、如何に露西亞でも餘り

暢氣過ぎる。そんなに暢氣にしていくものならんやと、僕は私に思つた。

仕方がないから、銀行に行つて、兩替と信用狀の拂渡を賴む。其の事務ののろ臭くして、何時迄經つても埒の明かぬこと、迚も氣の短い僕には我慢が出來ぬ。露西亞の貨幣を呉れといふと、無いと言ふ、有るといふ、何方だか分らぬ。無いと言ふかと思ふと、今一度調べて見やうといふ。調べたら、少し足りないから、何處やらへ取りにやるといふ。取りにやつた使の歸らぬ中、又丁度有つたといふ。人を突いたり、引いたり、散々な目に遭はせて、漸く三百留ばかり呉れた。

今度は、萬國寢臺車會社へ行つて、莫斯科行の寢臺を注文する。ワルシャウ迄なら、直ぐ取つて置けるが、夫から先は聞き合せぬと分らぬといふ。何を聞いても、一向踏み込んで敎へて呉れず。動もすれば客を捨て置いて、外の仕事にかゝらうとする事務員を、漸く引つ張りつけて、やつと、明朝迄に電報で聞き合せて呉れと賴んだ。やれ〳〵、英

吉利を出て以來、何處へ行つても、小癪にさはること許り。僕はぷん〳〵と怒つて、此處を出た。

維也納は美人の名所と聞いて居たが、成程町を通つて見ると、居る、居る、突當る程居る。居ることは則ち居るが、領事館と、銀行と、寢臺車會社とで、散々むか腹を立てた僕は、ぷん〳〵して脇目もふらずに、一先ホテル、プリストルに歸つた。

ホテルに歸つて、食事をすませて、新聞を二三枚讀んで見たが、中々一時半にはならぬ。忌々しなんど言ふ許りでない。せうことなしに、せめてもの暇潰しと、ホトルを彼方此方ぶらつくと、僕が戸口の方に向ふ毎に、戸口の開閉を承はる可愛いボーイが、僕を、出て行く者と心得て一寸手を擧げる。僕は之を尻目に見て、又中に立ち戻る。ボーイは口に手をあてゝ、今一人のボーイと顔を見合せて居る。日本なら、舌を出すか頭を掻いて見せる所だ。ぶら〳〵と又入口に出る。玄關番の印度人が馬車を呼ばうかと尋ね

る。一時だと言つて手を振る。玄關番は變な顔して引込む。ボーイが又口に手をあてる。僕は又中へ戻る。

斯いふことをして居る中に、漸くのことで一時十五分となつた。今は我慢にもホールに居堪まらぬ。急ぎ馬車を命じて、露國領事館に馳けつけて見ると、今朝は靜まり返つて居た入口の戸の中には、開館遲しと待ち佗ぶる人々が、大分立つて居る。若い氣の利いた書生が居る。汚ない扮裝に汚ない袋を提げたムヂークが居る。妙な頬被見た樣な頭巾を着た女が居る。背の高い商人風の男が居る。石でも投り込んだら、鵠の一羽も飛び出しさうな野生の顎を、顏中一面に生した男が居る。猶太人らしいのが居る。猶太人は鼻の恰好で直ぐ知れる。獨逸人と雜種らしいのが居る。何處やらできはきして居る。其の外まだ大分居つた。孰も言合せたやうに、おろ〳〵と僕の顏を見る。僕の顏が餘程氣に入つたものと見える。

頓て一時半きッかりに事務所の戸が開いたので、一同どや〳〵と入る。正面に陀羅尼叩五斤ほど噛潰したといふ樣に、苦り切つた無愛想極まる人が立つて居る。領事殿に相違ない。之が一同から旅行券を受け取つて、裏書をする、版を捺す、手數料を取る、記錄に書入れる。夫を一切無言で、さも五月蠅さうにする。偶何か尋ねると、頭から噛みつくやうな返事をする。餘りの無愛想に、初は一同恐れ慄いて居たが、段々勝手が分るに隨つて、追々くす〳〵と笑ひ出す者が出來た。記錄へ何か書入れる爲に後向になつた時は、一同皆顏を見合せて笑ひ交す。中には、鼻の先へ拇指をあてゝ、變な手附をして見せるのもあつた。

僕の順番になる。僕は三留拂つて、恐る〳〵旅行券を出す。領事は受取つて、帳面に何やら書き入れて後、僕に何か言ふ。好漢惜むらくは露語を知らずで、僕には分らぬ。一寸佛語で質問する。領事は、長々と何やら說明する。矢張り分らぬ。僕は斯ういふ時

の用意にとて、豫て練習して置いた通り、一寸肩をゆすり上げて、兩手をばッと開いた。領事は苦い顏して、僕の旅行券を後回しにする。

今度は、若い書生の番になる。領事は旅行券を讀んで見て、宗敎は何かと聞く。書生は分らぬ樣な顏をする。領事はぷん〳〵して、聞き直す。まだ分らぬ。今度は聲を勵まして、希臘敎か、羅馬敎か、プロテスタントか、猶太敎か、夫とも佛敎かと怒鳴る。學生は言下に、「無宗敎」と勢ひよく答へる。一同はどッと笑つた。人の惡さうな毘むしやの男、領事が後向きになつたのを見濟して、一寸手を拍つ眞似をする。

追々に裏書が濟んで歸つて行くが、僕と例の無宗敎の先生とは段々と後に殘る。何なることかと心配して居ると、書記生らしい丸顏の恐ろしい愛嬌の宜い若い人が出て來て、待合せて居る一同に愛想よく色々話しかける。之が丁度僕の側に來合せたのを幸ひ、僕の旅行券のことを尋ねると、早速領事と何やら語り合つた後、はッきりとした佛語で、